

# 吉武遺跡群 IV

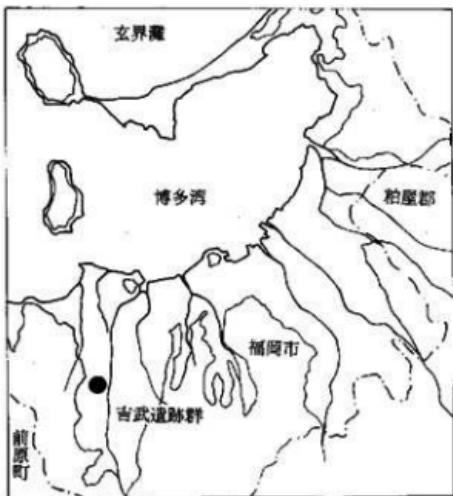
市道田・飯盛線関係埋蔵文化財調査報告 II

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第194集

1989

福岡市教育委員会

YOSHI TAKE  
**吉武遺跡群IV**



遺跡番号 YST  
遺跡調査番号 8415

1989

福岡市教育委員会

## 序

近年、福岡市の西南部に広がる早良平野では、住宅、道路、学校建設、また圃場整備などにともなう数多くの埋蔵文化財の発掘調査が行われています。

吉武遺跡群はこの早良平野の西南部、室見川の左岸に位置します。昭和56年から行われた圃場整備にともなう調査では、「早良王墓」とされた甕棺墓地、桶渡の墳丘墓など弥生時代の貴重な発見が相次ぎました。

この遺跡群を横断して市道田・飯盛線が建設されることになり、昭和57年度から市土木局の委託を受け発掘調査を行ってきました。その成果の一部についてはすでに報告を行っております。

本書は昭和59年度の市道建設にともなう2次調査を報告したものです。吉武遺跡群としては第5次調査に当たります。この調査では古墳時代中期の掘立柱建物、土坑などの遺構と、須恵器・土師器を中心とした多量の遺物を検出いたしました。

本書が埋蔵文化財への理解と認識を深める一助となり、また研究資料としてご活用いただければ幸いです。

最後に、調査から本書の刊行に至るまで、多くの方々のご理解とご協力賜りましたことに対し、心から謝意を表する次第であります。

平成元年1月13日

福岡市教育委員会

教育長 佐藤 善郎

## 例　　言

- 1 本報告は市道田・飯盛線建設に伴い1984年3月から5月にかけて調査を行った福岡市西区吉武（よしたけ）遺跡群の第5次調査に関わるものである。
- 1 市道田・飯盛線建設に伴う調査は3次にわたって行われており、これはその2次調査にあたる。
- 1 吉武遺跡群の調査はこれまで11次にわたって行われており、その成果の一部は以下の3冊の福岡市埋蔵文化財調査報告書として刊行されている。

- I 「吉武遺跡群 I - 市道田・飯盛関係埋蔵文化財調査報告 I」第127集 1986
- II 「吉武高木」第143集 1986
- III 「吉武遺跡群」第187集 1988

本報告はこの遺跡群の4冊目の報告書となるため『吉武遺跡群IV』とした。また事業的には第127集の続集となる。

- 1 遺構名称は掘立柱建物-SB、井戸-SE、土坑-SK、溝-SDと略し、これを遺構番号の前につけた。井戸と土坑については遺構検出時の通し番号をそのまま用いた。このため遺構ごとの通し番号とはならない。ほかは遺構ごとの通し番号である。なおピットは各区ごとの通し番号とし、例えばA区P10のように表記した。
- 1 本書に掲載した遺物は材質を問わず001~474の通し番号とした。図版の遺物番号は本文中のものと同じである。また巻末には掲載遺物の一覧と、福岡市埋蔵文化財センターにおける登録番号を表示示した。図版中の遺物写真の縮尺は約1/3としたが、遺物の大きさにより別縮尺をとったものも多い。
- 1 本書に関する実測図・写真などの記録類、出土遺物はすべて福岡市埋蔵文化財センターに収蔵・保管している。
- 1 現場における実測は濱石哲也、赤司善彦、岡部裕俊、佐藤一郎が当たった。写真撮影は濱石、赤司が行った。
- 1 遺物の実測・製図は濱石、林田憲三、久保寿一郎が当たった。遺構図の整理・製図は濱石、村上かをりが行った。遺物の写真撮影は林田による。
- 1 写真的現像・洗付けは濱石、黒岩美紀子があたった。
- 1 本書の執筆は下記の通り分担した。

4-2) SE20・27、4-3) SK01~04・21.....	林田
4-3) SK10~14・28.....	久保
上記以外の章・項目.....	濱石
- 1 卷末の遺物一覧表は林田、久保が主として作成した。
- 1 本書の編集は濱石が行った。

## 本文目次

	本文頁
1はじめに	1
2遺跡の位置と歴史的環境	3
1) 遺跡の位置	3
2) 周辺の遺跡	3
3) これまでの吉武遺跡群の調査	5
3調査の概要	6
4検出遺構と遺物	7
1) 堀立柱建物	7
2) 井戸	9
3) 土坑	16
4) 溝	74
5) その他の出土遺物	75
5おわりに	75

## 図版目次

図版1	1) 調査区全景（東上空から）	2) 調査区全景（南上空から）
図版2	1) 調査区全景（西から）	2) S B03・S D01（北東から）
図版3	1) S B01（西から）	2) S B02（西から）
	3) S B04（南東から）	4) S B07（東から）
図版4	1) S E19遺物出土状況	2) S E19完掘後
	3) S E20遺物出土状況	4) S E20完掘後
図版5	1) S E23遺物出土状況	2) S E23完掘後
	3) S E27土層	4) S E27完掘後
図版6	S K01 1) 北から	2) 東から
図版7	1) S K03遺物出土状況	2) S K03完掘後
	3) S K04遺物出土状況	4) S K04完掘後

- 図版8 1) S K05・06・07、S E30完掘後（南から）  
     2) S K05下層遺物出土状況（北西から）
- 図版9 S K05 1) 上層遺物出土状況     2) 南側落込み遺物出土状況  
     3) 平鏡（281）出土状況     4) 子持勾玉（278）出土状況
- 図版10 1) S K06・07遺物出土状況     2) S K08遺物出土状況  
     3) S K09完掘後     4) S K10完掘後
- 図版11 1) S K11・12遺物出土状況     2) S K11・12完掘後  
     3) S K13遺物出土状況     4) S K13完掘後
- 図版12 1) S K14遺物出土状況     2) S K14完掘後  
     3) S K17・18遺物出土状況     4) S K17・18完掘後
- 図版13 S K15・16 1) 北から     2) 東から
- 図版14 1) S K21遺物出土状況     2) S K22遺物出土状況  
     3) S K28遺物出土状況     4) S K29完掘後
- 図版15 出土遺物1     図版25 出土遺物11
- 図版16 出土遺物2     図版26 出土遺物12
- 図版17 出土遺物3     図版27 出土遺物13
- 図版18 出土遺物4     図版28 出土遺物14
- 図版19 出土遺物5     図版29 出土遺物15
- 図版20 出土遺物6     図版30 出土遺物16
- 図版21 出土遺物7     図版31 出土遺物17
- 図版22 出土遺物8     図版32 出土遺物18
- 図版23 出土遺物9     図版33 出土遺物19
- 図版24 出土遺物10     図版34 出土遺物20

## 挿 図 目 次

本文頁

第1図 吉武遺跡群と早良平野の主な遺跡	2
第2図 吉武遺跡群調査地点	4
第3図 S B01・02・03・04	8
第4図 S B05・06・07	9

第5図	S E 19	10
第6図	S E 19出土遺物	11
第7図	S E 20・23	12
第8図	S E 20出土遺物	13
第9図	S E 24・27・30	14
第10図	S E 24・27・30出土遺物	15
第11図	S K01	17
第12図	S K01出土遺物 1	19
第13図	S K01出土遺物 2	20
第14図	S K01出土遺物 3	22
第15図	S K01出土遺物 4	23
第16図	S K01出土遺物 5	24
第17図	S K01出土遺物 6	26
第18図	S K01出土遺物 7	27
第19図	S K01出土遺物 8	28
第20図	S K01出土遺物 9	29
第21図	S K03・04	30
第22図	S K03・04出土遺物	31
第23図	S K05	32-33間折り込み
第24図	S K05出土遺物 1	34
第25図	S K05出土遺物 2	35
第26図	S K05出土遺物 3	36
第27図	S K05出土遺物 4	37
第28図	S K05出土遺物 5	39
第29図	S K05出土遺物 6	40
第30図	S K05出土遺物 7	42
第31図	S K05出土遺物 8	43
第32図	S K05出土遺物 9	44
第33図	S K05出土遺物 10	47
第34図	S K06・07	48
第35図	S K06・07出土遺物	49
第36図	S K08	50
第37図	S K08出土遺物	51

第38図	S K09・10.....	52
第39図	S K09出土遺物.....	52
第40図	S K10出土遺物.....	53
第41図	S K11・12.....	54
第42図	S K11・12出土遺物.....	55
第43図	S K13・14.....	57
第44図	S K13・14出土遺物.....	58
第45図	S K16.....	61
第46図	S K16出土遺物 1 .....	62
第47図	S K16出土遺物 2 .....	63
第48図	S K16出土遺物 3 .....	64
第49図	S K16出土遺物 4 .....	64
第50図	S K17.....	65
第51図	S K18.....	65
第52図	S K18出土遺物.....	66
第53図	S K21.....	67
第54図	S K21出土遺物.....	68
第55図	S K25・26・28・29.....	69
第56図	S K28出土遺物.....	70
第57図	S K29出土遺物.....	71
第58図	その他の土坑出土遺物.....	72
第59図	S D01出土遺物.....	73
第60図	ピット・表土出土遺物.....	74

## 付 図

吉武遺跡群第5次調査遺構配置図

## 表 目 次

	本文頁
第1表 吉武遺跡群調査一覧	5
第2表 掘載遺物一覧 1	79
第3表 掘載遺物一覧 2	80
第4表 掘載遺物一覧 3	81
第5表 掘載遺物一覧 4	82
第6表 掘載遺物一覧 5	83
第7表 掘載遺物一覧 6	84
第8表 掘載遺物一覧 7	85
第9表 掘載遺物一覧 8	86
第10表 掘載遺物一覧 9	87
第11表 掘載遺物一覧 10	88

## 1 はじめに

福岡市西南部の都市化は近年来著しく、それに伴う道路の整備も急ピッチで行われている。早良区田から室見川に架橋し西区大字飯盛に通じる市道田・飯盛線もこの一例であり、1981(昭和56)年土木局道路建設課から教育委員会文化課に対して、この路線内の埋蔵文化財の有無について照会がなされた。路線予定地一帯は吉武遺跡群に含まれており、圃場整備に伴う発掘調査が開始されていた。文化課は同年11月に1983年度工事予定地について試掘調査を行い、ほぼ全域で遺構・遺物を確認した。そして土木局と協議の結果、翌年の1982年9月から1983年2月にかけて発掘調査を行った(田・飯盛線1次—吉武遺跡群第3次調査)。この調査の成果についてはすでに報告がなされている(『吉武遺跡群I—市道田・飯盛関係埋蔵文化財調査報告書I』福岡市埋蔵文化財調査報告書第127集 1986)。さらに1983年10月、この1次調査の西側延長部について試掘調査を行い、同様の結果を見たため発掘調査を行うこととした。これが今回の報告に関わるもので、1984年の3月に表土剥ぎを開始し、4月13日から5月31日にかけて発掘調査を行った(田・飯盛線2次)。以後整理に入ったが、諸事情で今日まで報告が遅れた。今回の調査は吉武遺跡群の第5次調査に当たりく詳細は2-3)を参照)、特に必要のない限り田・飯盛線2次の名称は以後の文中では用いない。なお田・飯盛線3次調査は1985年度に太田遺跡で行われている。

今回の発掘調査・整理体制は以下の通りである。

**調査委託** 福岡市土木局道路建設課

**調査主体** 福岡市教育委員会文化部埋蔵文化財課(前文化課) 第1係

生田征生(前文化課長) 柳田純孝(課長、前係長) 折尾学(係長)

岡島洋一(前庶務) 岸田隆(庶務)

二宮忠司(調査) 渕石哲也(調査・整理、埋蔵文化財センター)

**調査補助** 赤司善彦(現九州歴史資料館) 岡部裕俊(現前原町教育委員会) 佐藤一郎(現福岡市教育委員会) 上敷領久(國學院大学大学院)

**整理補助** 林田憲三(中村学園大学講師) 久保寿一郎(九州大学大学院) 村上かおり

調査に関しては辯光雄氏をはじめとする作業員の方々、整理については木村絹子・神田洋子・藤信子・島崎純子氏等整理作業員の方々の協力を得た。また報告書作成に当たって武末純一、中村勝、柳沢一男氏のご教示を得た。記して感謝したい。



第1図 吉武遺跡群と早良平野の主な遺跡 (1/5万)

## 2 遺跡の位置と歴史的環境

### 1) 遺跡の位置

玄界灘をへだて朝鮮半島および大陸と面する福岡市には、西から糸島（今宿）・早良・福岡・柏屋の大小平野が博多湾を囲むようにして広がる。これらの平野は山塊・丘陵によって分断され、各々が独自な自然・歴史的環境を備えている。このうち西南部に位置する早良平野は山塊・丘陵を隔て西の糸島平野、東の福岡平野にはさまれ、南は佐賀県との境をなす背振山脈にはばまれている。この背振山脈に源を発する室見川が平野中央を北流し、博多湾へとそいでいる。平野には第三紀丘陵・洪積台地が点在し、また北辺には砂丘が形成されている。しかしその多くが室見川を中心とした河川による沖積地となっている。

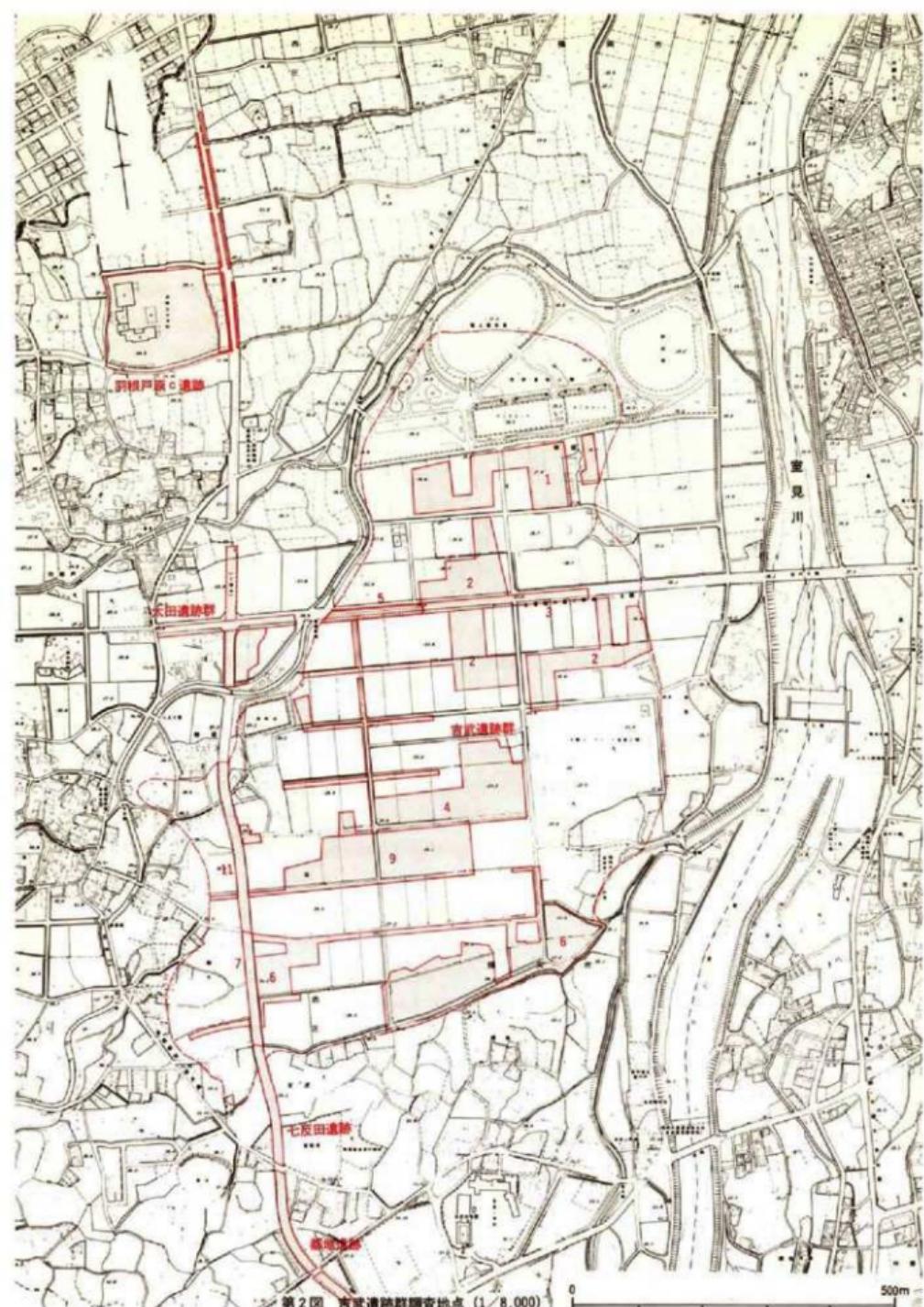
吉武遺跡群はこの早良平野の中央西寄り、飯盛山から派生する標高20~30mの扇状地上に立地する。室見川はこの遺跡群の東側を北流し、また糸島との境をなす日向岬に源を発する日向川が、遺跡の西側から北側を巻き込むように流れ室見川にそいでいる。行政区画では福岡県福岡市西区大字吉武、大字飯盛にまたがり、国土地理院発行の5万分の1地図「福岡」の北から28.5cm、西から13.2cmを中心とした最大南北1,200m、東西850mに広がる。総面積は約47万m<sup>2</sup>。遺跡群内は現在もおもに水田として利用されている。

今回の第5次調査はこの遺跡群の北辺西側寄りにあたり、3次調査と合わせ遺跡群を東西に横断することになる。

### 2) 周辺の遺跡

早良平野では藤崎、西新町、五塔山などの遺跡が古くから知られていたが、本格的な考古学的調査が開始されたのは1967年の有田遺跡からといえよう。これは福岡市の都市化が西に波及してきたことによるもので、以後は宅地開発・道路建設・学校建設・公園整備などに伴う発掘調査が絶え間なく行われている。その結果、平野外縁の丘陵地、中央沖積地、洪積台地、博多湾に面した砂丘上で先土器時代から近世にいたる多数の遺跡が確認され、同時に膨大な資料も蓄積された。しかしそれとひきかえに調査後の遺跡のほとんどが消滅を余儀なくされている。

今回の調査のメインとなった古墳時代前・中期の遺跡は第1図に示した。室見川右岸では藤崎遺跡、西新町遺跡、有田遺跡で前期の集落・墓地などが検出されている。他に原遺跡群では水利施設が、田村遺跡群、四箇遺跡群など多くの遺跡で遺物の出土がみられる。昨年調査された拝塚古墳は前方後円墳であることが判明した。左岸では北の拾六町ツイジ遺跡、湯納遺跡では水利施設が、その南の野方遺跡、野方柳原遺跡で集落・墓地が確認されている。しかし左岸の中心的機能をもつのは吉武遺跡群で、特に中期はそのピークであった感が強い。これまでの調査の報告が待たれる所である。



第2図 吉於遺跡群調査地点 (1/8,000)

500m

次数	調番	事業名	調査期間	調査地	調査面積	報告
1	8102	圃場整備 1次	1981.11～1982.2	大字飯盛字本名	12,000m <sup>2</sup>	
2	8234	圃場整備 2次	1982.9～1983.2	大字飯盛	21,000m <sup>2</sup>	
3	8235	田・飯盛線 1次	1982.9～1983.2	大字飯盛トイ	5,200m <sup>2</sup>	127集
4	8335	圃場整備 3次	1983.9～1984.3	大字吉武字桜町	25,000m <sup>2</sup>	143集
5	8415	田・飯盛線 2次	1984.3～5	大字飯盛	1,600m <sup>2</sup>	本報告
6	8416	圃場整備 4次	1984.7～1985.3	大字吉武字高木	36,000m <sup>2</sup>	143集
7	8426	野方・金武線 1次	1985.3～5	大字吉武字三十六	1,050m <sup>2</sup>	187集
8	8518	圃場整備 5次	1987	大字吉武字高木	470m <sup>2</sup>	
9	8535	圃場整備 6次	1985.8～1986.3	大字吉武字大石	23,000m <sup>2</sup>	
10	8650	圃場整備 7次	1986.11～1987.2	大字吉武	5,000m <sup>2</sup>	
11	8662 8714	野方・金武線 7次	1986.3～5 1987.6～9	大字飯盛字トイ 大字吉武	2,300m <sup>2</sup> 1,480m <sup>2</sup>	
12	8752	水路建設	1988.3	大字吉武	1,000m <sup>2</sup>	

表1 吉武遺跡群調査一覧（1988年9月現在）

### 3) これまでの吉武遺跡群の調査

吉武遺跡群は古くから遺物の散布地として知られており、福岡市教育委員会の調査に基づく1970年、1978年発行の文化財分布地図でも遺跡として登記されている。本格的な調査が開始されたのは1981年からであり、これは飯盛地区の圃場整備に伴ったものであった。以後圃場整備、市道建設により調査が相次ぎ、1987年度までに12次を数えるに至っている。この中には「早良王墓」と騒がれた第6次調査（吉武高木）や、樋渡弥生墳丘墓などを検出した第4次調査があるほか、旧石器から近世に至る各種遺構と大量の遺物が検出されている。このうち第3次、第4次、第6次、第7次については報告あるいは概報が出されている。また圃場整備に伴う調査の成果の一部については、日本考古学協会年報などに発表されている。ここでは調査一覧表と関係文献を示すことにとどめる。詳細は以下の報文によられたい。

#### ＜関係文献＞

- ①山崎龍雄「吉武遺跡群Ⅰ」福岡市埋蔵文化財調査報告書第127集 1986
- ②横山邦雄・下村哲・常松幹雄「吉武高木」福岡市埋蔵文化財調査報告書第143集 1986
- ③横山邦雄・下村哲「吉武遺跡群」福岡市埋蔵文化財調査報告書第187集 1988
- ④横山邦雄・下村哲「福岡県播磨遺跡」日本考古学年報36
- ⑤横山邦雄・下村哲「福岡県吉武高木遺跡の調査」日本考古学年報37
- ⑥横山邦雄・下村哲・三辻利一・杉直樹「福岡市・飯盛遺跡出土陶質土器の产地推定」古文化叢書第18集 1987
- ⑦「早良王墓とその時代」福岡市歴史資料館特設展図録 1986

### 3 調査の概要

今回の調査対象地は南北幅20m、東西長100mであったが、周囲は圃場整備の済んだ水田となっており、南北各2mずつの引きをとった。このため調査面積は16×100mの1600m<sup>2</sup>となった。調査に当たっては道路計画杭を利用し、西から東に向かって10mごとにA～Lの大区を設け、さらに道路計画中軸線を境に北側を1、南側を2とした小区を設定した。したがって遺構などの位置はA-1区、B-2区といった表記になる。

調査は重機を用い遺構面近くまで掘り下げ、その後手掘り遺構検出を行う方法をとった。対象地内は盛土が行われており、それを掘り下げるとき耕作土がわずかに残り、その直下が遺構面となっていた。耕作土の上部はほとんど削られた状態であったが、状況としては第3次調査(田・飯盛塚1次)のD～F区と大差なく、地表下20cm前後で遺構面であったものと考えられる。ただ西側にあたるA・B区では日向川に向かうと想定される緩い傾斜がみられ、この部分には耕作土と遺構面の間に薄い砂礫層が認められた。遺構はC～F区に特に集中していた。西側のA・B区は溝状遺構を除けば少數のピットがあるだけであった。またG～L区は遺構面が大きく削平され、中央には幅4mもの深い掘削坑が入れられていた。

F区からL区に至る部分は第3次調査で遺構確認が行われおり、それによれば掘立柱建物、土坑、多数のピットが検出されていた。今回の調査で、F・G区のほとんどの遺構はそのまま再確認・調査することができたが、それ以東は前述したように削平、擾乱が著しく、遺構らしきものはその一部を確認したにとどまった。これは第3次調査の遺構確認後に破壊されたものと考えられる。またその時は周辺の圃場整備がまだ完成しておらず、計画道路幅いっぱいまで遺構確認を行っている。そのため今回の調査区外にあたりまったく確認できなかった遺構や、その一部を検出しただけの遺構の全容を示すものも出てきた。そこで、付図に別色刷りで第3次調査の際の遺構確認図をのせた。うちF・G区は調査区外のみ、それ以東は確認された遺構のほとんどを示した。そしてこれらにも番号を新たに付けた。しかしこれはあくまでも表面確認にしかすぎず、形態が違ったり、複数遺構の切り合いといった状況もあるものと考えられる。これらの個別遺構およびその出土遺物についてはそれぞれの項目中に記した。

検出した遺構は3次調査で確認されたものも含み、掘立柱建物11棟、井戸6基、土坑47基、溝状遺構2条、それに多数のピットである。ほとんどの遺構から遺物が出土したが、SK01、SK05からのその量はきわめて多かった。遺物の種類としては土師器が大多数を占め、須恵器がそれに次ぐ。他に少量の弥生土器、陶質土器、木器、石器、玉類があった。これらの遺物からするとSD01溝状遺構が弥生時代後期、ほかの遺構のほとんど古墳時代中期(5世紀)に属する。

以上のほかに現代の暗渠、杭列などがあったがここでは触れない。またSK02は現代の擾乱坑であったため本文中の記述は行わなかった。

## 4 検出遺構と遺物

### 1) 堀立柱建物

今回の調査で堀立柱建物として構築できたのはSB01～07の7棟である。他に第3次調査の遺構確認で4棟(SB08～11)が確認されており、合わせて11棟となる。建物としては2×2間の小規模なものが多いのが特徴的である。ただ調査区内には多数のピットが残されており、そのなかには柱根を持つものもあり、まとめきれない建物があったことをうかがわせる。なお柱間実長は図示した通りであり、以下の文章では特にふれない。

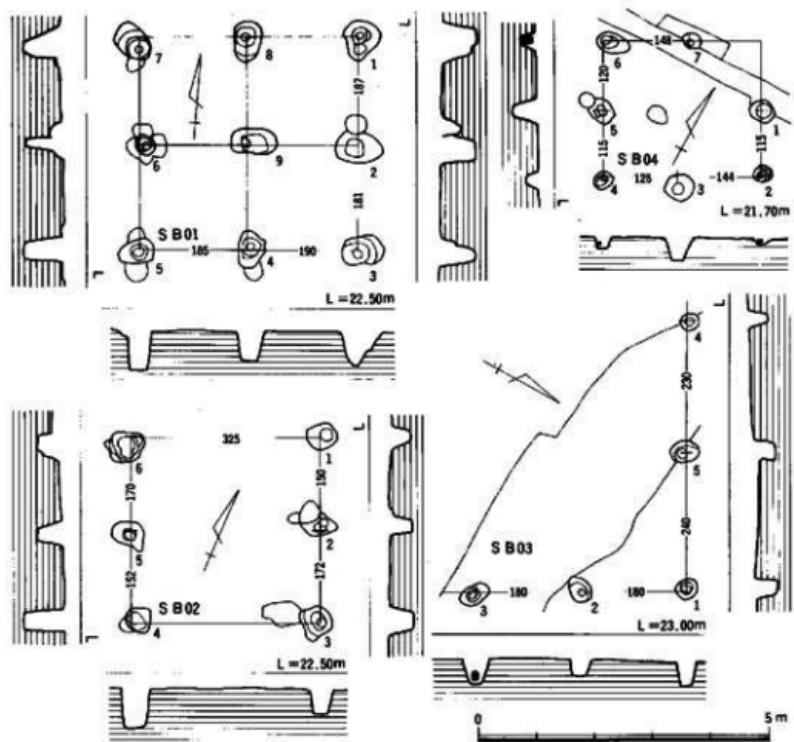
SB01(第3図) G-2区で検出した方位をN-5°-Wにとる2×2間の純粋建物である。北東隅のP7がやや内側に入るが、南北辺3.75m、東西辺3.68mのほぼ正方形をなす。柱掘方は平面横円形形状を呈するものが多く、長径65～84cm、深さは55～67cmをはかる。P2、P3をのぞき径15～20cmの柱痕跡が認められる。この建物の外側には、東側を除き径20～30cmの小柱穴がコの字状に囲んでおり(付図参照)、廂あるいは櫛のような構築物があった可能性が強い。P4から土師器、P6から赤生土器の小片が1片ずつ出土している。

SB02(第3図) F-2区で検出した方位をN-24°-Wにとる1×2間の建物である。実長は南北辺3.25m、東西辺3.22mのほぼ正方形をなす。柱掘方は径54～68cmの円、あるいは不整円形を呈し、深さは35～70cmをはかる。P2、P3、P5には径20cm前後の柱痕跡が認められる。SK09と重複する。P1、P3、P5、P6から土師器の小片が少量出土している。

SB03(第3図) C-D-2区で検出した建物であるが、調査区外にかかり、北および東の各々2間分を確認したにとどまる。方位N-29°-W。柱間は東側で180cmの等間、北側はそれより広く東から240cm、230cmをはかる。柱掘方は円または横円形で、径32～55cm、深さ30～40cm。P3には柱根が残存し、またP1、P2、P5には径10～15cmの柱痕跡が認められた。SK01を切っている。すべての柱掘方から土師器小片が少量ずつ出土している。

SB04(第3図) I-1区で検出した。東北隅柱が調査区外にかかり未検出であるが、2×2間の建物と想定した。方位はN-28°-W。西辺2.35m、南辺2.72mで、東西にやや広い構成となる。南北の中間柱の位置ははずれる。柱掘方はほぼ円形で、径32～48cm、深さはP3、P4が42～44cm、他は10～25cmと浅い。P2、P4、P5、P6には柱根が認められ、うちP6では径12cm、長さ22cmが残存していた。P5から平行タクキをもつ硬質の土師器小片、P7から土師器細片などが出土している。

SB05(第4図) D-2区で検出した2×1間の東西棟である。建物方位はN-25°-W。実長は東西梁が1.91m、南北析が3.80mをはかる。南北中間柱はともに西側に寄る。柱掘方はP2が不整形、他はほぼ円～横円形で、径38～90cm、深さ12～24cm。またP1、P3、P5には径10～20cmの柱痕跡が認められた。P2、P3、P5から土師器壺などの小片が少量出土している。

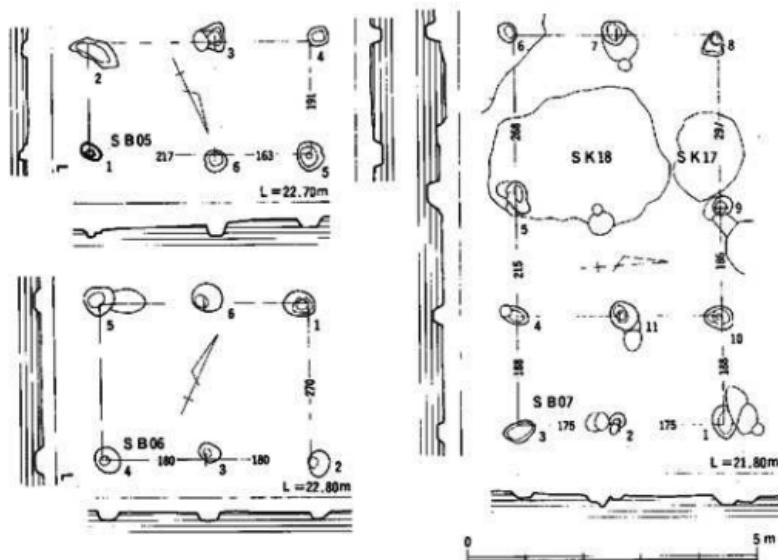


第3図 SB01・02・03・04 (1/100)

**SB06 (第4図)** C・D-2区で検出した $2 \times 1$ 間の東西棟である。建物方位はN-25°-E。実長は東西棟が2.70m、南北桁が3.60mで、長方形のプランをなす。南北桁の柱間は等間である。柱掘方は円形に近く、径40~50cm、深さ20cm前後。P2から土師器細片が出土している。

**SB07 (第4図)** H-1区で検出した $2 \times 3$ 間の東西棟である。当初は $2 \times 2$ 間の建物の重複として考えていたが、精査の結果図示した建物として把握した。建物方位N-4°-W。実長は桁行6.71m、棟行3.5m。棟の柱間は等しいが、桁は西側の1間が広く、南北でも柱間が若干異なる。また南北桁の東寄り1間の中央に床束と想定される柱穴(P11)がある。柱掘方は円あるいは梢円形状を呈し、径35~60cm、深さ25~30cmをはかる。SK18を切り、SK17と重複する。

**SB08 (付図)** 第3次調査の際H-2区で確認した $2 \times 2$ 間の純柱建物である。柱穴の一部は本調査でも検出した。南北辺約4.0m、東西辺約3.5mの東西にやや広いプランをなす。建



第4図 SB05・06・07 (1/100)

物方位は北から6°ほど西にふれる。P6、P7から弥生土器壺、土師器小片が出土している。

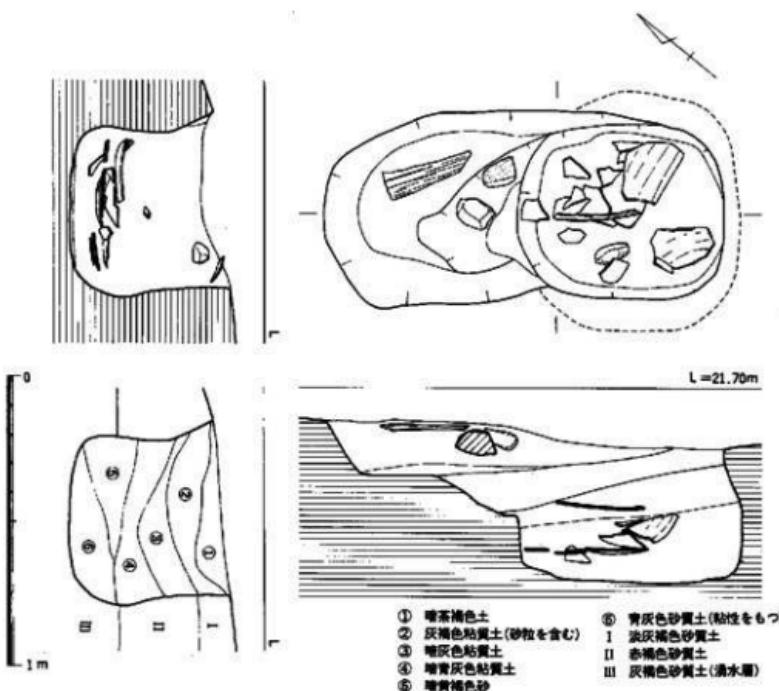
**S B09 (付図)** 第3次調査の際I-2区で確認した2×2間の縦柱建物である。柱穴の一部は本調査でも検出した。南北辺約4.1m、東西辺約4.7mの南北にやや長いプランをもつ。建物方位は北から6°ほど東にふれる。P2、P3、P6、P7から土師器と須恵器の細片が少量出土している。

**S B10 (付図)** 第3次調査の際K区で確認した2×2間の建物である。南北辺約3.5m、東西辺約3.7mの正方形に近いプランをなす。建物方位は北から14°ほど東にふれる。表面での出土遺物はない。

**S B11 (付図)** 第3次調査の際L-1区で確認した2×1間の建物である。柱穴の一部は本調査でも検出した。ただ東南隅柱だけは確認できていない。梁約2.0m、桁約3.5mの南北棟と想定でき、方位は44°ほど西にふれている。出土遺物はない。

## 2) 井戸

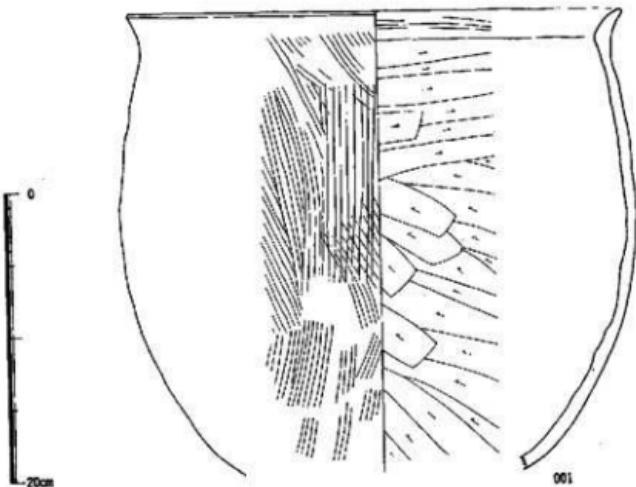
S E19・20・23・24・30の5基を検出した。この他第3次調査で確認され土坑としたもののうち、井戸となるものがあると考えられるが確かめようがない。5基の井戸はいずれも素掘りで、



第5図 SE 19 (1/20)

最も深いSE 20でも1m程度である。断面形は底細りの筒形が多いが、SE 19・30は段状の掘り込みを側壁に取り付けており、井戸本体も浅い。井戸内からの出土遺物は少なく、特に祭祀に用いられたような遺物もない。

SE 19(第5図) H区の中央で検出した素掘の井戸である。長径0.70m、短径0.60mの梢円形プランの本体北側に、幅0.66m、長さ0.67mのやはり平面梢円形の張り出し部が取り付く。張り出し部分は上面から深さ18cm、34cmの2ヶ所で段をなしており、井戸本体に対する階段的な役割を果たす施設と考えられる。井戸本体の深さは57cmで、深さ35cm付近が大きくえぐれる。この辺りが地山の湧水層であるIIIの灰褐色砂質土層の上面となっており、そこからの湧水により井戸壁が崩落し、えぐれが生じたものであろう。井戸底は平坦である。井戸内土層は①～⑥に分かれ、下部の⑤・⑥層が砂あるいは砂質土、中部の②・③・④層が粘質土であり、一気に埋め立てられた状況は特にはうかがえない。遺物は主に⑤・⑥層からの出土であり、土器類は



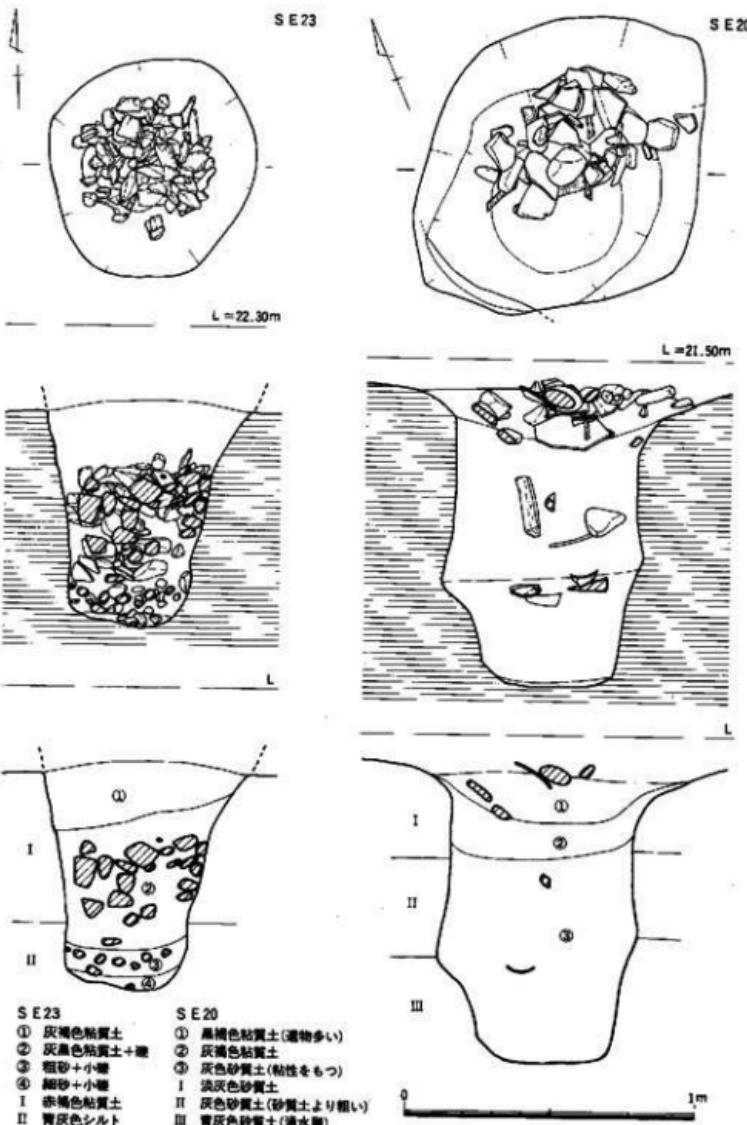
第6図 SE19出土遺物 (1/4)

敷められた状態であった。西側を浅い擾乱坑で破壊されている。

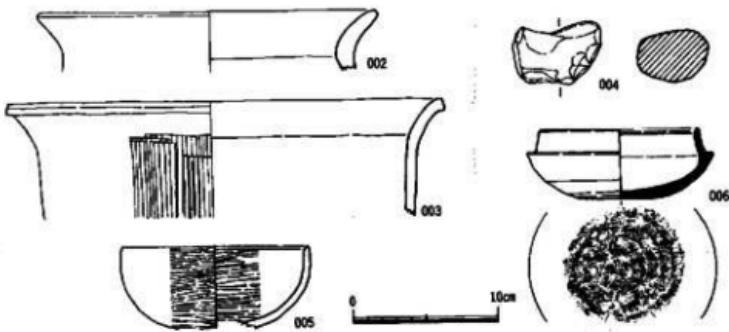
出土遺物（第6図） 土師器甕・高杯・杯、平行タタキを施す須恵器甕などが出土しているが個体数としては少なく、また実測できるものはほとんどない。001は⑤・⑥層に數つめてあった土師器の甕あるいは甌。張りの少ない長胴から口縁部が短く外反・肥厚し、端部は尖り気味になる。外面は粗い縦刷毛目、内面はヘラ削り。胎土には多量の砂粒が混じる。外面には口縁部から底部近くに及ぶ黒斑がある。

S E20 (第7図) I - 2区で検出した素堀りの井戸である。上面は $0.95 \times 1.01\text{m}$  の不整円形で、断面はほぼ筒状を呈し、深さ65cm前後で横に10cm程のえぐりをつくる。そこから下はややすばまり底面に達する。この部分は湧水層である。底面は $0.45 \times 0.47\text{m}$  の円形をなす。深さ105cm、底面標高は20.36mである。井戸内土層は①～③に分かれ、③層が厚さ70cmほどになる。これは井戸廃棄の際埋め戻されたものであろう。遺物は③層でも若干あるが、①層に集中し、井戸廃棄後のくぼみに二次的に廃棄されたものと考えられる。なお第3次調査の際には、ここから北北東に溝状遺構が4.5mほど延び、北側の段落ちに接続しているのが表面的に確認されている。またこの溝状遺構はSK37に切られている。

出土遺物（第8図） 土師器、須恵器等の破片が①層を中心に少量出土した。その他木器、種子、自然石などがある。また須恵器の中にはSK13から出土した杯蓋と同一個体となる口縁部破片（第44図356）も出土している。そのうち図化できたものはわずかである。



第7図 S E 20・23 (1/20)



第8図 SE 20出土遺物 (1/4)

**土師器 (002~004)** 002は甕の口縁部片である。肥厚した口縁部はゆるやかに外反する。口縁部を除く内面調整はヘラ削りを施していると思われる。胎土には砂粒が多く、淡褐色を呈する。003は甕の口縁～胴部片で、胴部はわずかに膨らみをもち、口縁部はくの字状に外反する。胴部外面には縦方向の粗い刷毛目調整を行う。胎土には砂粒が多く混じり、外面は褐色、内面は淡赤褐色～淡褐色である。004は甕あるいは甌の把手である。指押え整形を全体にわたって行う。胎土には砂粒が比較的多く、淡褐色である。

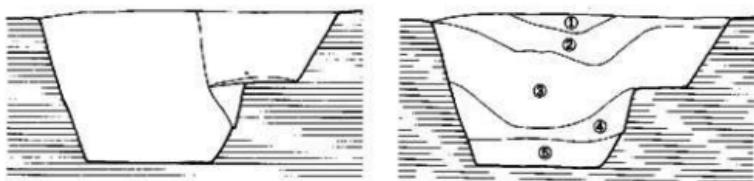
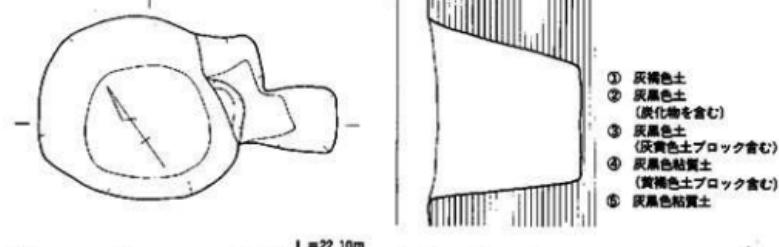
**黒色研磨土器 (005)** 梗である。③層から出土した。内湾ぎみの口縁部をもつ。器面調整はヘラ磨き。胎土には少量の砂粒が混じり、口径12.7cmをはかる。

**須恵器 (006)** 杯身の破片で、立ち上がり部は内傾し、端部は尖って内面に段をなす。底部のヘラ削りは逆時計回転方向。底にはヘラ記号がある。焼成はややあまく、胎土には少量の砂粒が混じり、灰色～灰黒色を呈する。口径10.9cm。器高4.75cmである。③層003の梗の近くで出土した。

**S E 23 (第7図)** G-1区で検出した素振り井戸である。東北にはS K16、南にはS B01が近接する。上面は東西幅0.70m、南北長0.75mの北側がやや膨らんだ梢円形状を呈する。そこから西側寄りにすばまり、深さ78cmで径0.25mの凹凸のある底面に達する。井戸内土層をみると、上から①灰褐色粘質土、②灰黒色粘質土と拳大の疊の混じり、③粗砂と小疊の混じり、④細砂と小疊の混じり（植物遺体含む）となっている。③層上面は小疊を敷設した状態であり、井戸底の構築物としてとらえられる。少量の遺物の出土もこの面からである。湧水面はこの③層上面より10cm上のところから認められる（II青灰色シルト層。その上はI赤褐色砂質土）。井戸の廃棄は、まず疊を投入し、その上を粘質土で一気に塞いだものと考えられる。土師器甕・高杯・平行タクキをもつ須恵器甕などが少量出土しているが、実測に耐えない。

**S E 24 (第9図)** G-2区で検出した素振りの井戸である。西にはS B01、東にはS K14が

S E 30



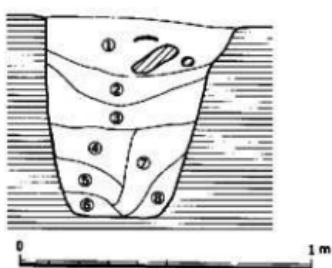
S E 24

S E 27

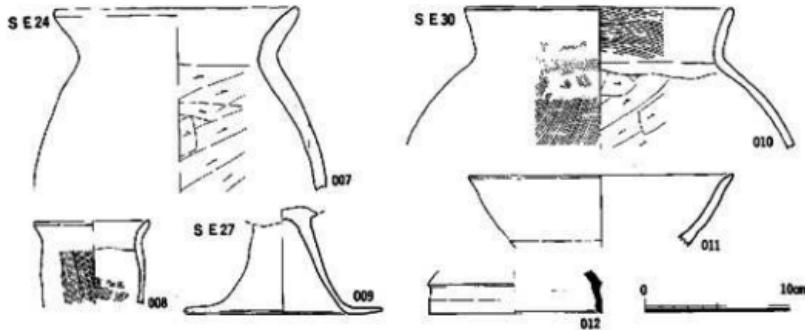
L = 22.30m

L = 22.30m

0 1m



第9図 S E 24・27・30 (1/20, 1/40)



第10図 S E 24・27・30出土遺物 (1/4)

近接する。上面は径0.6~0.65mの不整円形を呈し、北側はやや弧が崩れている。深さは69cmで、底面は平坦である。坑内土層は上から①炭化物・礫混じりの黒褐色土、②暗茶褐色土、③暗茶褐色土に黄斑混じり、④淡灰黑色土、⑤灰黑粘質土、⑥砂混じり灰褐色粘質土、⑦暗茶褐色土に黄褐色土のブロック混じり、⑧淡灰黑色粘質土となる。下部にあたる④~⑧層の堆積状況は不自然である。

**出土遺物 (第10図007~008)** ①層から土師器などが出土している。007は壺片。口縁部はくの字状に外反し端部は丸くおさめる。肩部外面から口縁部にかけて横ナデ調整。全体に厚めの作りで、外面には煤が付着する。008は小形鉢。張りのない胸部から口縁部がゆるく外反する。肩部外面は刷毛目調整。焼きがあまく、また煤と二次焼成による赤変部が外面にある。この他土師器高杯、甕などの小片が少量あるが、須恵器はまったくない。また自然遺物として④・⑤層からヒョウタンらしき植物片が出土した。

**S E 27 (第9図)** E-1区で検出した素掘りの井戸である。SK04の北西端に位置し、この土坑に切られている。上面は0.86×0.89mの円形状をなし、すぼまりながら0.36×0.42mの稍円形の平坦な底面に達する。深さ58cm。底面標高は21.49mである。井戸内土層は①のSK04覆土を除いた②~⑥の5層で、ほぼ水平に堆積する。②・③層では大量の種子が、少量の土師器・須恵器とともに出土している。

**出土遺物 (第10図009)** 土師器は甕、高杯の破片が少量、須恵器は杯蓋の破片1点 (SK05の208と接合。破片的にはこの遺構出土のものが大きい) が③・④層から出土している。図示できるものはほとんどない。009は土師器の高杯の脚部でハの字状に大きく開く。杯部との接合痕も明瞭に残る。器面調整は裾部が横ナデ、他は外面筒部上位部を除いて、すべてナデ仕上げである。胎土には比較的砂粒が少なく、褐色を呈する。

**S E 30 (第9図)** E・F-1区で検出した素掘りの井戸である。SK06の坑内南側を切って

構築されている。上面は西北一東南に主軸をとる $0.7 \times 0.6m$  の椭円形をなし、その東南部分に幅 $0.7m$  の張り出しをつけている。この張り出し部分が深さ $25cm$ 前後の段になっており、井戸底面はさらに $27cm$ 深くなる。井戸上面から底面までの深さは $52cm$ 。井戸内土層は上面から①～⑤の5層に分かれるが、②層と③層、④層と⑤層は基本的に同じである。またこの堆積状況からすれば張り出し部分もこの井戸の付属施設であったことがわかる。おそらく足掛けなどに利用したものであろう。

出土遺物（第10回010～012） 土師器壺・壺・高杯、須恵器杯などがあるが図化できるものはほとんどない。010は土師器壺。張った胸部から口縁部が直立気味に外傾する。胸部外面と口縁部内面は刷毛目調整。胎土には砂粒を多く含む。外面に煤が付着する。011は土師器高杯片。杯部口縁はわずかに外反し、端部はやや尖り気味になる。横ナデ調整で仕上げたものか。012は須恵器蓋片。口縁部はわずかに外に開き、端部は内傾する。残存部は横ナデ仕上げ。須恵器としては他にSK05の220と接合する破片がある。

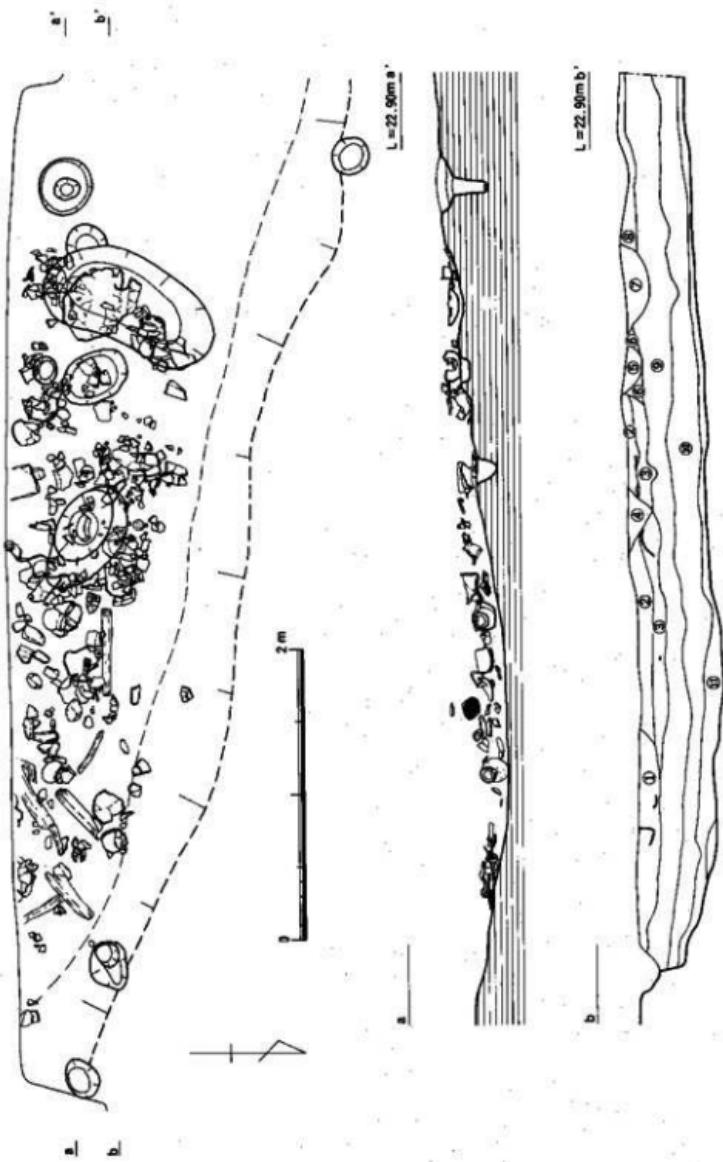
### 3) 土坑

SK01・03・04・05・06・07・08・09・10・11・12・13・14・15・16・17・18・21・22・25・26・28・29の23基と、第3次調査で表面確認したSK31～54の24基がある。一部の土坑を除き覆土に炭化物、焼土などを多量に含んだ層をもつのが特徴的である。その平面形態は多様で、整った形をするものは少ない。また全体に浅い。出土遺物は豊富で、特にSK01・05・16など点数が多い。遺物内容としては土師器・須恵器が主体であるが、陶質土器、木製品、石製品なども見られる。

SK01（第11図） C・D-2区の南端で検出した。西側からのびるSD01溝の上に掘り込まれたもので、耕作土の直下に削平をうけた状態で検出したため明確な土坑壁は確認できなかった。遺物の出土状態からすれば、この土坑の広がりは、南側では調査区外にのびており、東西に長い不整形の土坑であると考えられる。推定東西幅 $5.36m$ 、残存南北幅 $1.36m$ 、深さ $40cm$ 。土層断面図によればSD01の覆土は⑥～⑩であり、⑨の灰褐色土の上層で、SK01の土坑に伴う層に複雑な切り合い関係がみられる。SK01の覆土は②・③の間に炭化物をはさんだ上下2層で、それぞれの層にも炭化物を含む。この層を切る層は①の少量の炭化物を含む暗褐色土の層と⑤の暗茶褐色土の層である。また②・③層に落込みを示す④はSB03の掘立柱建物の柱穴（P3）で、底から約 $20cm$ 程の石が出土している。

この断面による切り合い関係の平面での確認は、大半が調査区域外となるため一部を除き困難であったが、遺物はB（⑦層）・C（⑤層）・D（④層）・E（②・③層）・F（①層）の5群に分けて取り上げることができた。遺物が密接していたため、多少の出入りはあるものと考えられる。後述する出土遺物の項では、これらの群を一括して、器種ごとに遺物をまとめた。出土遺物の所属する群については巻末の遺物観察表に記している。

圖 11 圖 SK01 (1/40)

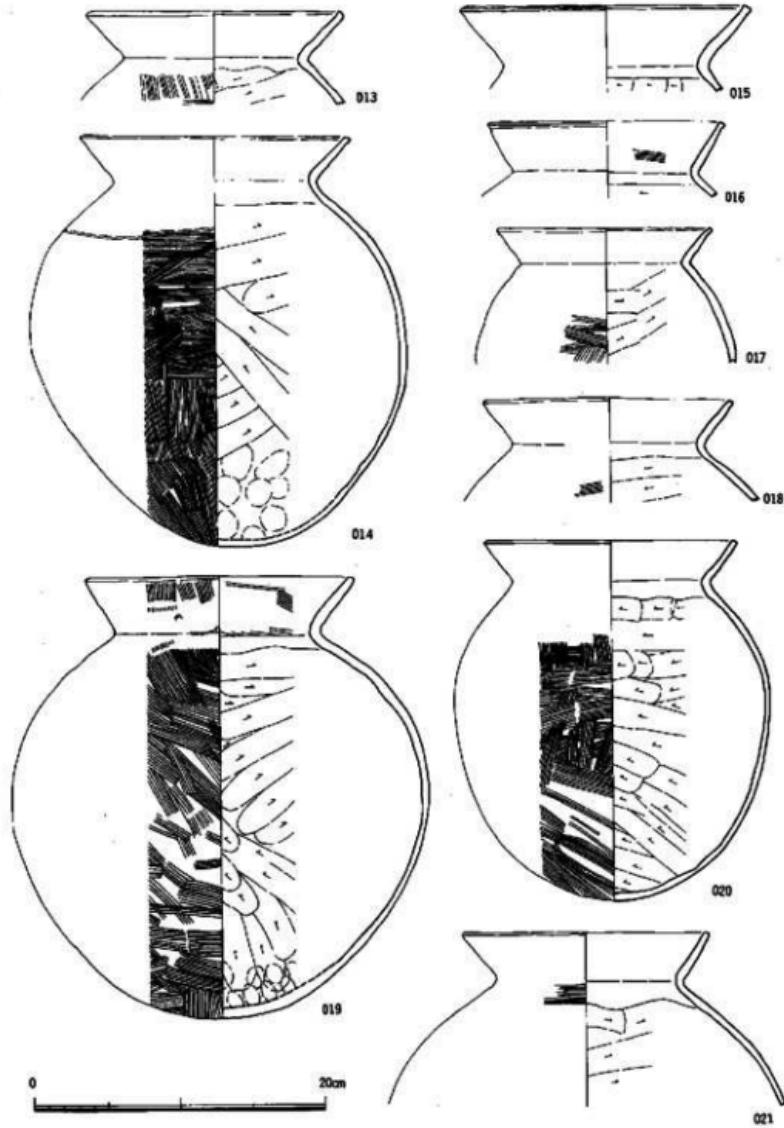


出土遺物（第12～20図） この土坑からは弥生土器が1点、その他は土器師が多量に出土したが、初期須恵器は全く伴っていない。その他石製品、自然石、木器などが少量みられる。

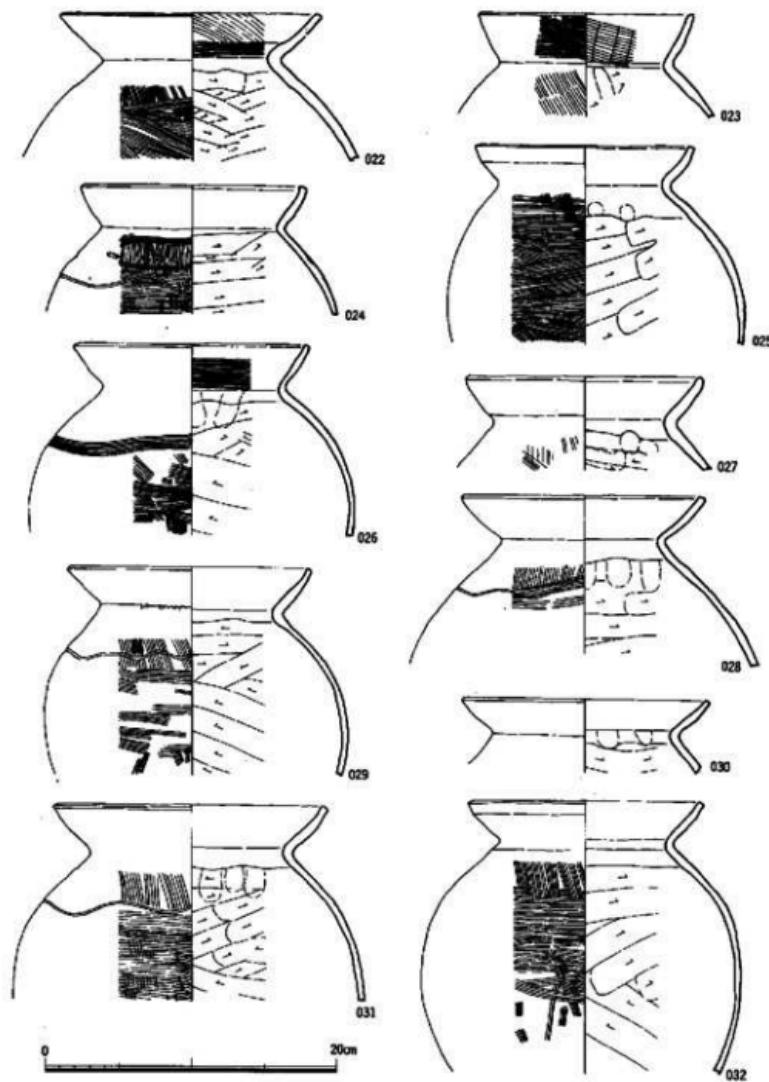
土師器 (013～096) 013～043は甕である。013～018は肩部から直線的に口縁部が外傾し、端部はつまみあげる。013は比較的小な張りを肩部から胴部にかけてもつ。口縁部内外面には強い横ナデのために凹凸がある。胎土には比較的砂粒が多く、赤褐色粒も少量混じる。014は肩部からやや張りのある橢円形に近い胴部をもつ。口縁部から肩部内外面は横ナデ、底部内外面には指頭圧痕がみられる。ヘラによる沈線が肩部に一条巡る。胴部外面には全面にわたつて煤の付着が認められる。口径17.9cm。器高28.1cm。015は口縁端部を強くつまみあげ、強い横ナデによる沈線を巡らす。口縁部内外面は丁寧な横ナデ調整。胎土には比較的少量の砂粒に赤褐色粒が少量混じる。色調は淡褐色～淡赤褐色である。016の口縁端部は外側を強く押さえてつまみあげる。口縁部内面には刷毛目の後横ナデを行う。胎土には砂粒が少量混じり、口縁部外面には煤が付着する。灰褐色～淡褐色を呈する。017は肩部から胴部にかけての張りは小さい。胴部外面には刷毛目の後ナデ調整を行う。胎土には砂粒が混じり、茶褐色を呈する外面には黒斑がある。018は胴部にかけてやや張りがある。口縁部内外面には強い横ナデによる凹凸がみられる。肩部外面には板状工具の小口による横ナデを施す。砂粒が多く混じる胎土で、灰褐色～褐色。

019～023はわずかに内湾ぎみに外傾する口縁部をもち、端部はつまみあげず、多少平坦にナデ仕上げる一群である。019は球形に近い胴部をもつ。口縁部内外面には刷毛目の後横ナデを行い、底部内面には指頭圧痕がみられる。胎土には少量の砂粒が混じり、胴部外面には煤の付着、内面の胴部下位には炭化物がみられる。口径17.8cm。器高30.6cm。020は肩から胴部へと張りがなく、橢円形の胴部となる。口縁部内面では横刷毛目の後横ナデ、胴部外面では部分的にナデを行う。砂粒の多い胎土で、外面には煤が付着している。021は肩がやや張る胴部をもつ。外面調整は肩部にわずかながら横刷毛目が認められる以外は磨滅が著しく不明である。胎土には比較的多くの砂粒と赤褐色粒が混じり、外面に少量の煤がみられる。022は口縁端部に浅い沈線を巡らす。肩は張らず胴部に至る。口縁部内面は斜刷毛目の後横ナデを行う。砂粒が比較的小量混じる胎土で、茶褐色を呈する。外面には煤がみられる。023は口縁端部をやや丸く仕上げ、肩は張らない。胴部内面には粗いヘラ削りを施す。胎土には多量の砂粒が混じる。

024～032は口縁部が内湾ぎみに外傾し、端部でつまみあげを行う。肩部から胴部にかけてやや張りのあるものと、そうでないものがある。024は肩は張らず、ヘラ描き波状文の沈線を1条施し、さらに刺突文を加える。胎土には砂粒が多く、赤褐色、金雲母、白雲母等も少量混じる。淡赤褐色～茶褐色である。025は口縁部に明瞭な稜線をもつ。胎土には砂粒が多く混じり、胴部外面にはわずかであるが煤がみられる。026は肩部に4条の櫛描き波状文を施す。内面頸部～肩部にかけて指押えがみられる。胎土には少量の砂粒が混じり、外面には煤の付着がある。027は肩部からやや肥厚した口縁部をもつ。胴部内面ではヘラ削りの後ナデが行われる。さ



第12図 SK 01出土遺物 I (1/4)



第13图 SK01出土遗物2 (1/4)

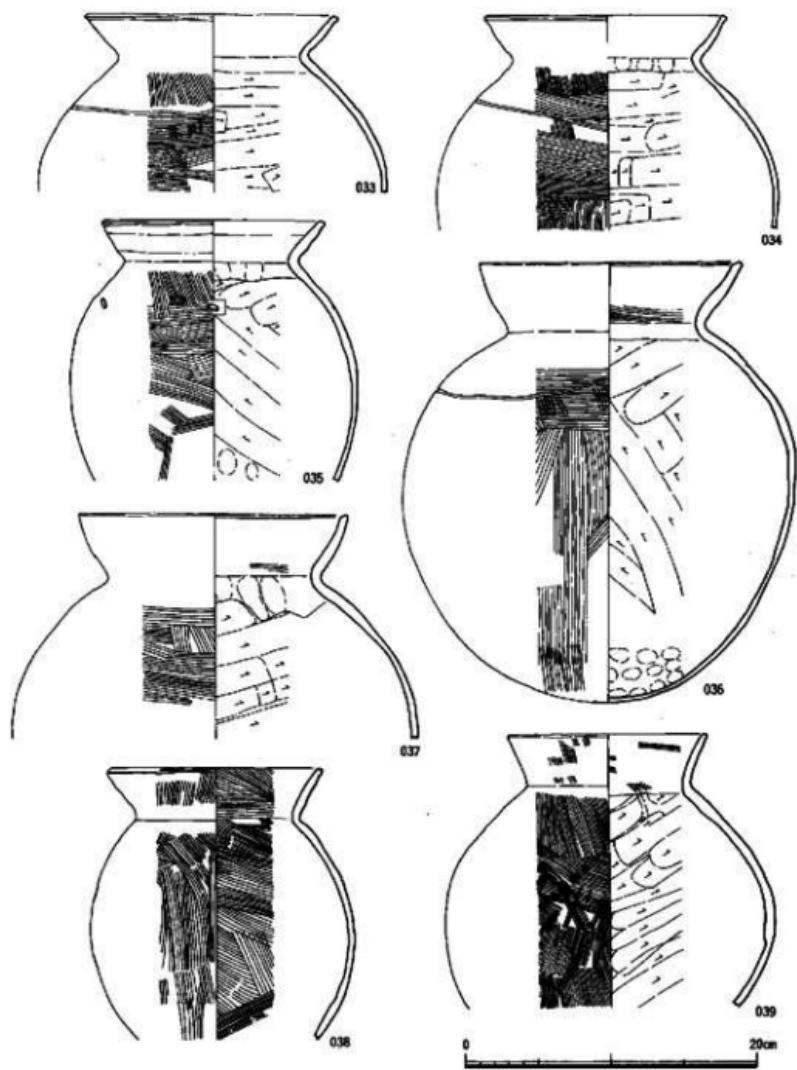
らに指押さえ痕もみられる。胎土には砂粒が少量混じる。淡赤褐色～淡褐色を呈し、口縁部外面にはわずかであるが煤の付着が認められる。磨滅が著しい。028は肩部にヘラ描き波状文を1条巡らす。外面胴部下位部には部分的にナデが行われる。胎土には砂粒が多く混じり、外面に煤がみられる。029は肩部にヘラ描き波状文を1条巡らす。肩部内面には指押さえ痕がみられる。胎土には砂粒がやや多く混じり、磨滅が著しい。030は頸部内面に指押えがみられる。胎土上には少量の砂粒の他に赤褐色粒を含む。外面には煤が認められる。031の口縁端部には浅い沈線、肩部には1条のヘラ描き波状文の沈線が巡る。肩部内面に指押えを行う。胎土には比較的小量の砂粒と赤褐色粒を含む。外面には煤がみられる。032の口縁部は明瞭な稜線を持ち、やや張りのある胴部は卵形を呈すると思われる。外面胴部下位部ではナデ調整を行う。胎土には多くの砂粒が混じる。外面には煤の付着がある。

033～035は口縁部を内湾気味に外反させ、端部をわずかに外へつまみ出す。033・034は肩から胴部へとやや張り、1条のヘラ描き沈線を肩部に巡らす。033の胎土には砂粒が多く混じり、赤褐色粒、金雲母も少量含む。外面には煤がみられる。034では口縁部外面に強い横ナデによる凹凸があり、内面にはヘラ削りを行う。胎土には砂粒が比較的多く、赤褐色粒も少量含む。外面には煤の付着がある。035の肩はほとんど張らず、ほぼ対極の位置に刺突文を施す。口縁部内外面には強い横ナデによる凹凸が著しく、稜線を作る。胎土には砂粒が多く混じり、赤褐色～明茶褐色を呈する。外面には煤がみられる。

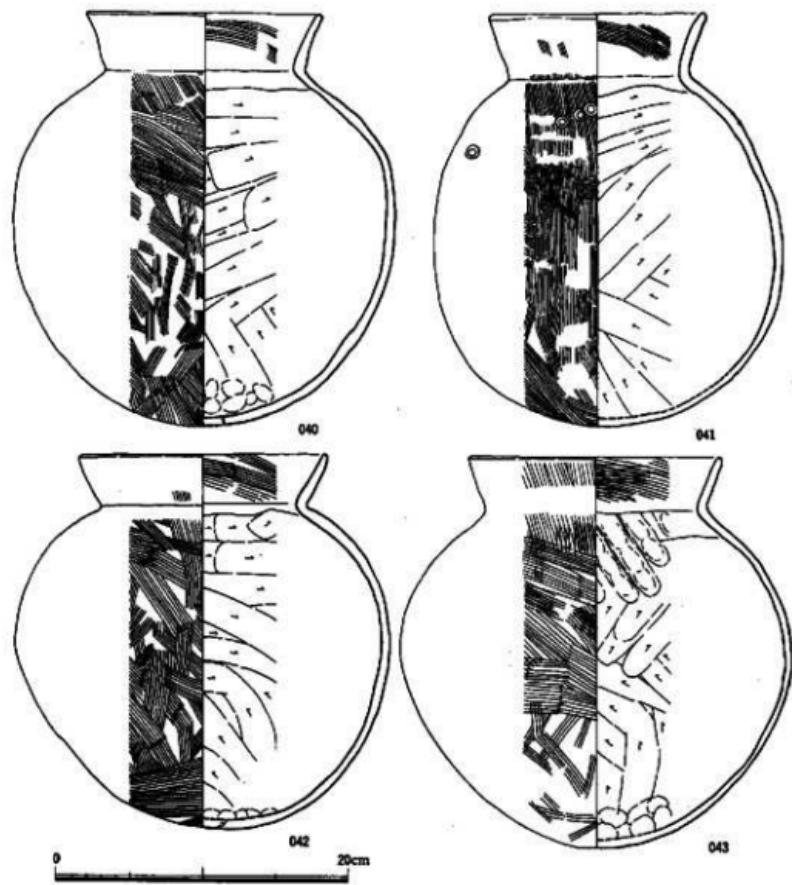
036・037は口縁部が内湾気味に外反し、端部はやや斜め上にナデすばめる。肩から張りのある胴部を持つ。036は梢円形の胴部で、肩に一条のヘラ描き波状文の沈線を施す。胎土には砂粒が多く混じり、赤褐色粒、金雲母を少量含む。外面には煤、内底部には炭化物の付着が認められる。口径17.7cm。器高30.3cm。037は036よりさらに内湾する口縁部を持つ。胎土には砂粒が多く、赤褐色粒も少量含む。淡赤褐色～褐色を呈し、外面には若干の煤がみられる。

038～041は口縁部が外反して開くものである。038は肩が張らず、長胴である。胎土には砂粒が比較的少なく、焼成はやや軟質である。胴部外面には黒斑がある。039の口縁端部は丸く仕上げ、胴部は張り、球形状をなす。胎土には砂粒が多く混じり、褐色を呈する。外面には黒斑、少量の煤の付着が認められる。040の口縁端部はほぼ平坦にナデする。球形状の胴部を持ち、口縁部内面は斜め刷毛目の後横ナデ調整を行う。底部内面には指頭圧痕が残る。胎土は砂粒が多く、赤褐色粒も少量含む。褐色～淡赤褐色を呈し、器面には二次的な焼成が認められる。口径15.6cm。器高28.4cm。041は胴部下位に張りがある卵形を呈する胴部をもつ。肩部には竹管文を不規則に施す。胎土には砂粒が多く、赤褐色粒も少量みられる。褐色を呈し、胴部外面には黒斑、煤の付着がある。

042・043の口縁部はくの字状に外反させ、端部では丸くおさめる。球形状の胴部を持つ。042の胎土には多量の砂粒が混じり、赤褐色粒も比較的多い。全体に風化、磨滅が著しい。褐色を



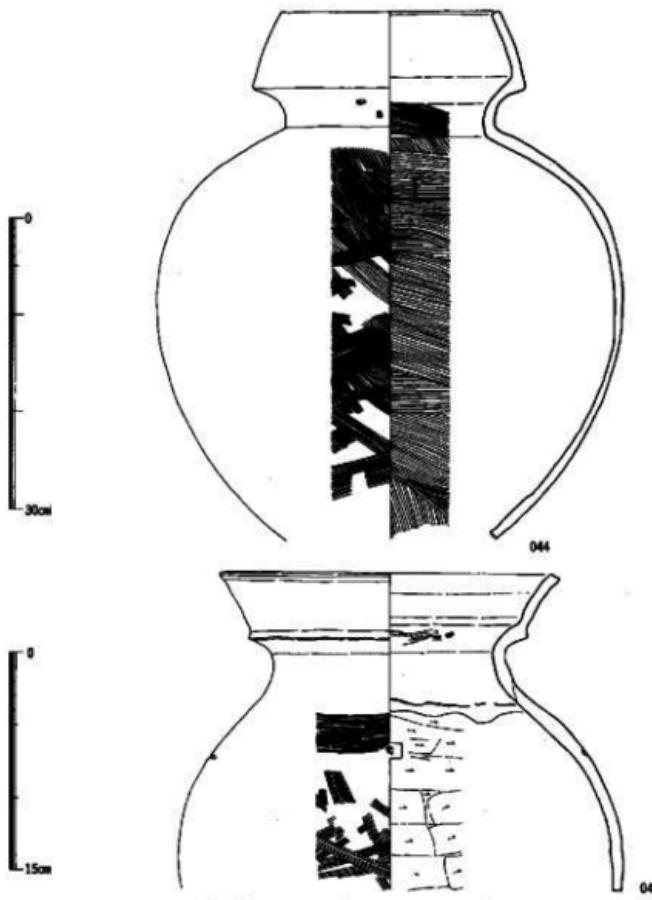
第14図 SK01出土遺物3 (1/4)



第15図 SK01出土遺物4 (1/4)

呈する外面には煤、底部内面には炭化物の付着が認められる。043では胎土中の砂粒が多く、赤褐色粒も少量含む。褐色～茶褐色で、外面には煤がみられる。口径17.3cm。器高26.9cm。

044～047は複合口縁をもつ壺である。044の口縁部上位は明瞭な稜をもって内傾する。肩部には張りがある。胎土には少量の砂粒が混じり、赤褐色粒も含む。褐色を呈し、外面胴部下位には黒斑がある。045は口縁部上位が強い稜を作つて外に開き、端部は平坦にナデて、さらに浅い



第16図 SK01出土遺物5(1/4, 1/6)

沈線を巡らす。肩部にはヘラ描き刺突文があり、対極の位置に施されているものと思われる。口縁部内面にはヘラ状工具によるナデが認められる。胎土には砂粒が多く、灰褐色～淡赤褐色を呈する。口縁部外面には黒斑がみられる。046は口縁部上位がわずかに内傾しながら直立し、端部をわずかに外へつまみ出す。頸部にはヘラ状工具による刻文を施す。胎土には砂粒が比較的多く混じり、褐色～茶褐色である。口縁部外面には煤が付着する。047の口縁部はゆるやかな稜をもって内渦気味に外傾する。頸部は球形に近い。頸部内面には刷毛目の後横ナデを行

う。胎土には砂粒が多く、赤褐色粒も少量含む。灰褐色～褐色で、胸部外面には煤が認められる。口径17.7cm。器高33.1cm。

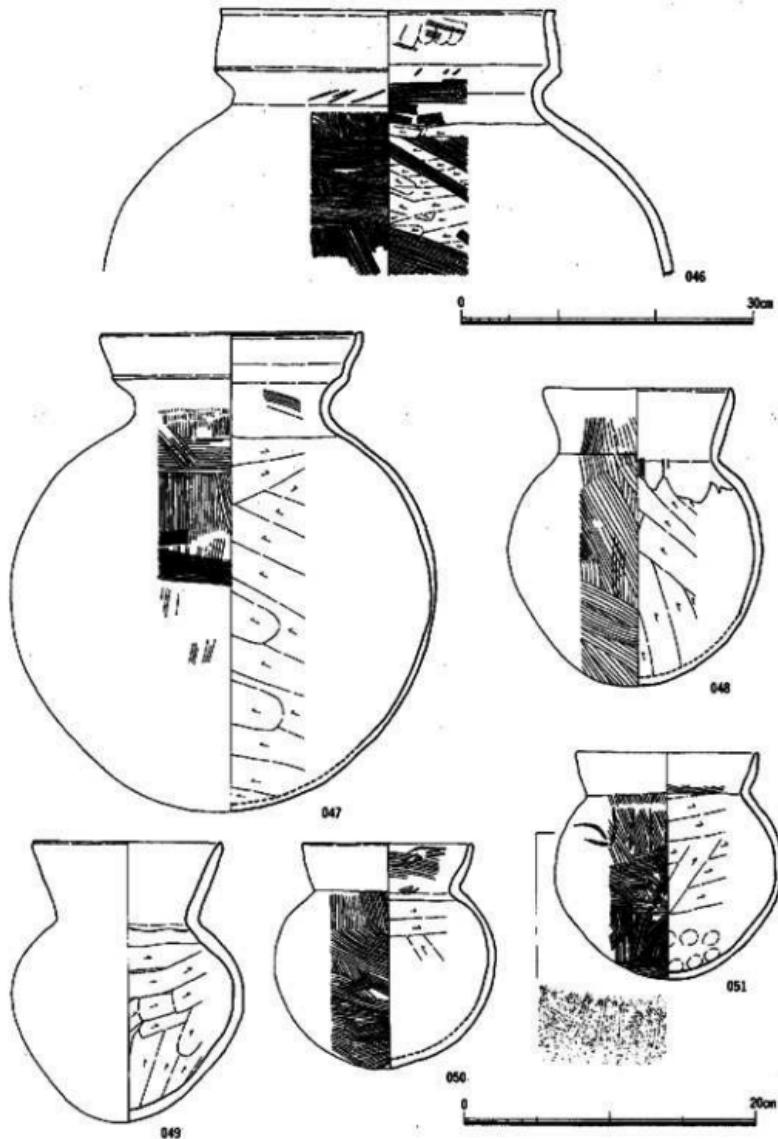
048・049は梢円形の肩部から比較的長い直口する口縁部をもつもので、長頸壺と呼べるものであろう。048の頸部内面にはヘラ描き刻文が継方向に短く施されている。胎土中の砂粒は少なく、灰褐色を呈する。外面には煤、底部内面には炭化物の付着が認められる。口径12.8cm。器高20.4cm。049は肩から胸部へと張りを見せるが、底部はいくぶん細くなる。胎土は砂粒が多く、赤褐色粒も少量含む。胸部外面には黒斑がみられる。

050～055は短頸壺で、球形状の胸部から短く外傾する口縁部をもつ。050はわずかに内溝気味の口縁部内面に、斜刷毛目の後に横ナデ調整を行い、さらにヘラ描き刻文を施す。胎土には砂粒が多く、赤褐色を呈し、器壁はもろい。胸部外面に煤、内面には炭化物の付着がある。051は肩部にヘラ描き沈線を施す。胎土には砂粒が多く混じり、褐色～灰褐色を呈する。外面には黒斑があり、煤の付着も全体にみられる。口径12.4cm。器高15.6cm。052は直線的に外傾する口縁部をもつ。内面口縁部～肩部にかけて刷毛目の後横ナデ調整を行う。胸部外面下位にはヘラ削りを施す。胎土中の砂粒は比較的少なく、外底には小さな黒斑がある。口径12.4cm。器高11.5cm。053は口縁部を欠くが、052と同じ器形と思われる。胎土中の砂粒は比較的少ない。外面胸部には煤、底部には黒斑がみられる。054は口縁部を欠く。肥厚する胸部をもつ。胎土には多量の砂粒を混え、灰褐色を呈する外面には2ヶ所に黒斑、さらに煤の付着がある。055は直立気味に外傾する口縁部をもつ。口縁部外面にヘラ描き刻文を施す。胎土には多量の砂粒が混じり、褐色～暗褐色を呈する外面の胸部中位に大きな黒斑、中位以下では煤が付着している。口径11.4cm。器高12.8cm。

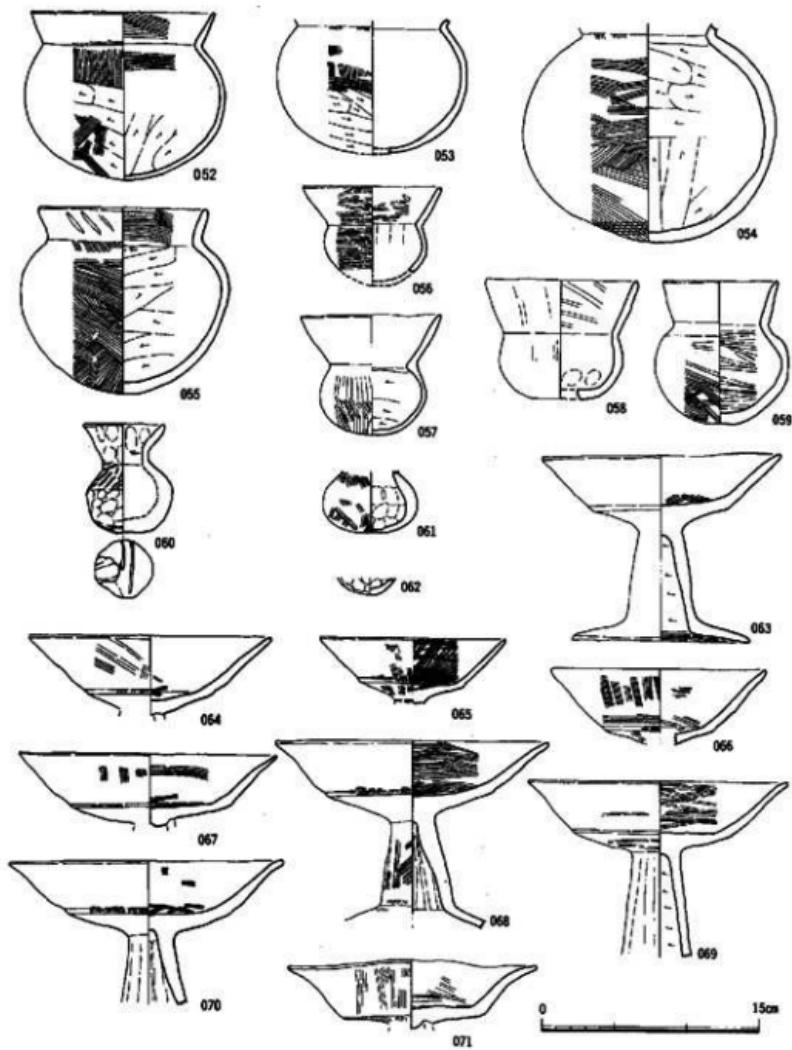
056～059は小型丸底壺である。056・057は球体の胸部から大きく外反する口縁部をもつ。056の内面胸部には継方向の板状工具によるナデが残る。胎土には少量の砂粒が混じり、茶褐色を呈する。057の口縁部は肩部から肥厚する。口縁部外面には煤の付着がある。胎土には砂粒が少量混じる。口径9.6cm。器高8.2cm。058はやや平底を呈し、口縁部には斜刷毛目の後横ナデ調整を行う。比較的少量の砂粒が混じる。059は肥厚した球形の体部からほぼ直立する口縁部をもつ。胎土には少量の砂粒が混じる。口径7.8cm。器高9.8cm。

060～062はいずれも小型丸底壺形の手捏土器である。060の肩部、底部にヘラ描き沈線を施す。底は若干平底を呈する。口径5.6cm。器高7.6cm。061は胸部下半が張る。外面には植物の圧痕が残る。062は丸底の底部をもち、指頭圧痕が全面に残る。

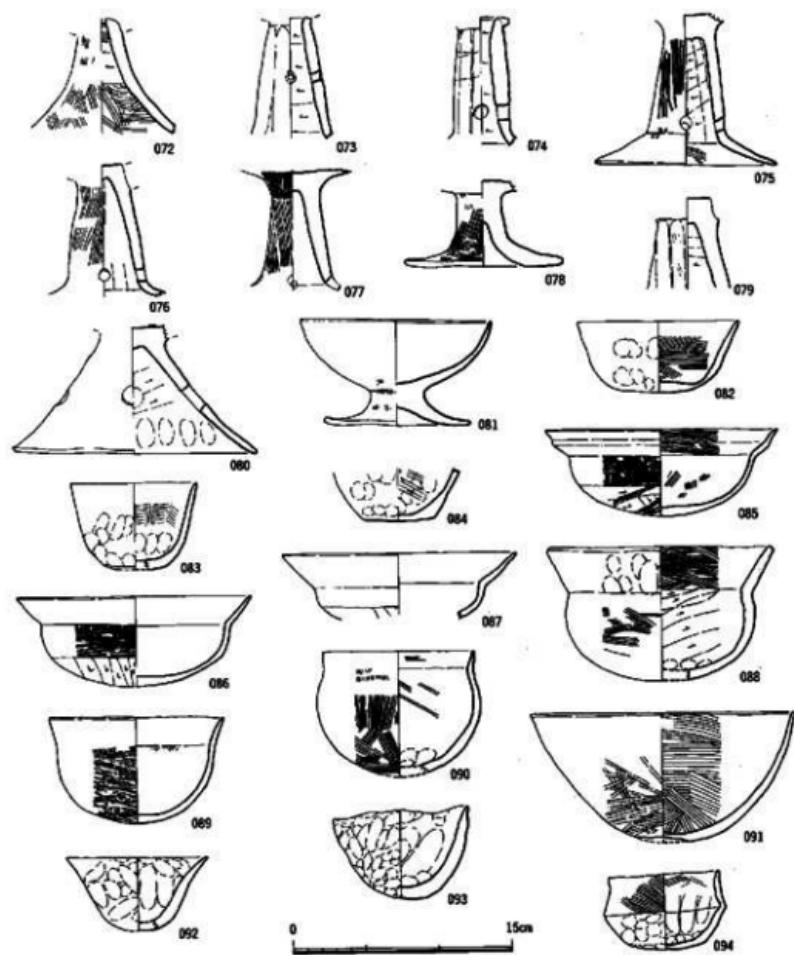
063～081は高杯である。063～065の口縁部は直線的に開き、口縁端部はまるくまとめる。063を除いてやや深い杯部をもつ。066は直線的に外へ開く口縁部とややつまみ上げをする端部をもつ。067～070は口縁部が外へ開き、端部でゆるやかに外へ折れる。071は口縁部を強く外反させ端部まで至る。器面調整では脚部外面にヘラ状工具によるナデ調整を行い、その後指ナデ仕上



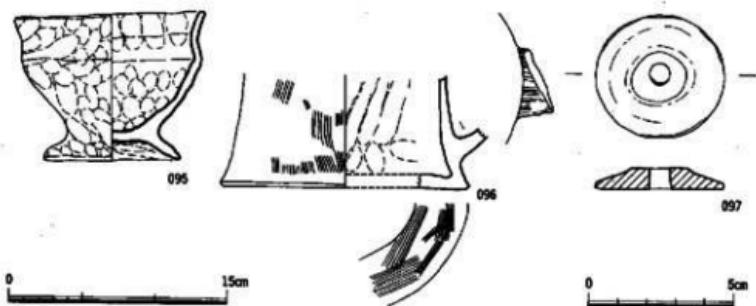
第17図 SK01出土遺物6 (1/4, 1/6)



第18圖 SK 01出土遺物 7 (1/4)



第19図 S.K.01出土遺物 8 (1/4)



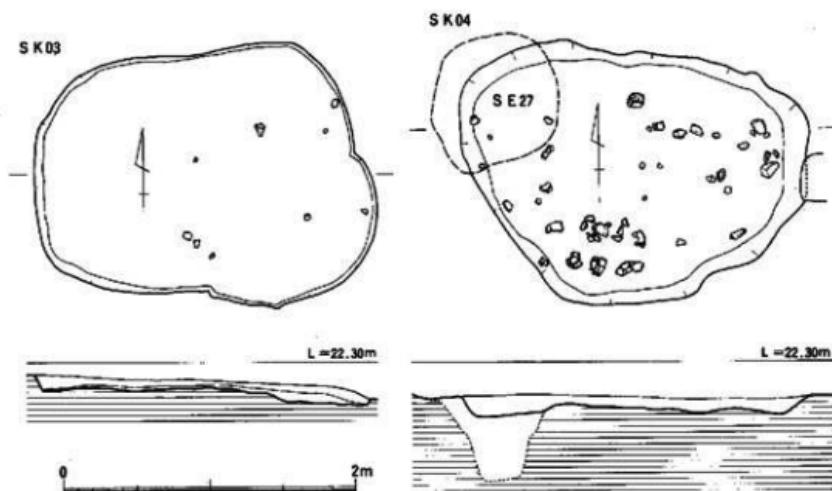
第20図 SK01出土遺物 9 (1/2, 1/4)

げをする。063は筒部内面にヘラ削り、さらに刷毛目、ヘラ磨き痕が裾部にある。口径16.4cm。器高12.7cm。065の杯部内面には暗文風のヘラ磨き、066・067の杯部は刷毛目の後横ナデ、068・070の脚部内面は指しばり、069の杯部はヘラ磨き後の横ナデ、071は刷毛目の後横ナデを施す。072～080は脚部片である。072～074はリング状になった筒部上端を杯部に接合するもある。072は裾部に向かって大きく開き、073・074は筒部がやや膨らみをもち、穿孔がそれぞれ1孔、2孔ある。075は外折する裾部をもち、穿孔を有する。筒部外面には縦刷毛目が残る。076の筒部はわずかに膨らみ、外に折れる裾部をもち、穿孔がある。077は4ヶ所に穿孔をもち、裾部は外へ開く。078は短い円柱形の筒部から裾部が大きく外反する。079は外へ開く筒部をもち、外面調整に指挿えが残る。080はハの字状に大きく開く脚部をもち、裾端部は平坦に仕上げる。4ヶ所に穿孔がある。081はほぼ完形である。脚部のくびれ付近には刷毛目が認められる。口径13.1cm。器高7.3cm。

082～084は杯である。082・083の底部は若干平底状を呈し、胴部から口縁部へと外へ開く。084は平底に近い底部をもち、内湾ぎみに外傾する胴部片である。胴部外面には黒斑がみられる。

085～091は鉢である。085は半円形の胴部に、外傾する口縁部が段をもつものである。調整では外面胴部上位に縦刷毛目の後ヘラ磨き、下位にはヘラ削りとヘラ磨きを部分的に施す。口径15.7cm。器高5.9cm。086・087は外反する口縁部に段をもたないものである。086は口径15.9cm。器高6.2cm。088は半円形の胴部に外反する口縁部をもち、器壁は肥厚する。089は円形状の胴部にゆるく外反する口縁部をもつ。090の口縁部は内湾ぎみに直立する。胴部はほぼ円形を呈する。091は胴部外面にヘラ削りの後ヘラ磨き調整を施す。

092～094は鉢形の手捏土器である。092は胴部から口縁部へ大きく外反する。093は内湾気味に外反し、とともに器壁の凹凸が著しい。口径9.0cm。器高6.1cm。094の胴部は稜をもうけ、内湾気味に直立する口縁部をもつ。口径7.5cm。器高5.2cm。



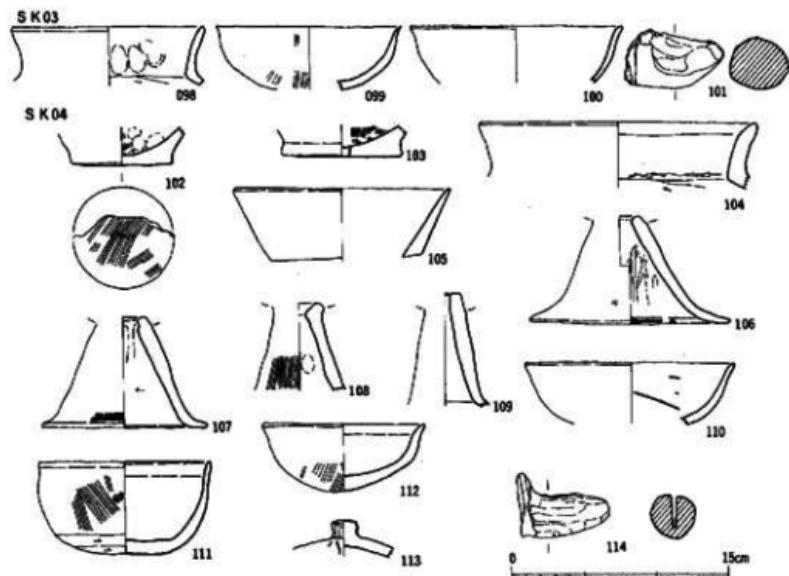
第21図 SK 03・04 (1/40)

095は台付鉢である。縁をもつ胸部から口縁部が外反し、外へ開く。胎土には砂粒が多量に混じる。口径12.8cm。器高10.1cm。

096はジョッキ形土器で、平底の底部から残存する胸部は内傾する。把手は偏平梢円形を呈し、内外面ともに刷毛目調整を施す。

石製品(097) 緑色片岩製の紡錘車である。断面は偏平な台形状を呈する。上下面には研磨を施す。重さ16.8gである。

以上、出土遺物を器種ごとにみてきたが、取り上げ時の群ごとの土器の特徴などについて簡単にまとめておく。E・F群では壺・短頸壺・小型丸底壺・高杯・手捏鉢などの器種がとともに出土しているが、E群にはこれ以外の器種も含み、また点数も多い。このE・F群の出土遺物を比較すると、壺ではF群の019とE群の020・201が口縁部形態で類似するが、胸部形態では019が球形に近く、020・201は梢円形状で、前者が型式的に新しいものといえる。また高杯の比較、F群にみられない複合口縁壺、とくに045などの存在からしても、土層断面からみた(古)E群→F群(新)という先後関係が確認できよう。ただその時期差は小さいものと考えられる。C・D群はE群を切ったもので、D群はS B03の柱穴部分からの出土遺物となる。この両群の遺物は壺などE群のそれと形態的に類似しており、おそらくE群に伴うものが混入したものと考えられる。B群は先にあげた群との切り合い関係はない。出土した壺038の長胴形態、横・斜位の刷毛目による内面調整、また大形複合口縁壺044の胸部外面の刷毛目調整などが特徴である。壺



第22図 SK03・04出土遺物 (1/4)

014の形態はE群に近い。これら出土遺物と切り合い関係からすれば、SK01は近接した時期の複数の遺構が重複した可能性がきわめて高い。

S K 03 (第21図) E区中央で検出した。SK04のすぐ西側に位置する1.62×2.31mの東西に長い不整橿円形の土坑で、深さ12cm前後。底面は若干凹凸があり東側に下る。東側は現代の暗渠に切られる。坑内土層は、上面の一部に炭化物混じりの黒褐色土が認められる他は炭化物混じりの黄褐色土一層である。土師器、須恵器等が出土しているが、数量的には多くない。

出土遺物（第22図098～101）須恵器は壺の胴部破片が1点のみ出土した。他は全て土師器で、うち4点を図示した。098は壺の口縁部片で、胴部からゆるやかに外へ開く。口縁部内面には指押え痕が認められる。胎土には少量の砂粒が混じり、灰褐色～褐色を呈する。099・100は杯である。099の口縁部はわずかに外へ開き、端部を細くつまみ出す。磨滅はあるものの刷毛目の調整痕が認められる。胎土には砂粒を多く混え、外面は暗褐色～灰黑色を呈する。100は口縁端部を丸くおさめる。磨滅が著しいため調整は不明瞭であるが、ナデと思われる。胎土には多くの砂粒が混じり、淡赤褐色を呈する。101は壺もしくは瓶の把手で、表面の1/3弱が剝離している。内面にはヘラ削りを施す。胎土には砂粒が多く混じり、灰褐色～褐色を呈する。最大径は3.55cmをはかる。

S K04(第21図) E・F区との中央境界上で検出した。S K03より0.5m東に位置する1.73×2.43mの東西に長い不整格円形の土坑で、深さ8~15cmである。覆土は多量の炭化物を含む黒褐色土で、表面の一部では焼土も検出した。床面からは糞状植物の炭化物や炭化材が密着した状況で出土している。この土坑の北西端はS E27があり、これを切っている。

出土遺物(第22図102~114) 弥生土器の破片2点、須恵器壺の胸部破片1点の他は土師器が多く出土している。

弥生土器(102・103) 2点とも壺の底部片である。ほぼ平底状をなす底部をもち、端部は明瞭な角をつくる。102は外面に横ナデ、底部に刷毛目を施し、内面には刷毛目調整及び指頭圧痕が認められる。胎土には砂粒が少量混じり、外面は暗褐色、内面は灰褐色を呈する。103は外面横ナデ、底部ナデ、内面には刷毛目を施す。胎土には比較的多くの砂粒が混じる。

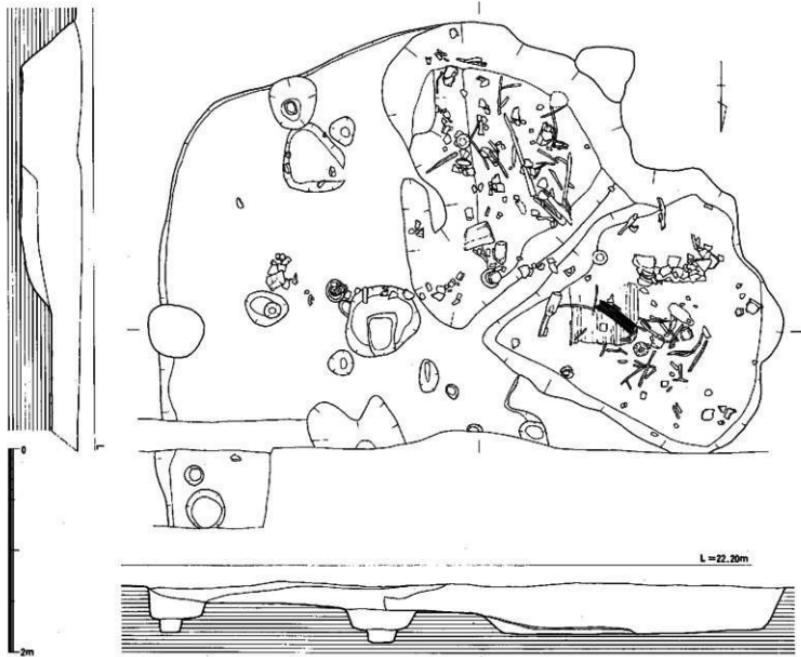
土師器(104~114) 104は壺の口縁部片で、胸部からゆるやかに開く。口縁部には横ナデ調整が施され、内面には強いナデによる胎土の塊がある。肩部内面はヘラ削りを行う。胎土には少量の砂粒が混じる。外面全体にわたり煤の付着が見られる。内面は灰黒褐色を呈する。

105~109は高杯である。105は口縁部との接合部から体部が欠落している破片で、ほぼまっすぐに外へ開く口縁部をもつ。磨減が著しいが、ナデ調整が残る。胎土には砂粒が多く混じる。外面は褐色、内面は淡褐色~灰褐色を呈する。106~109は脚部片で、杯部とはリング状に接合するものである。大きくハの字状に裾部が開く106と小さく開く107があり、他の108と109の裾部は欠損する。106は内面調整にヘラ磨き、横刷毛目を施す。胎土には砂粒が比較的多く混じる。外面は褐色~淡赤褐色を呈し、裾部端部には煤の付着が認められる。107の内面調整は上位に指絞り、それ以外はヘラ削りを施す。胎土には砂粒が多く混じり、灰褐色を呈する。108は外面調整に縦刷毛目とナデ、内面にはナデが施され、さらに指圧痕が残る。砂粒が少量混じる胎土である。109の調整は外面がナデ、内面には横ナデを施す。胎土には小量の砂粒が混じる。

110~112は杯である。110は口縁端部が小さく外反するもので、内面にはヘラ描き刻文を施し、口縁部内外面には横ナデ調整を行う。胎土には少量の砂粒が混じる。111と112はほぼ完形に近いものである。口径は11.6cmと10.8cmである。111の脚部外面には糊の圧痕がみられ、脚部下位~底部にかけてはヘラ削りを行う。胎土には砂粒が比較的多く混じり、外面には煤が口縁部~底部にかけて付着し、内面では口縁部に炭化物の付着が認められる。112は丸底をもち、全体に肥厚し、ゆるやかに外反しながら口縁端部を斜めにつまみ上げる。胸部外面には粗い刷毛目調整を施す。胎土には多くの砂粒が混じる。

113はつまみのある杯蓋である。外面はヘラ状工具による磨きで、天井部にはヘラ描き刻文が施される。胎土には極めて少量の砂粒が混じり、焼成は堅緻で、褐色~赤褐色を呈する。これはいわゆる赤焼土器と呼ばれる土器である。

114は壺もしくは瓶の把手で、上面にはヘラ工具による切込みがある。指によるナデ整形を行



第23図 SK 05 (1/40)

う。砂粒の混じりは少ない。最大径3.1cm。

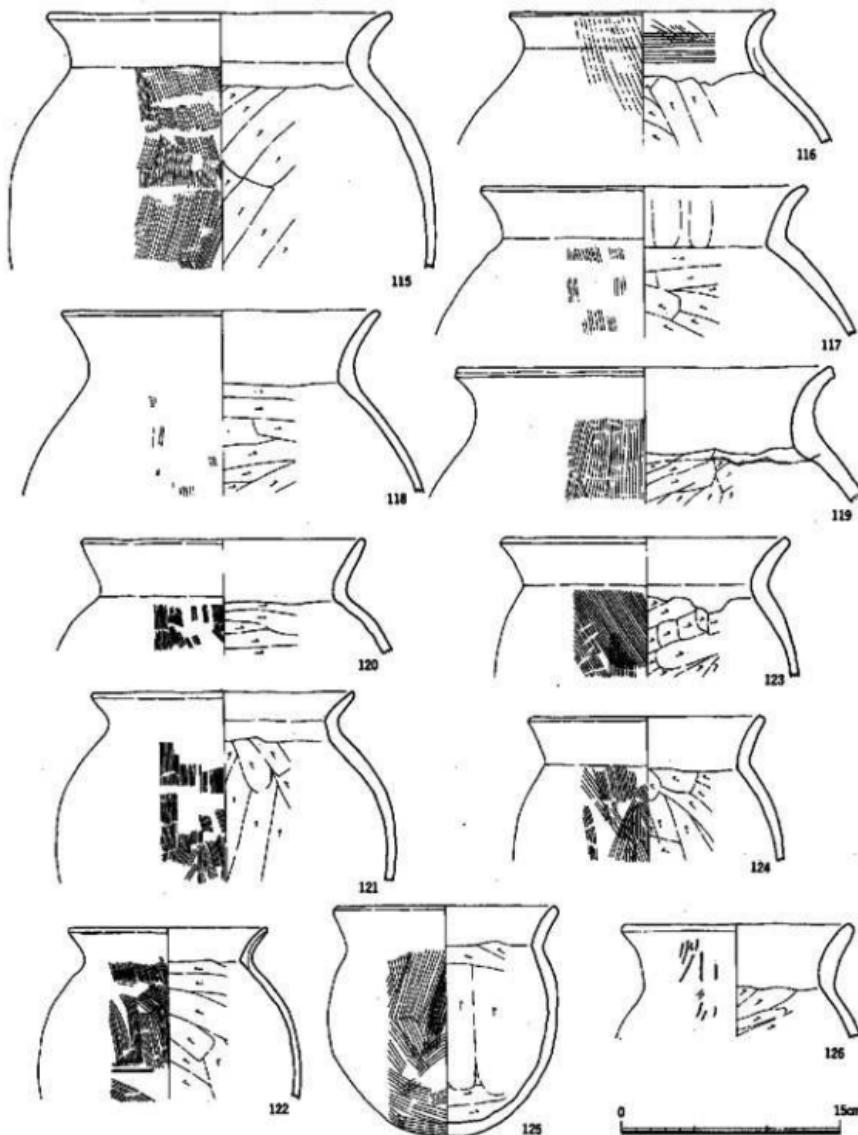
S K 05 (第23図) E・F-1区で検出した。現状では東西径6m強の半円形プランを呈しており、北側の調査区外に延びた部分をあわせて想定すれば、多少の出入りはあるものの円形に近い土坑と考えられる。東南側でSK06・07を切っている。底面は東側から北側にかけての平坦な部分と、南側から西側にかけての平坦面から一段落ち込んだ2ヶ所の不整形のくぼみからなる。このくぼみのうち南側の一つは上面からの深さ約60cm、東側平坦面からの深さ約20cm、東側の一つはそれぞれの深さ約50~55cmと15~20cmをはかる。このくぼみの間には幅10~20cmの平坦面が陸橋のように西南側壁まで続く。東側平坦面は東側壁下で深さ10cm程度。そこから西に向かって傾斜する。この面には10個ほどの大小ピットがあり、そのほとんどがこの土坑に伴うものと考えられるが、SK06と接してある長径0.25m、深さ30cmの平面梢円形のピットは切り合い関係からするとこの遺構に先行する時期のものである。坑内土層は地山の崩れなども一部認められるが大まかに3層に分けることができる。下層が炭化物・有機物を多く含んだ黒褐色粘土質、中層が焼土ブロック・炭化物を多量に含んだ灰黑色土、上層が炭化物を多く含んだ淡灰褐色土となり、ほぼ全域に均一に認められる。いずれにも炭化物が多く混じるとともに、2ヶ所のくぼみの下層には植物遺体が多量に含まれていた。

出土遺物 (第24~33図) 上面から底面に至るまで、土師器・須恵器・木製品・石製品・動物骨・種子などを多量に検出した。土器類の多くは破損しており、その土層に関係なく接合した。また他の遺構出土の土器と接合するものも多い。木製品のほとんどはふたつのくぼみの底面から出土した。ここでは記さなかったが、フイゴ羽口片・種子・馬歯なども出土している。

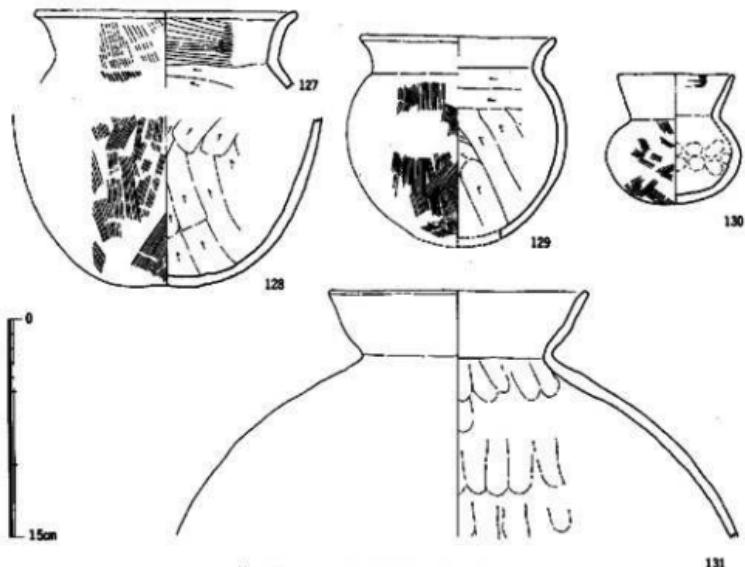
土師器 (115~207) 115~128は壺。このうち115~119は比較的大形のもので、116を除けば口径が20cmをこえる。口縁部の長短など細部には違いが認められるが、比較的厚めのつくりと、張りのある胴部から口縁部が強く外反する器形である点はほぼ似ている。119の口縁端部は角張り中央がくぼむ。他のものは丸くおさめる。器面調整は胴部外面が継刷毛目、内面がヘラ削り、口縁部は内外面とも横ナデが基本的に行なわれる。しかし116~118の胴部外面は刷毛目をナデ消しており、また116の口縁部にはナデ消せなかった刷毛目が残る。いずれも胎土には砂粒を多く混え、焼成は良好。黄褐色・黄灰色など明るめの色調を呈するところが、他の壺と異なる。煤などの付着は認められない。

120・121は上述の壺のやや小振りなものである。調整・胎土・焼成など変わることはないが、褐色・暗褐色の暗い色調を呈し、外面には煤が付着している。また胴部外面に黒斑がある。122はさらに小振りのもので、器壁も薄くなる。胴部外面には刷毛目を縦横に施す。外面一面に煤が付着する。

123~126は胴部の張りが小さいものである。また口縁部の外反がこれまでの壺に比べ小さくなる。124~126が口径15cm前後であるのに対し、123は19.3cmと大振りである。126は全体に厚



第24図 S K05出土遺物 1 (1/4)



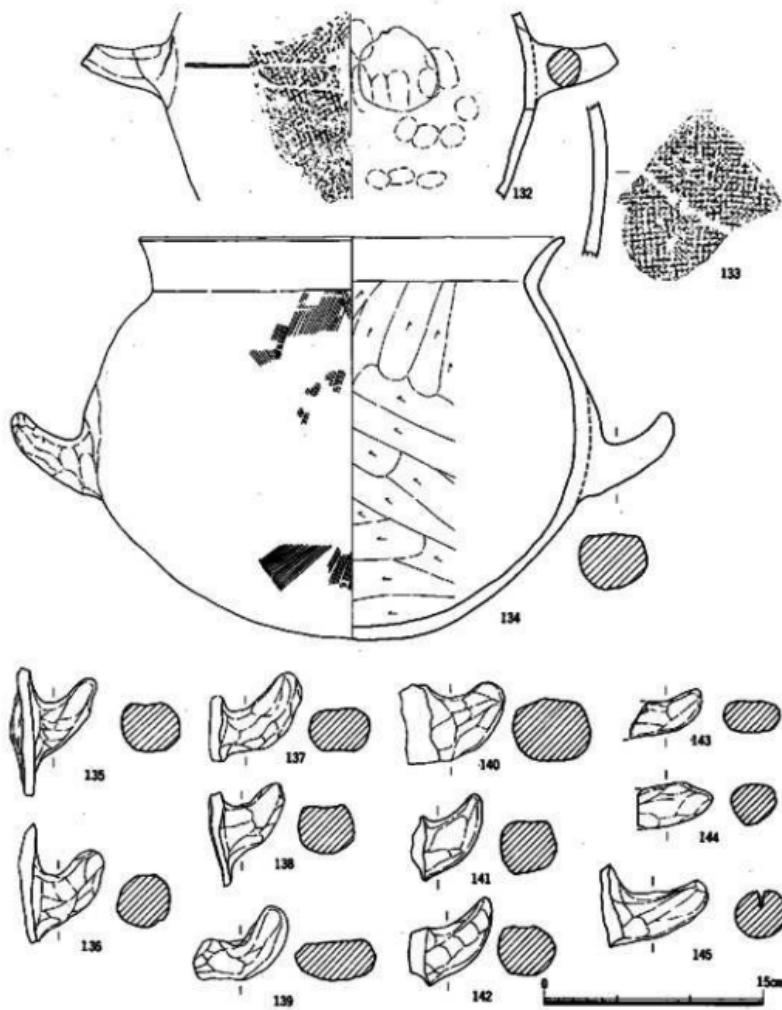
第25図 SK 05出土遺物 2 (1/4)

めのつくりで、横ナデ調整の後、擦痕状のものが縦方向に入るなど他のものと違いがある。また125は底部にまで刷毛目調整がおよぶ。いずれも外面から口縁部内面上部まで煤が付着する。

127は口縁部が外傾気味に立ち、その端部近くでさらに外反する。胸部外面は斜め方向の平行タタキ、口縁部外面は縦刷毛目を丁寧なナデで消し、その内面は粗い刷毛目調整を行う。焼きは良く、外面には煤が付着する。これまで見てきた壺とは様相が異なる。128は121的な形態をもつ壺の底部であろう。丸底で、外面には煤と赤く変化した二次焼成の痕跡が顕著である。

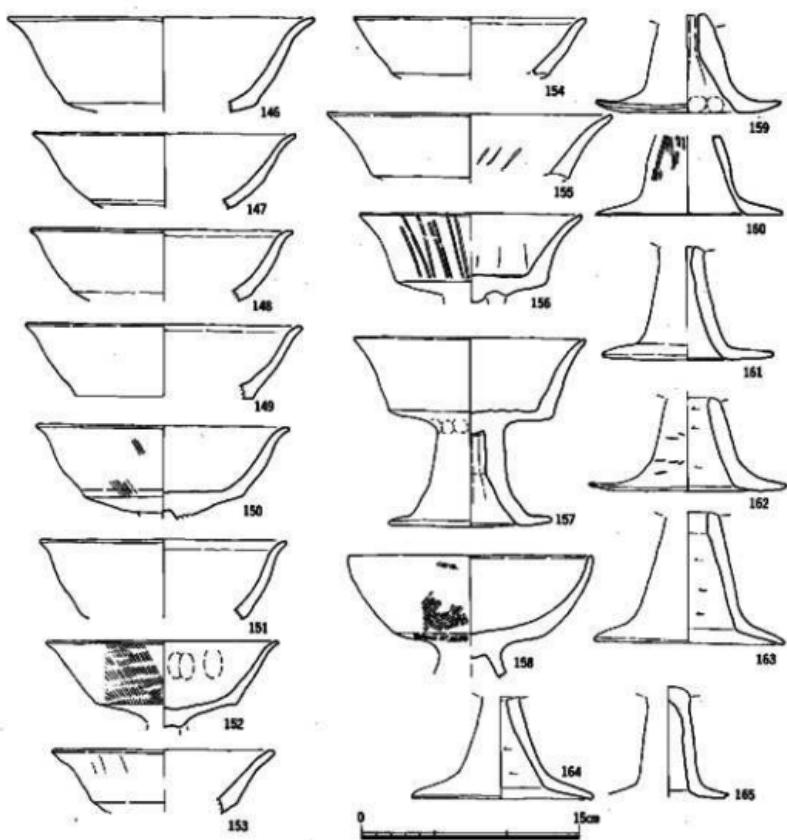
129は短壺蓋で、球形に近い胸部から口縁部が外反する。外面には煤、内面には炭化物が付着する。胸部上半部から口縁部にかけてナデ、胸部下半は細かい刷毛目調整を行う。130はいわゆる小型丸底壺。偏球形の胸部から口縁部が直線的に外傾する。胸部外面と口縁部内面に刷毛目調整が残る。胎土には砂粒を多く混え、焼成はあまり。内外面には煤が付着する。131は大形壺。底部近くまで破片があるが、図示した部分までしか復元できない。大きく張った胸部から口縁部が内湾気味に外傾する。端部はコの字状になる。内外面とも磨滅著しい。胸部内面はナデで仕上げており、ヘラ削りは行っていない。胎土は比較的精良で、赤色粒を多く含んでいる。

132は壺片。張りの小さい胸部最大径部分にナデで仕上げた棒状の把手を挿入する。残存部の外面は格子目タタキで、把手部位に凹線を一条巡らせている。内面はナデ仕上げで、把手を挿入し接合した痕が残る。胎土には砂粒を混え、焼成は堅緻である。外面には赤変する部分があ



第26図 SK 05出土遺物 3 (1/4)

り、また一部には煤が付着する。133も外面に格子タタキをもつものだが、132に比べ格子が大きい。胎土には砂粒が多く混じっており、焼成もややあまい。とともに朝鮮半島系の土器である。



第27図 SK 05出土遺物 4 (1/4)

うか。

134は偏球形の胴部から口縁部が鋭く外反し、胴中位やや下寄りに舌状の把手が付く鍋である。胴部外面には刷毛目調整が残る。胎土には砂粒が多く混じり、焼成はややあまい。全体に磨滅著しい。外面にはわずかに煤が付着する。136～145は輦あるいは134のような鍋の把手であろう。舌状のものが多い。136・145は断面が円形に近く、145の上面にはヘラによる短い切込みが入る。142は上方への反りがなく直線的で、端部は尖り気味になる。胎土は精良、焼きはややあまく、淡灰色を呈する。朝鮮半島系の土器の可能性もある。他は胎土に砂粒を多く混え、

焼成良好、黄褐色を主としてなす。調整はいずれもナデ。

146～165は高杯。このうち146～153は杯部片で、体部は内湾氣味に外傾し、口縁端部近くで外に引き出す。杯部の深浅、底部の段の強弱には違いがある。全体に器表が磨滅しているが、外面は刷毛目あるいは刷毛目の後ナデ、内面は横ナデ調整を行っているようである。150の内底は刷毛目調整で仕上げる。146・147・149の胎土は精良、他のものは砂粒が多く混じる。149・152は煤が付着している。146の脚部は胎土などからみると162の可能性が高い。

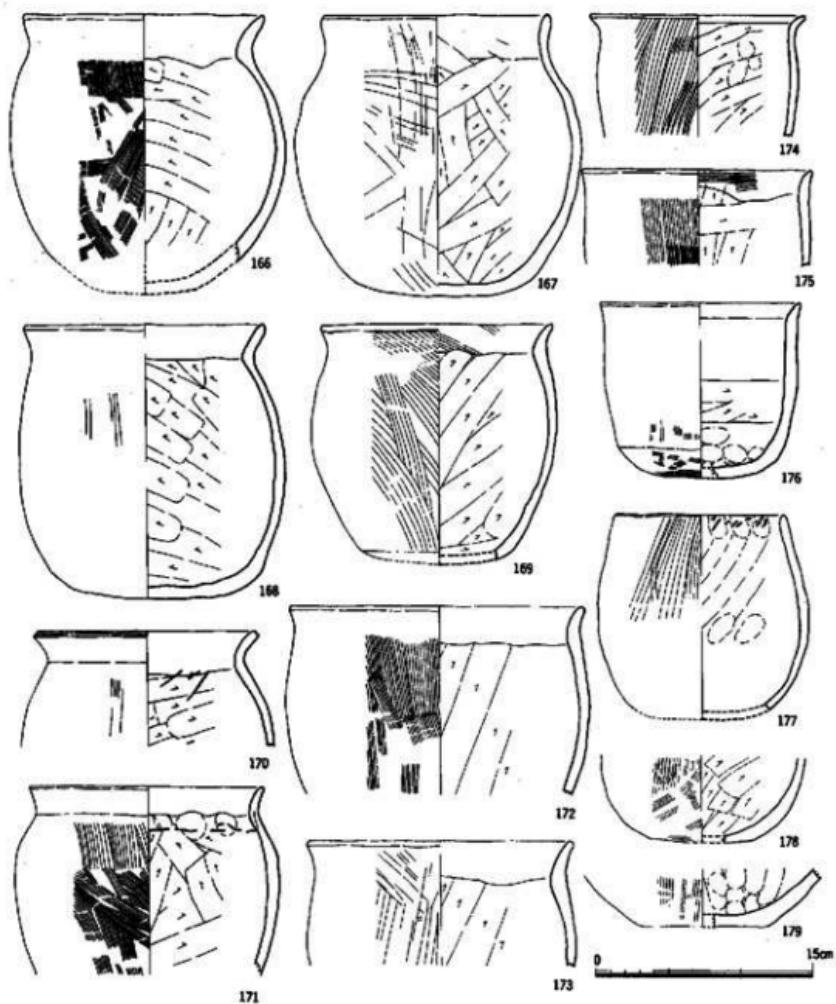
154～157は体部がほぼ直線的に外反するもの。底部と体部の境には明瞭な段を設け、底部そのものは平底に近い。157の脚部は太く、裾部は平坦になり、場所によっては端部近くが上方に反る。いずれも器面は磨滅氣味である。156の外面にはヘラ研磨を施す。他のものはナデ仕上げであろうか。157の脚筒部内面は丁寧に削る。胎土は155が比較的精良、他は砂粒が多い。

158は体部が内湾氣味に外傾し、口縁端部が直立するものである。体部と底部の境にはゆるい段がつく。体部外面は刷毛目、残りは横ナデ調整。器表は荒れており、二次焼成を受けたと考えられる赤変部分が認められ、また煤らしきものも付着している。胎土は精良。

159～165は脚部片である。159～162は脚裾部が平坦になる。これに対して163～165の裾部はハの字状に開き、端部で地に接する。筒部は膨らみをもつもの（159・160）、太めで直線的に開くもの（162・163）、細目で直線的に開くもの（161・164）、細目で開きがほとんどないもの（165）に分けられる。杯部との接合は165が差込み式、他はリング状のまま底部に接合するものである。いずれも筒部内面が比較的丁寧なヘラ削り、他は横ナデ調整で仕上げる。159～162の胎土は精良である。

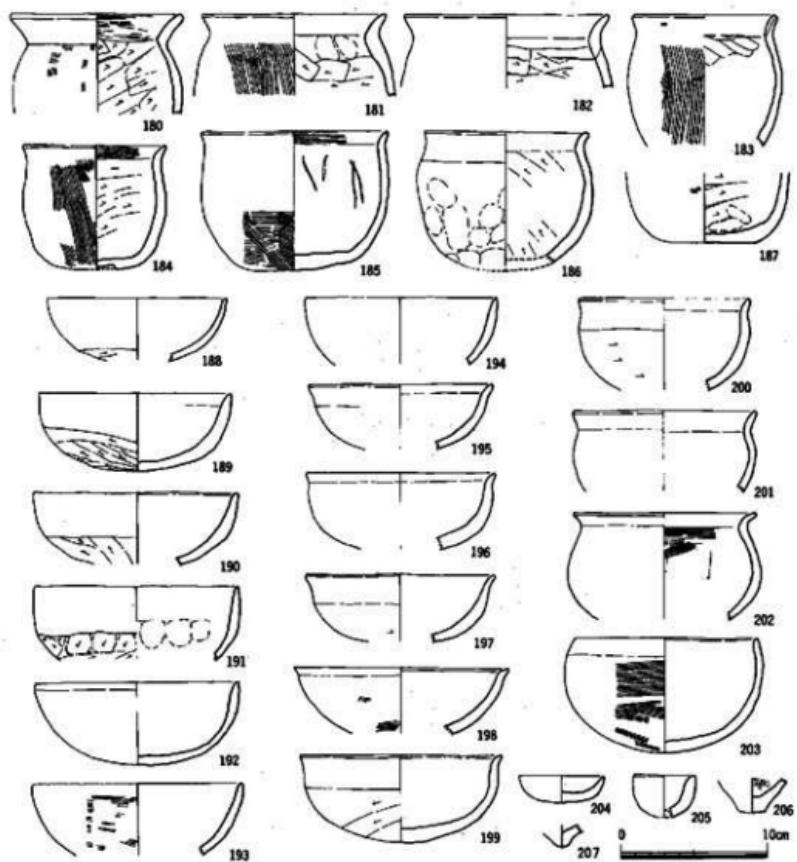
166～187は大きさ、形態ともバラエティーがあるが、鉢としてとらえた。166～179は深鉢である。このうち166～171は張りの小さい胸部から口縁部が短く外反するものである。外反の度合は小さく、同じ個体でも場所によっては口縁部が直立氣味のところもある。残存する底部は、端が丸みをもつものの平底となる。最大径は胸部中位にもつものが多いが、168はやや下彫れ氣味、また171は肩部にわずかな段をなし、そこが最大径となる。器面調整は、胸部内面がヘラ削り、外面は刷毛目を用いるものが多い。167は深い擦痕（粗い刷毛目か）が口唇下まで及ぶ。いずれも外面から内面にかけて煤、炭化物が付着する。特に168は二次焼成を受け、外表が剥落が著しく、調整痕もほとんどが見えない。いずれも胎土には砂粒を多く混え、焼成も169がややあまい外は良好である。167が黄褐色と赤褐色の明るい色調を発する以外は、暗黄褐色～褐色の暗い色となる。172・173は口縁部がわずかに外反するものの、胸部の張りがなくなり、口縁部径と胸部最大径がほぼ同じになる。とともに胸部外面は刷毛目調整であるが、173は粗い。174は焼成良好で、主に赤褐色を呈し、内外面に煤、炭化物が付着する。173は焼成がややあまく、黃灰色呈し、また残存部に煤などの付着はない。

174～177はこれまでみてきた鉢に比べるとやや小振りである。174は薄手の造りで、口縁部は



第28図 SK 05出土遺物 5 (1/4)

短く外反し、胴部には張りがない。外面調整は粗い刷毛目で、内外面とも煤が付着する。175・176は口縁部がほぼ直立し、端部は尖り気味におさめる。176の胴部外面の上半部は刷毛目をナデ消し、その下半はヘラ削りを施し、段がつく。底部は丸みを帯びた平底で、刷毛目調整を行



第29図 SK 05出土遺物 6 (1/4)

う。内外面とも煤、炭化物に覆われる。175の外面は継の刷毛目調整。黄灰色を呈し、残存部に煤などの付着はない。177は口縁部がすぼむもので、胸部は下膨れになる。底部は残存しないが、傾きからすれば平底に近いと考えられる。外面は刷毛目調整であるが、168と同様内外面とも煤が付着し、また外表面の剥落が著しいため明確ではない。178・179は丸みをもった平底片である。ともに外面は刷毛目調整。178は内外面とも煤が付着し、内面の煤は輪状になる。179は焼きが良く、178に比べはっきりとした平底をなす。外面にだけ煤が付着する。

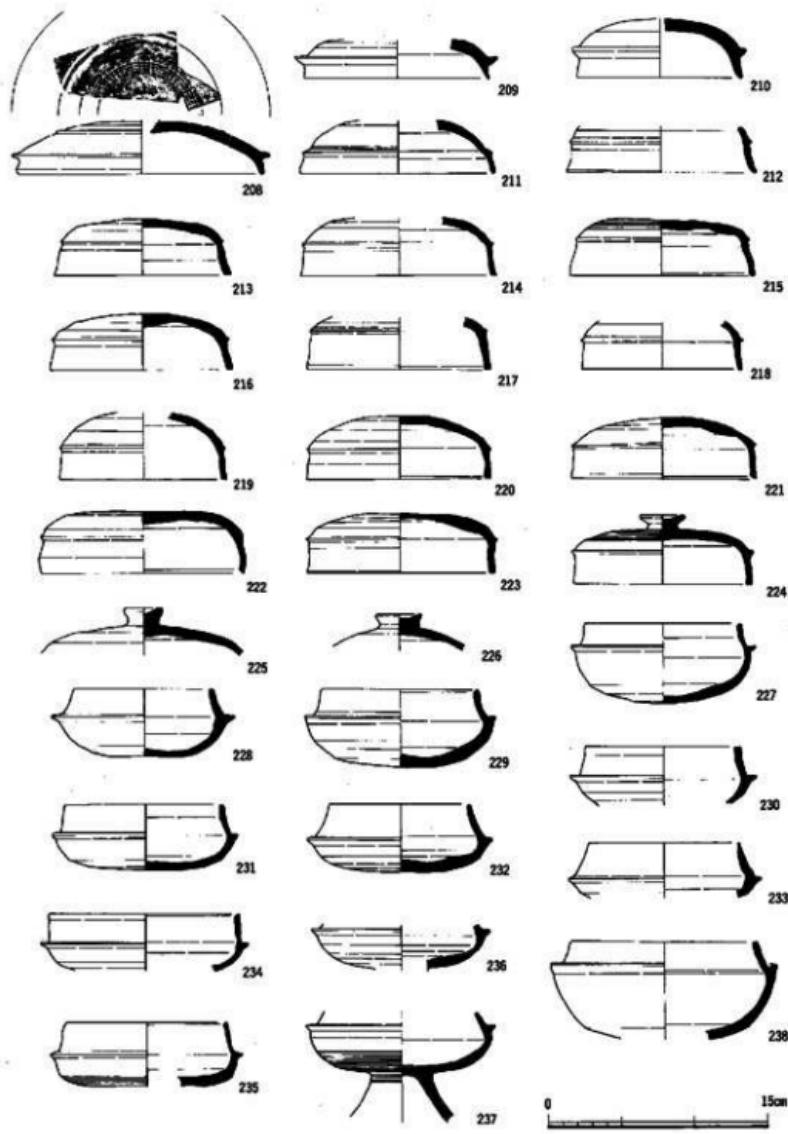
180～187は小形の鉢である。180～183は張りの小さな脇部から口縁部が外反するものである。

180は口縁部が長く、外反の度合も強い。これ以外のものの口縁部は短い。183はさらに小形である。外面調整は182がナデ、他は刷毛目である。いずれも焼成良好で、内外面とも煤を帯びる。184・185は大きさが異なるが、直線的な胴部から短く外傾する口縁部と、やや丸みを帯びた平底をもつ。184は胴部外面から底部にかけて刷毛目調整を行う。185は胴部下半から底部にかけて刷毛目、外は内面も含めナデで仕上げる。ただ内面下半にはわずかながら刷毛目の痕跡があり、その上半部にはナデの後の縦方向の擦痕がある。内面調整に削りを用いない点で外の鉢と異なる。ともに内外面に煤が付着し、187は二次焼成による表面の剥落が著しい。186は口縁部が短く外反する。肩部にはゆるい段がつき、そのあたりが最大径となる。底部は丸みをおびた平底であろう。外面調整はナデ、その下半には指押えが残る。内外面とも煤が付着し、外表は剥落する部分もある。187は小形鉢の底部で、縁が丸みを帯びているものの安定した平底となる。内外面とも煤が付着し、器表は二次的な加熱により剥落する。

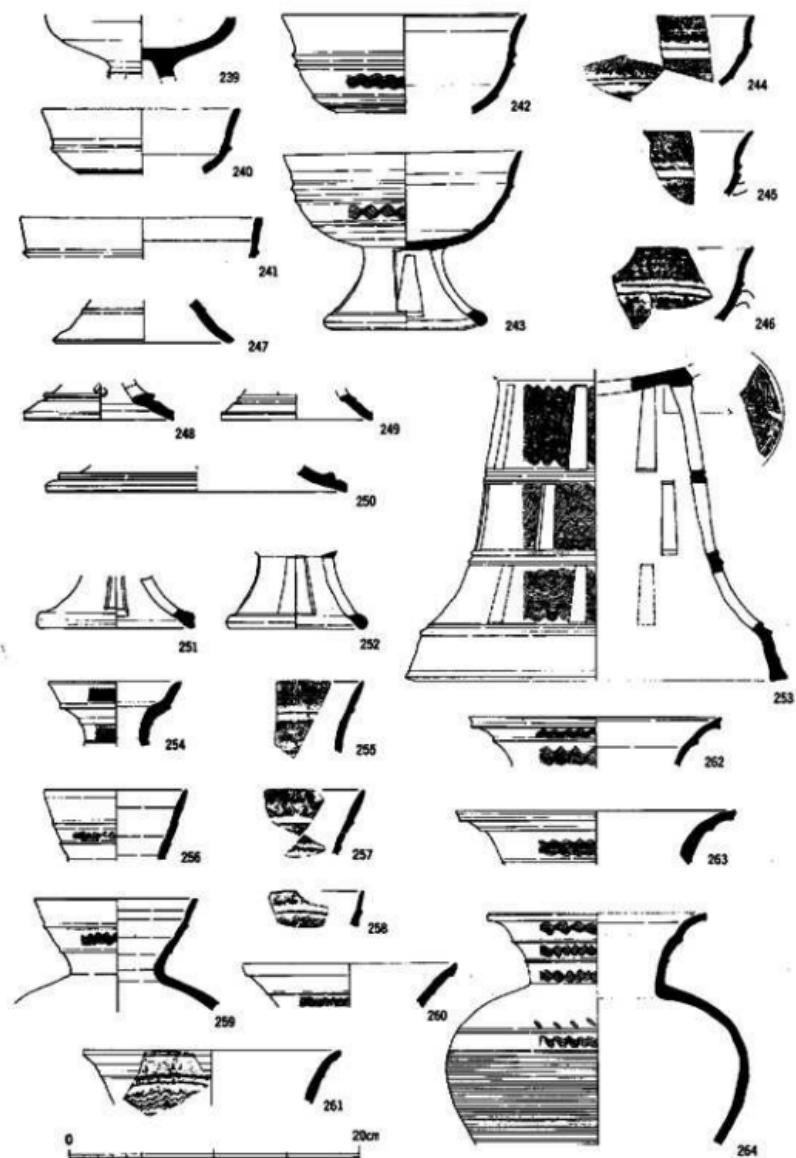
188～203は碗。口縁部がほぼ直立するもの（188～194）、口縁端部が短く外反するもの（195～199）、体部が深くなり口縁部がゆるいくの字状になるもの（200・201）、体部が張り口縁部が強く外反するもの（202）、口縁部が内傾するもの（203）に分類できる。体部外面下半にヘラ削りを行うものが多く、上半部の横ナデ調整との境にゆるい段がつく。193・198・203の外面、201の内面には刷毛目が残る。192・194・202は精良な胎土を用いる。202の焼成はきわめて良い。188・198の外面は煤が付着する。

204～207は杯、鉢のミニチュアである。204は外面が赤変し、口縁部内外には煤が付着する。205の内面は炭化物で覆われる。206は小さな平底、207は尖り底。206の内面は刷毛目調整。

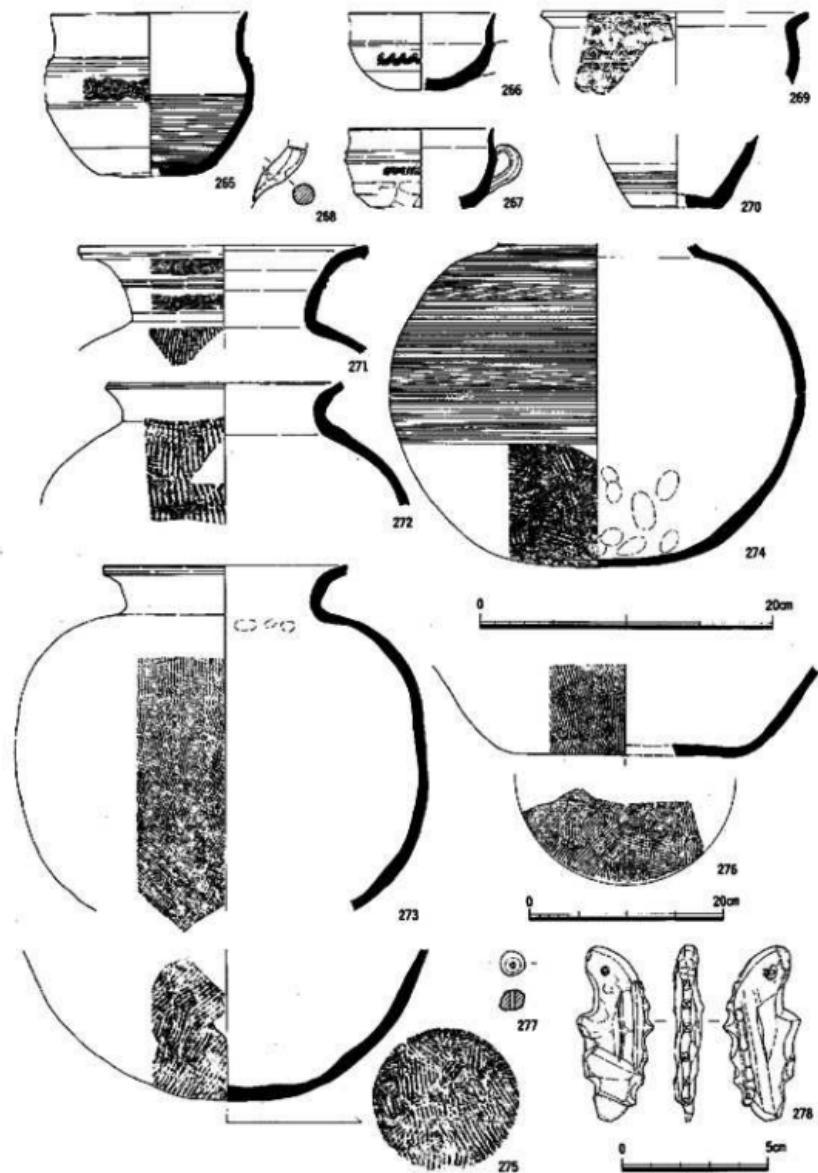
須恵器（208～276） 208～226は蓋。208は天井部が低く、口縁部は短く外に開く。端部は丸くおさめる。天井部と口縁部との境の稜は横に長く引き出す。天井部の中位には一条の凸帯を設け、つまみが付く頂部との間に櫛の押し引きによる施文を行う。胎土はやや粗く、焼成良好。内面には自然釉がかかる。他の蓋に比べ口径が大きい。S E 27出土破片と接合するが、図示したように口縁部と天井部は直接には接合しない。陶質土器の可能性が強い。209も同様な形態をもつもので、口縁部との境に上方に向く断面三角形の稜を設ける。口縁部はわずかに開き、端部は尖り気味になる。稜、口縁端部ともシャープである。210は208と似るが天井部が丸みをもち、器壁も厚みがあり全体に鈍い。頂部にはつまみが付く。208・209の器面調整、胎土、焼成、色調はほぼ同じである。211の稜は小さくなり、天井と稜の間には浅い凹線が巡る。口縁端部は丸くおさめる。天井部全体に丁寧なヘラ削りを施す。焼きがあまい。212～217は天井部が平坦に近く、口縁部との境の稜は小さくなる。口縁部は先にあげたものに比べ長くなり、内湾気味（212～215）、あるいは直線的（216・217）にわずかに開く。212の口縁端部は内面側にゆるい段を設ける。他は平坦面をなし、その中央がわずかにくぼむものもある。天井部のほぼ全面にヘラ削りを行い、残りは横ナデ調整で仕上げる。215の天井部にはカキ目を施す。213は焼きが



第30図 SK05出土遺物7 (1/4)



第31図 S K05出土遺物 8 (1/4)



第32図 S K05出土遺物 9 (1/2, 1/4, 1/6)

あまい。218・219は口縁部など216・217に近いが、口径がひとまわり小さい。219は天井が高く丸くなる。220～223は平坦に近い天井部と直立気味の口縁部をもつ。222・223は特に天井部が平坦である。口縁端部は223が中くぼみの平坦面、他は内面側に鈍い段が付く。221の焼きはあるまい。224～226はつまみが残存する蓋である。224の形態は中くぼみの偏平なつまみが付くのを除けば222・223とほとんど変わることろがない。ただ天井部はカキ目調整で仕上げる。225のつまみは小振りである。225・226の焼きはあまい。

227～233は杯。227～229は立ち上がり部より体部が深い。立ち上がり部は内湾気味で、底部は丸みをおびる。端部処理にはバラエティーがある。227・228の受け部は細く上方へ引き出し丸くおさめる。229も上方に向かうが、その下半が体部と直線的につながる。体部のヘラ削りは227が1/3以下の部分、229が1/2以下の部分、228は体部と底部の間にだけ施し、底部はナデ調整で仕上げる。227・229の焼成はややあまい。230も体部が深い類であろうが、立ち上がり部の内傾角度は小さく、受け部は鋭く横に引き出す。231～233は体部が浅く、底部が平坦に近い。長い立ち上がり部は直線的に内傾し、端部はやや尖り気味におさめる。受け部は短く横に引き出す。

234～252は高杯。234～238は有蓋高杯であるが、うち234・235・238は脚部が残らず杯の可能性もある。238は体部が深く、形態的には229に似る。234の立ち上がり部はほぼ直立し、端部は内傾する。235～237の杯部は杯の231～233とほぼ同じで、立ち上がり部に比べ体部が浅く、底部は平坦に近い。237の脚部部は透かしをもたず大きく開く。235の杯部底と237の杯部底から脚部上位にカキ目を施す。234・235・239はシャープなつくりである。239は四方透かしの脚部から丸みをもって杯部底が立ち上がる。厚みのあるつくりで、杯部内底は不定方向のナデ、他は横ナデで仕上げる。240～246は無蓋高杯。240は杯部底との間に1条の稜をもうけ、口縁部が長く外傾する。口縁端部は中くぼみになる。底部にカキ目を施し、焼きはあまい。241は直立気味の短い口縁部下に稜をつくる。242～246は杯部が深くなるもので、口縁部は内湾気味に外傾する。端部は段が付くもの(242・246)と尖り気味におさめるもの(243～245)がある。口縁部と体部の境に2条、体部と底部の境に1条の凸帯を設け、その間に櫛描波状文を施す。ただ244だけは口縁部が短めで、口縁部下の凸帯は1条である。245・246のには体部部分に把手がはずれた痕が残る。242の底部はカキ目調整。243の脚部は下方に向かって開き、長方形の透かしを四方に空ける。脚端部は丸みをおびる。242・243の杯部内底には自然釉がかかる。243～252は脚部片。247は裾部が開き、その上位に横線を1条巡らす。248は円形透かしをもち、その下に段をなし、端部は中くぼみの面を作る。249は248とほぼ同じ形態を呈するが、透かしは長方形となる。250は大きく開いた裾端部片で、三角の凸帯を巡らす。251・252は長方形の透かしをもつもので、251の端部は丸みを帯びながらも中くぼみの面を作る。252は243とほぼ同じ形態である。

253は器台脚片。脚部は凸帯により4分割され、上3段は長方形透かしを設け、透かしの間は櫛描の波状文を施す。最下段の脚裾部は外に張り、端部は角張る。受け部底にはタタキとヘラ

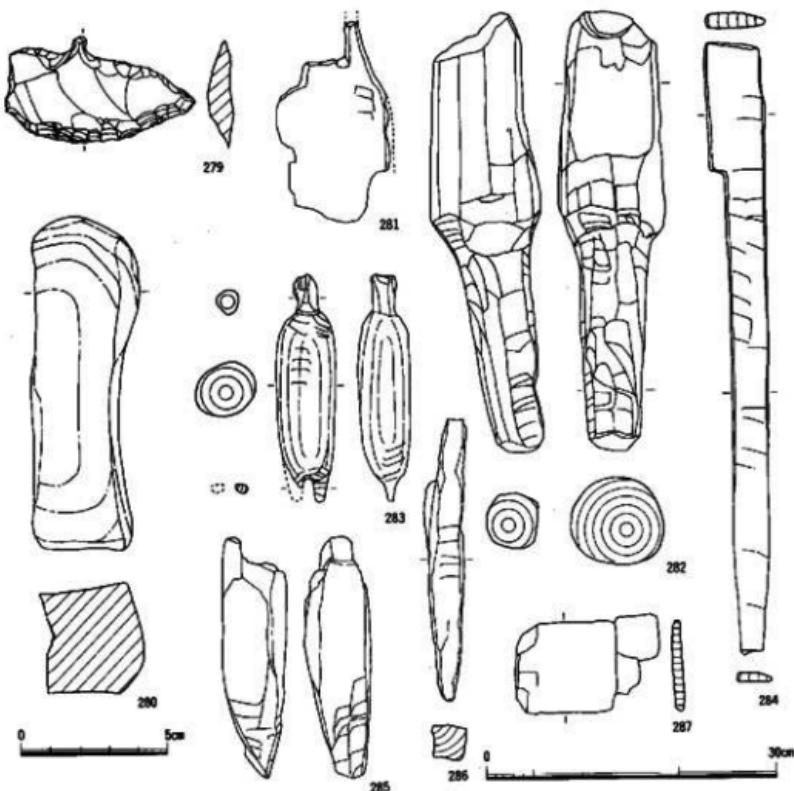
による浅い切れ込みが残る。細片をつなぎ合わせて復元したため、傾きや最下段の透かしなどには問題が残る。

254は壺であろうか。よくしまった頸部から口縁部下半が横に開き、凸帯をはさんで上半部が外反する。口縁上半部と頸部下半に細かい櫛描波状文を施す。小形で樽形壺の口縁部の可能性もある。内面には自然釉がかかる。

255～261は壺。255は直立気味に外傾する口縁に1条の凸帯を巡らす。255・256は直線的に聞く口縁部の途中に2ヶ所凸帯を巡らせ、その間に櫛描の波状文を施す。256の凸線は鈍い。258は直立気味の口縁端部直下に1条の凸線を巡らせ、その下に櫛描波状文を施す。255～258の口縁端部は尖り気味である。259は胴部から口頸部がやや内湾気味に開く。途中2条の凸帯が巡り、その間に櫛描波状文を施す。口縁端部はわずかに内傾する。胴部にはヘラによる凹線が縦方向に入る。赤紫色を呈し、胴部外面と口縁部内面には自然釉がかかる。260も壺であろうか。口縁は肥厚し、端部は尖る。口縁下には1条の凸帯が巡り、その下に櫛描波状文を施す。261は外反し丸くおさめる口縁下に1条の凸帯を巡らせたもので、やはり大形の壺となるものか。

265はやや大形であるが碗と考えた。口縁部はゆるく外反し、尖り気味におさめる。肩部に2条の凸帯、胴中位に凹線を巡らせ、間に櫛描の波状文を入れる。底部は平底。胴部内面下位にはカキ目を施す。およそ1/3の残存部には把手の付く痕跡はない。266・267は把手付碗。267は直立気味の口縁部下に2条の凸帯が巡り、さらにその下に櫛描波状文が施される。底部は手持ちのヘラ削りを行う。266は口縁端部を欠くが、肩部には凸帯があり、その下に波状文を施す。把手はその破損部分からする267のような環状ではなく、耳状のものと考えられる。268はこの種の碗もしくは高杯の把手片である。269は鉢。張りのない胴部から口縁部が外反し、端部はコの字状におさめる。胴部には粗い櫛描の波状文を施すが、その上を横ナデするため不明瞭である。焼きがきわめてあまい。270は鉢の類の底部であろうか。平底で、胴部下半には部分的にカキ目が巡る。小形の樽形壺の可能性もある。

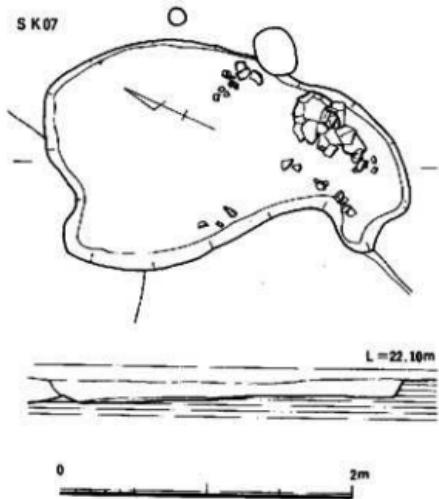
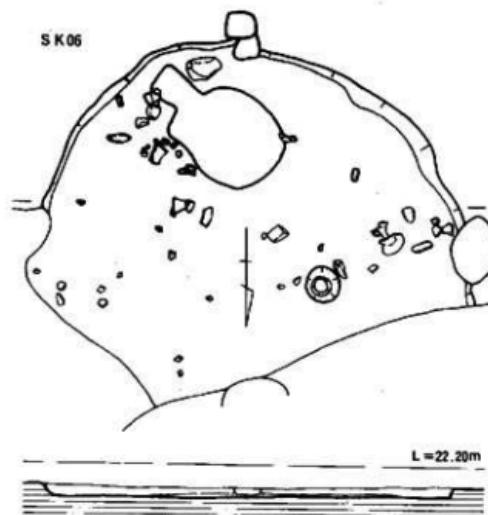
262～264・271～276は壺。264は大きく張った胴部から口頸部が外反する。口縁端上部はつまみ上げられ、下部は明瞭な角を作る。口縁端部と胴部の間は2条の凸帯によって3分割し、それぞれの区画に櫛描波状文を施す。胴部最大径の部分には2条の浅い凹線が巡り、その間にも口頸部のものとは違う櫛の波状文を入れる。また上の凹線の上には櫛による列点文が巡る。胴部外面下半にはカキ目を施す。胎土は精良であるが、焼きがややあまい。262・263・271口縁部が大きく外反するものであるが、口縁直下に1条の凸帯を設ける。さらに下がったところに1条ないし2条の凸帯を巡らせ、それをはさんで櫛描波状文を施す。口縁端部は262が尖り気味、263が上方につまみ上げ、271は中くぼみのコの字状となる。271の胴部には平行タタキを行う。263・271には自然釉がかかる。272は胴部から丸みをもって口縁部が外反する。その端部は丸みを帯び、中央に細い凹線が巡る。胴部外面は縦の粗い平行タタキ、他は横ナデ調整。273の口縁



第33図 SK 05出土遺物10 (1/2, 1/6)

部は外反し、端部はなかくぼみのコの字状を呈する。胴部は焼き歪んでいるが、肩が張るようで、外面には細かい繩文タタキを施す。全体に端正な感じを与える。274はやや偏球形の胴部で、焼き荒れが著しいものの、外面上半にはカキ目、下半には平行タタキが認められる。275は丸底をなし、底部にまで平行タタキがおよんでいる。276は大形壺の底部片で、胴部との境は丸みもつものの平底をなす。外面は胴部から底部までいたるまで平行タタキを行う。内面は同心円タタキをナデ消しているようである。外面の多くに自然釉がかかる。焼き歪む。この他にも平行タタキをもつ大形壺がある。

玉類 (277・278) 277はガラス製小玉。直径9.0mm、厚さ6.8mm、孔径1.5mm。コバルトブル



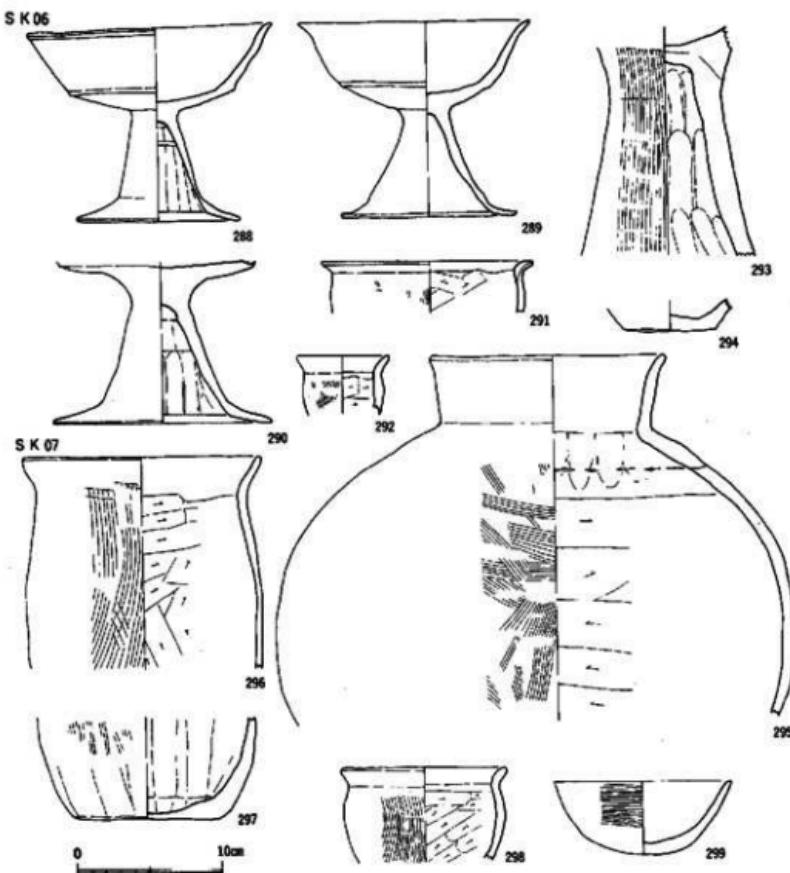
第34図 SK 06・07 (1/40)

ーを呈する。278は滑石製の子持ち勾玉。背面には6個、腹面には2個の突起がある。また1側面には4個の突起、もう1面には帯状の高まりがある。頭部の孔は両側から穿つ。穿孔に失敗した痕が残る。

石器 (279・280) 279は頁岩製の石匙。混入品。280は長方形の砥石。一端は丸く作る。長辺部分の3面が使用されている。砂岩製。

木器 (281~287) 281は平鉗で、端部は鉄刃を取り付けるためえぐれていたが、乾燥・収縮して図示した部分しか残存しない。282は芯持ち材を使用した槌。作りは粗い。283も芯持ち材を用いたもので、一端に突起があり、もう一端が二股に分かれる。木錘の類であろうか。284は加工板材で、表面には削り痕が残る。板目材。285・286は削材を使用した杭。287は板材。

SK 06 (第34図) E・F-1区で検出した円形状の土坑である。北側をSK 05に、東側をSK 07に、また坑内南側をSE 30に、さらに外縁を複数のピットに切られる。このように破壊の度合が著しいが、残存部の状況からすればおよそ径3.0m程度のものとして復元できよう。深さは10cm足らず、その底面は比較的平坦である。坑内覆土は2層の水平堆積を示し、上層が灰褐色土、下層が炭化物を多く含

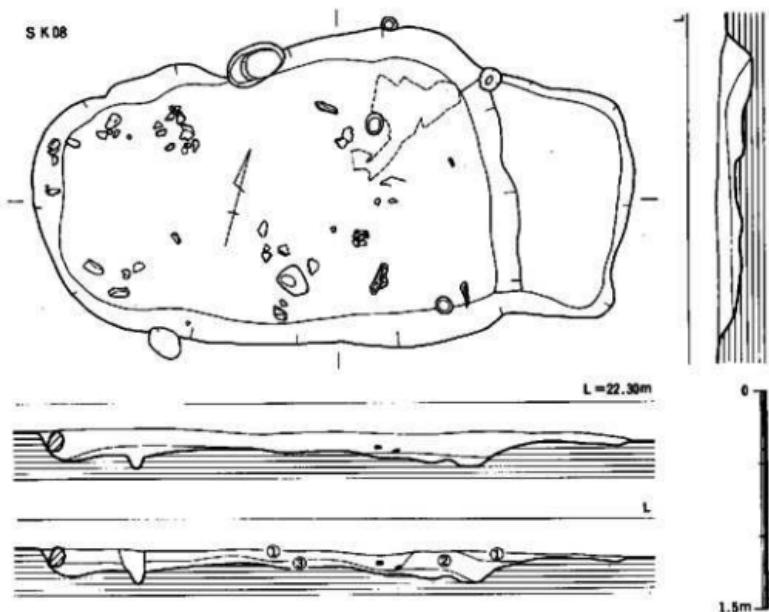


第35図 SK 06・07出土遺物 (1/4)

んだ黒褐色粘質土となる。その厚さはともに5cm内外である。

出土遺物（第35図288～294） 多量の土師器片と、弥生土器片がある。須恵器も一部出土しているがS E 30付近に集中しており、SK 06には伴わない可能性がある。

土師器（288～292） 288～290は高杯。288・289の杯部は深く、その体部はわずかに内湾しながら外傾し、端部を短く横に引き出す。脚部は289がハの字状に脚端まで開くのに対し、288・290は開きは大きいものの筒部と裾部の境が明瞭となる。いずれも器表の磨減著しいが、288の杯部外面には刷毛目が残る。また杯部と脚裾部の同じ位置に黒斑がある。288・289は比較的精



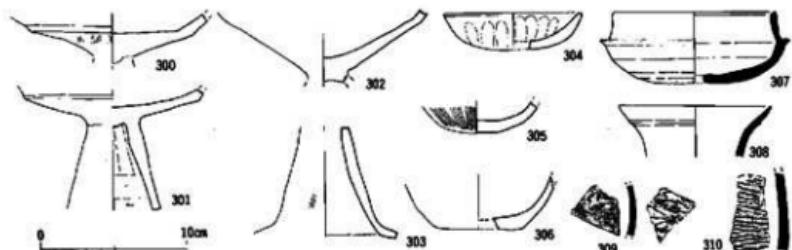
第36図 SK 08 (1/40)

良な胎土で、ともに淡赤褐色を呈する。288は表面にスリップをかけた可能性がある。291は鉢。張りのない胴部から口縁部が短く外反する。外面は刷毛目、内面はヘラ削りを行うが、外面は磨滅気味である。内外面とも煤が付着する。292はミニチュアの鉢。外面は刷毛目調整を行う。

弥生土器 (293・294) 293は大形高杯の筒部であろうか。外面は刷毛目調整、内面は絞るが、器壁は厚い。294は壺の底部と思われるが、器表の剥落著しく、はっきりしたことはわからない。胎土には砂粒がきわめて多い。

S K 07 (第34図) F-1区で検出した。南北方向に長軸をとる不整形土坑で、特に西側壁の出入りが著しい。長さ約2.5m、最大幅1.6m。深さは10cm程度と浅い。覆土は2層のほぼ水平堆積で、上層が灰褐色土、下層が黄褐色土となっている。厚さはともに5cm程度である。S K 05に切られ、S K 06を切る。また東南隅がS K 08と接するが、先後関係は不明。南側から土師器がつぶれて出土した。

出土遺物 (第35図295~299) 土師器片が多量に出土した他、須恵器が少量ある。図示したのは土師器。295は南側からつぶれて出土した壺。やややがんだ球形の胴部から口縁部が直立気味に外傾し、端部は丸く外に出る。器面の磨減著しいが、胴部外面には刷毛目、口縁部は内外面と



第37図 SK 08出土遺物 (1/4)

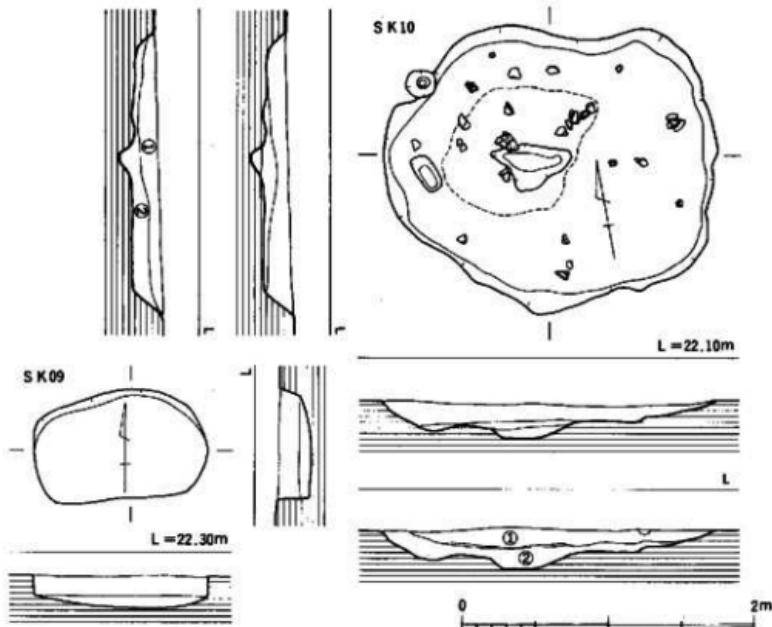
も横ナデ、胴部内面上位は指揮え、それ以下はヘラ削りを行う。胎土には砂粒が多い。外面には黒斑が2ヶ所あり、煤らしきものも付着している。296は盤あるいは深鉢であろう。直線的な胴部から口縁部がゆるく外反する。外面は刷毛目調整。また煤が付着する。小片のため口径には問題が残る。297は平底をなす深鉢。残存胴上半は刷毛目、下半はヘラナデで仕上げる。底部には方形台の痕跡がわずかに残る。二次焼成を受け、器表が赤変し剥落するとともに、煤が付着する。298は小形の鉢。口縁部はゆるいくの字状をなす。外面は継刷毛目。外面の一部と内面上半部に煤をおびる。299は碗。丸底で、口縁端部は尖り気味になる。外面上位は細かい横刷毛目、他は横ナデで仕上げている。焼成はきわめて良好である。内外面とも煤をおびる。

S K 08 (第36図) F-1区で検出した東西に長軸をとる長さ3.24m、幅2.20mの橢円形土坑で、東側に幅1.60m、長さ0.8mの張り出し部が付く。深さは18cm前後、張り出し部は5~7cmである。底面はほぼ平坦で、その西北隅には植物質のものがしきつてある。坑内覆土は①炭化物、焼土ブロックなどを多量に含んだ黒褐色土が表面から約10cmの厚さでほぼ全域にみられ、その下に③炭化物を含みよくしまった暗黄褐色粘質土がある。ほかに②炭化物を含まない灰褐色粘質土が部分的に認められる。土器類は①層の炭化物中に多く混じっている。

出土遺物 (第37図300~308) 土師器、須恵器が出土しているが、いずれも小片で実測できるものも少ない。

土師器 (300~306) 300~303は高杯。杯部底から段をなして体部が開く類のものだが、302は杯部底の立ち上がりが大きい。304は碗。丸底で浅い。内外面とも指揮え調整。305・306は鉢。305は底部まで刷毛目調整が及び小さな平坦面を作る。外面には煤が覆う。306は平底で、胴部との境には黒斑がある。いずれの土師器も磨滅している。

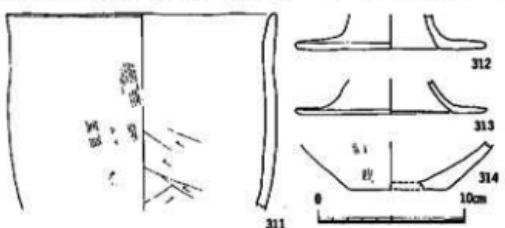
須恵器 (307~310) 307は杯。立ち上がり部は内傾し、端部は内面で段をなし尖り気味になる。受け部は上方に短く引き出し、体部から底部は丸みを帯びる。308は直口壺。口縁下には1条の三角凸蒂を巡らす。309は外面に鳥足状タタキをもつ壺?片。薄手の作りで、内面は横ナデで仕上げる。310は外面に平行タタキを施す壺片。内面はナデ調整。焼きがあまい。



第38図 SK09・10 (1/40)

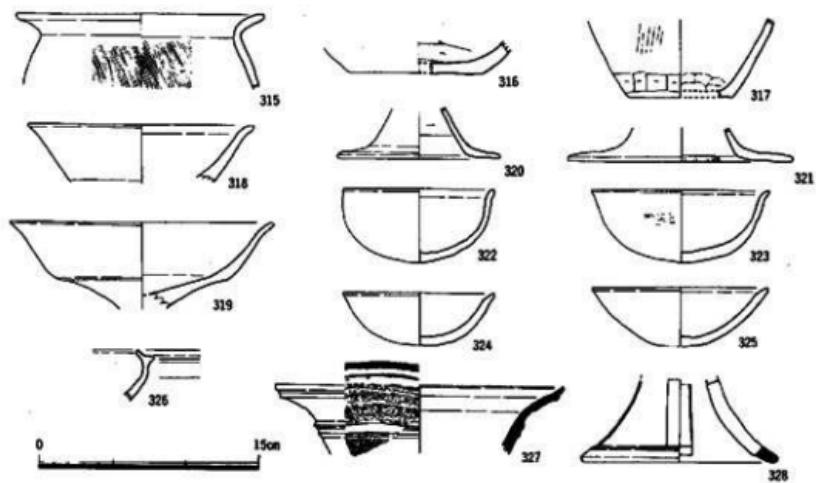
**SK09 (第38図)** F区中央部で検出した東西に長軸をもつ梢円形土坑である。長さ1.2m、幅0.73m、深さ24cmをはかる。側壁は北側をのぞきほぼ垂直に立つ。覆土は炭化物混じりの黒褐色土1層である。SB02と重複している。

**出土遺物 (第39図)** 遺構上面近くから土師器片が少量出土している。311は總。口縁部はほぼ直立する。外面刷毛目、内面中位までは横ナデ、以下はヘラ削り。312・313は高杯脚部片。筒部の開きは大きく、裾部は横に広がる。ともに磨滅著しい。314は深鉢の底部。平底で、外面には刷毛目が残る。



第39図 SK09出土遺物 (1/4)

**SK10 (第38図)** F-1区で検出した。平面は不整梢円形で、ほぼ東西方向に長軸をとる。床面はほぼ平坦で、中央西寄りに深さ6cm、平面55cm×33cm程の不整形掘り込みがある。南北約



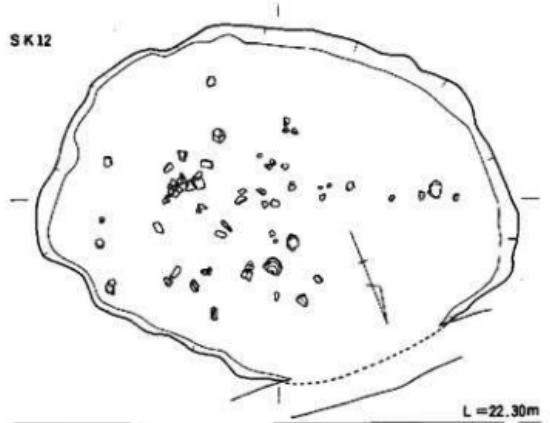
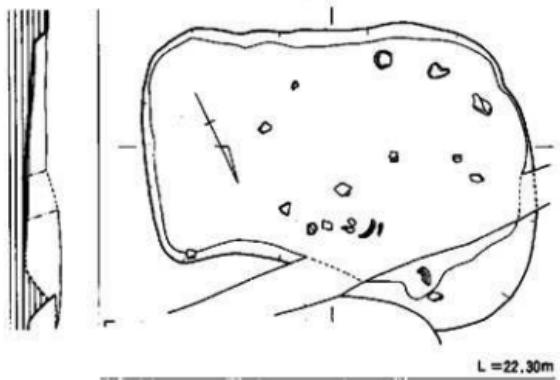
第40図 SK 10出土遺物 (1/4)

2.0m、東西約2.3mで、深さ約18cmをはかる。坑内土層は①多量の炭化物・焼土を含む黒褐色土、②少量の炭化物を含む灰褐色土と黄褐色粘質土が混じたもの2層で、このあいだには2~3cmの厚さの炭化物層が先述の掘り込みの上面を中心広がる。出土遺物の多くは①層から出土した。

出土遺物(第40図) 土師器を中心とし、他に須恵器、少量の弥生土器を含む。

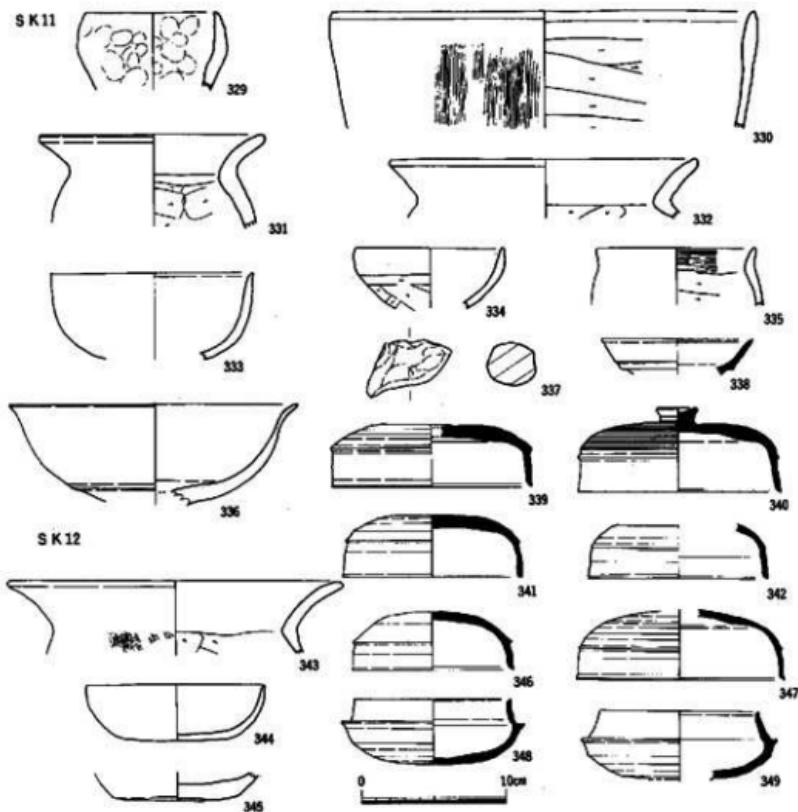
弥生土器(315) 口縁が強く外反する姿で、胴部には内外とも斜め方向の刷毛目を施す。全体的に灰褐色を呈し砂粒を多く含む。焼成は良好。

土師器(316~326) 316・317は深鉢の底部である。316は平底で、内面にはヘラ削りが施され、炭化物の付着が認められる。灰褐色を呈し、焼成は良好である。317は平底をなし、底部外面は幅約2.0cmにわたってヘラ状工具による横方向のナデ、それより上部では縦方向の刷毛目の痕跡が見える。318~321は高杯である。318・319は杯部片で口縁端部がわずかに外反し、底部との間には段がつく。ともに淡褐色を呈するが、磨滅が著しく調整は不明。320・321は脚部片でともに裾部が強く屈曲して広がるものである。調整は320の内面がヘラ削り、321の内面が刷毛目、他は横ナデ、あるいはナデ仕上げである。淡茶色を呈し焼成は良好である。322~325は椀である。いずれも丸底である。322~324の口縁端部は外反し、また322のみ体部が垂直に近く立ち上がる。いずれも磨滅が著しく調整は不明瞭であるが、323の外面に刷毛目痕が見られる他は横ナデ、もしくはナデによる仕上げかと思われる。326は受部を有する杯で、体部は明瞭な角を



0 2m

第41図 SK11・12 (1/40)



第42図 SK 11・12出土遺物 (1/4)

もって底部へつながる。淡褐色を呈し、焼成はあまり。

須恵器 (327・328) 327は壺の口縁部である。口縁端部直下に1条、頸部に2条の三角凸帯が巡り、頸部三角凸帯の上方から大きく外反する。またその上下に櫛描の波状文が施されている。青灰色を呈し、焼成は良好である。328は高杯の脚部である。端部近くに小さな三角凸帯を巡らせ、その上に4ヶ所の長方形透かしを設けるものと想定される。暗灰色を呈し、胎土には黒色砂粒を多量に含む。

S K 11 (第41図) F-1区で検出した。平面は不整調丸長方形で、東西方向に長軸をとる。床面はほぼ平坦である。長辺約2.7m、短辺約1.7m、深さ約18cm。S K 28に切られる。

出土遺物（第42図329～342） 出土遺物は土師器、須恵器を中心とし、少量の弥生土器を含んでいる。

弥生土器（329） 脊部中央で屈曲する小形の鉢である。内外面とも指ナデ調整で、器表面の凹凸が著しい。褐色を呈し焼成は良好である。

土師器（330～337） 330は口縁部がほぼ垂直に立ち上がる概である。口縁部は横ナデ、脇部内面は横方向のヘラ削り、外面は縱方向の刷毛目により仕上げる。茶褐色を呈し、焼成は良好である。331・332は口縁部が「く」の字状に外反する厚手の壺である。ともに肩の張りは小さく、口縁部は横ナデ、脇部内面はヘラ削りによって仕上げている。また砂粒を多く含み、灰褐色を呈する。333・334は碗である。333の口縁部はほぼ直立し、端部がわずかに外反する。磨滅が著しく調整は不明。334は小形で、口縁部はほぼ直立し、体部との境にはゆるい屈曲部をもつ。口縁部は横ナデ、体部以下はヘラ削りを施す。暗褐色を呈する。335は小形の鉢である。ほぼ直立する脇部とわずかに外反する短い口縁部をもつ。内面は口縁部を横方向の刷毛目、それ以下はヘラ削りにより仕上げる。暗茶褐色を呈する。336は高杯である。口縁部はゆるやかに外反し、体部は丸みをもち、底部との境には明確な段差を設ける。全体的に磨滅が著しく調整は不明。337は反りのない把手で、断面は円形をなす。内面にヘラ削り痕が見られる。

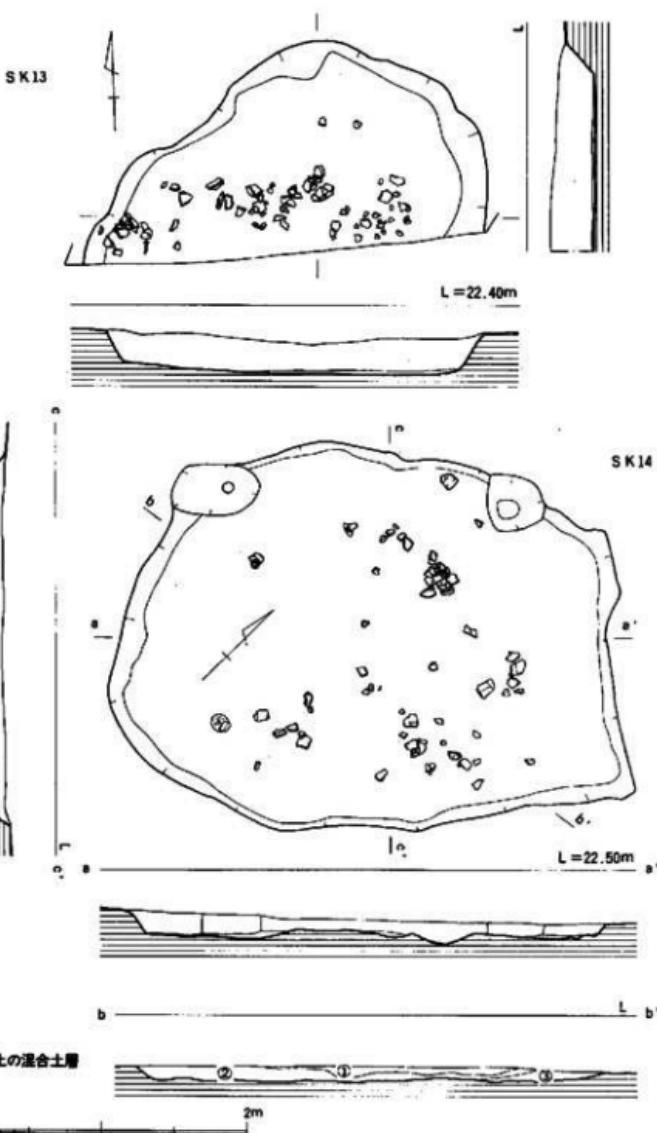
須恵器（338～342） 338は小形の壺である。口縁部は直線的に外傾し、端部内面には段がつく。淡灰色を呈し、焼成はあまり。339～342は杯蓋である。いずれも口縁部は直立、またはそれに近く、天井部との境に明確な稜を形成する。また口縁端部は内側に段をもっておさめている。339は天井部の3/4をヘラ削り、他を横ナデにより仕上げる。明褐色を呈する。340は天井部全体をカキ目、他を横ナデにより仕上げている。暗青灰色を呈し、大粒の白色砂粒を含む。341は天井全体をヘラ削り、他を横ナデ、あるいはナデにより仕上げている。内面は赤茶褐色、外面は灰茶褐色を呈し、胎土には大粒の砂粒を多量に含んでいる。342は暗灰色を呈し、残存部は横ナデにより仕上げる。

S K 12（第41図） F・G-1区で検出した。平面は不整橢円形を呈し、北西-南東方向に長軸をとる。床面はほぼ平坦である。長径約3.4m、短径約2.4m、深さ16cmをはかる。覆土は2層に分けられ、主に上層から遺物が出土している。

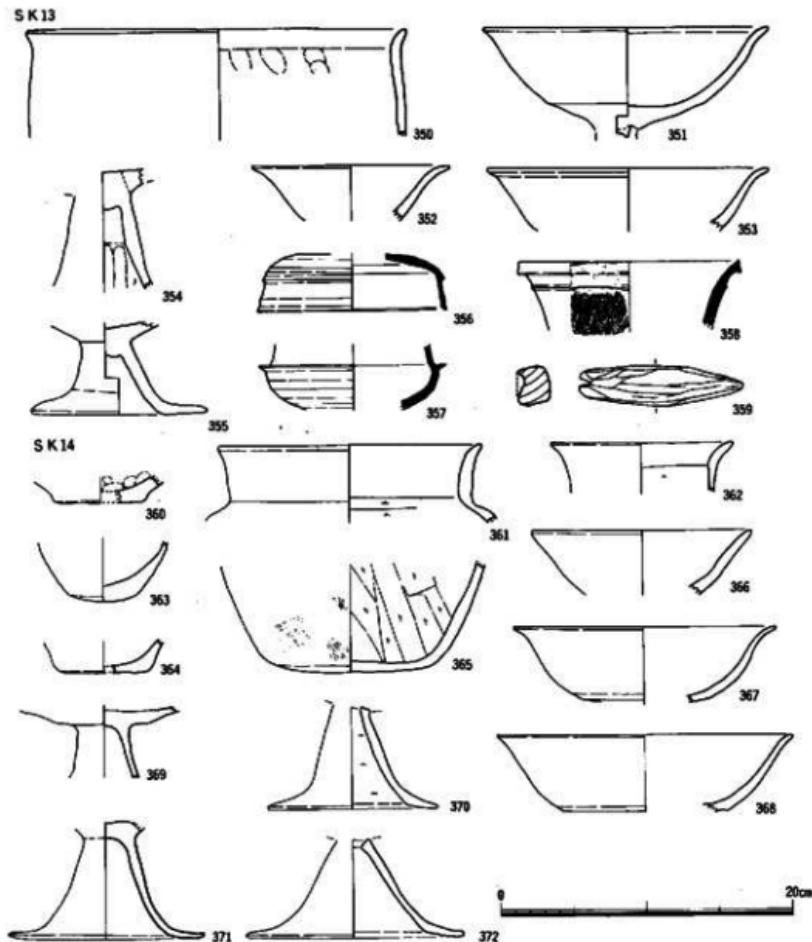
出土遺物（第42図343～349） 土師器、須恵器を中心とし、他に炭化材等も含まれる。

土師器（343～345） 343は壺である。大きく外反する口縁部を有する。口縁部は横ナデ、脇部内面はヘラ削り、外面は刷毛目を施す。淡褐色を呈し、焼成は良好である。胎土には砂粒を多く含む。344は碗である。底部は平底に近く、わずかな稜をもつて脇部へとつながり、口縁部はほぼ垂直に立ち上がる。淡赤褐色を呈し、外面は磨滅が著しい。345は深鉢の底部である。平底で、茶褐色を呈し、外面には煤が付着する。

須恵器（346～349） 346・347は杯蓋である。ともに口縁部はわずかに開き、明確な稜をも



第43図 SK13・14 (1/40)



第44図 SK 13・14出土物 (1/4)

って天井部と区別される。また口縁端部は内面に段をもつ。347の天井部の4/5はヘラ削り、他は横ナデ、あるいはナデによる仕上げである。ともに暗灰色を呈する。348・349は杯であるが、349は底部の端がやや外側に反っており、高杯の可能性がある。ともに立ち上がり部は外湾気味に内傾し、端部は段をもっておさめる。348は全体的に磨滅が著しい。淡灰色を呈し、焼きがあまい。349は受部以下をヘラ削り、他は横ナデにより仕上げている。受部以下は黒灰色、他は暗

青灰色を呈し、焼成は良好。

S K 13 (第43図) F-2区で検出した。調査区の端部にかかり、遺構の一部しか確認できなかった。第3次調査では全体が表面確認されており、それによれば、北西-南東に長軸をとる、約4.5×3.0mの不整規円形の平面プランをなしている(付図)。残存床面はほぼ平坦で、深さ約35cmをはかる。坑内覆土は4層に分かれ、上から①部分的に広がる灰色土、②炭化物を含む厚さ25cm前後の茶褐色土、③④層の下床面中央に広がる灰黒色粘質土、④⑤層の辺縁に見られる黒褐色土となる。遺物は主に②層から出土している。

出土遺物(第44図350~359) 土師器を中心とし、他に須恵器、少量の木器を含む。

土師器(350~355) 350は甕あるいは壺である。ほぼ垂直に立つ胴部に、わずかに外反する短い口縁部をもつ。淡褐色を呈し、胎土には砂粒を多く含む。全体的に磨滅が著しい。351~355は高杯である。351・353は大形で、内湾する体部に外反する口縁部をもつ。351は体部下半に段が認められる。352は小形で、ほぼ直線に伸びる体部に外に開く口縁を有するものである。いずれも淡褐色~淡赤褐色を呈し、磨滅が著しい。354・355は脚部である。354は裾部を欠くもので、内面にはヘラ状工具によるナデ痕が見られる。褐色を呈し、胎土には砂粒を多く含む。355は裾部が内面に明確な稜を形成して外反するものである。明茶褐色を呈し、胎土には大粒の砂粒を多く含む。全体的に磨滅が著しい。

須恵器(356~358) 356は杯蓋である。口縁部はわずかに外に開き、端部は内側に段を作る。平坦な天井部との間には稜を形成する。天井部の3/4はヘラ削り、他は横ナデにより仕上げる。灰色を呈し焼きはややあまい。口径13.0cm。357は杯である。やや上方へ向く受部を有し、立ち上がり部は内傾する。底部はヘラ削り、他は横ナデによって仕上げる。灰色を呈する。358は甕である。口縁部直下と頸部上方にそれぞれ三角凸帯が巡り、頸部三角凸帯の下方はカキ目の後、櫛描波状文を施している。暗灰色を呈する。

木器(359) 一方を尖頭、他方を平頭に作り中央に欠き込みを有する。中央断面は方形をなす。長さ11.4cm、最大幅2.7cm。

S K 14 (第43図) F-2区で検出した。平面は隅丸方形を呈するが、東北隅のみ明確な角をもつ。北東-南西に長軸をとり、床面はほぼ平坦である。北-西の長辺上は2基のピットに切られる。長辺約3.7m、短辺約2.7m、深さ約20cmをはかる。坑内上層は①多量の炭化物・焼土を含む黒褐色土、②炭化物を含む灰褐色土と黄褐色土の混じり、③炭化物を含んだ暗黄褐色粘質土の3層であるが、③層は部分的にみられるだけである。遺物のほとんどは①層から出土した。

出土遺物(第44図360~372) 土師器を主体とし、わずかに須恵器、弥生土器の小片を含む。

弥生土器(360) 甕の底部である。内面に指頭痕が残る。淡褐色を呈し砂粒を多く含む。

土師器(361~372) 361は壺である。口縁部はほぼ直立し、端部がわずかに外反する。胴部内面はヘラ削り、口縁部は横ナデにて仕上げている。外面は淡褐色、内面は灰褐色を呈し、胎

土には砂粒を多く含む。362は小形の鉢である。ほぼ直立する胸部から口縁部が大きく外反する。胸部内面にはヘラ削りの痕跡が認められる。淡褐色を呈する。363～365は鉢の底部である。363は厚みを有する丸底で、わずかな稜を境に胸部へと移行するものである。淡茶褐色を呈し、磨滅が著しい。364は平底で、外面は暗褐色、内面は茶褐色を呈し、胎土には砂粒を多く含む。365は平底からゆるい稜を形成し、胸部が立ち上がる。内面はヘラ削り、外面は刷毛目を施すが磨滅が著しい。暗灰色を呈し、胎土には砂粒を多く含む。底径10.9cm。366～372は高杯である。366は厚手で、体部がわずかに内湾する。淡褐色を呈し、磨滅が著しい。367・368はともに底部との間に段を有し、そこから内湾する体部をもつ。また口縁部は368がわずかに、367は大きく外反する。ともに茶褐色を呈し、磨滅が著しい。369～372は脚部片である。370～372はいずれも裾広がりで、明瞭に屈曲して広がる。369も同様なものと思われる。369は明茶褐色を呈し、胎土には砂粒を多く含む。370は灰褐色を呈し、内面はヘラ削りを施す。371は外済気味に開くもので、屈曲部分は他のものに比べやるやかである。暗茶褐色を呈し、胎土には砂粒を多く含む。372は裾部が直線気味に特に大きく開くものである。淡茶褐色を呈する。いずれも器表面の磨滅、風化が著しい。

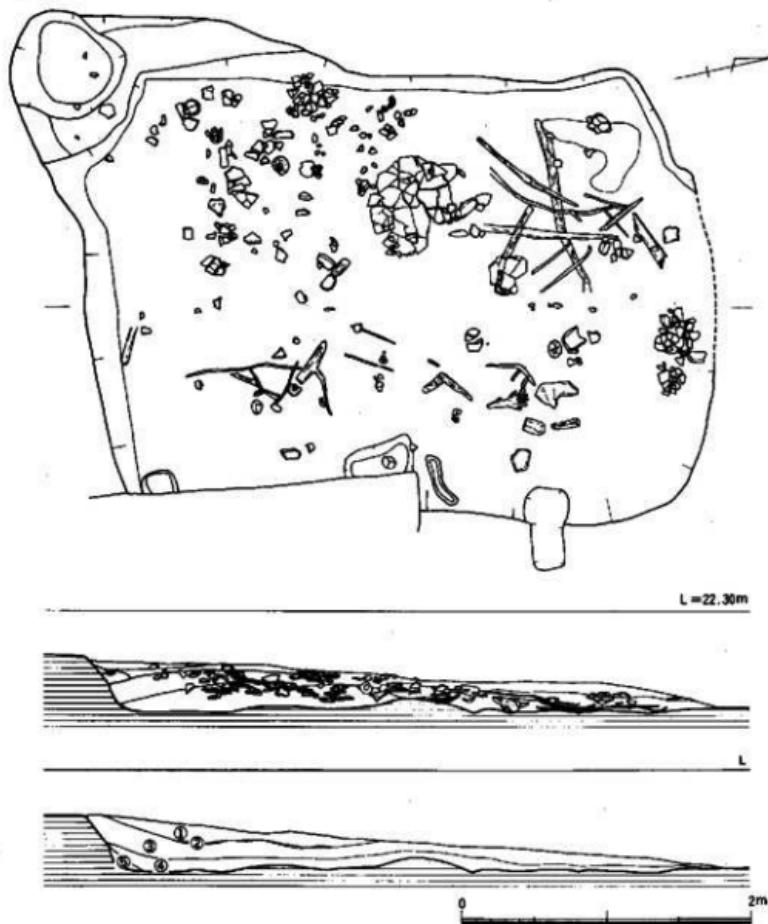
S K15（付図） G-1区、S K16内の西北に浅く掘り込まれた横円形の土坑である。長さ1.06m、幅0.65mで、東側がやや尖り気味になる。深さは4～5cm。覆土は炭化物混じりの灰褐色砂質土。出土遺物はない。

S K16（第45図） G-H-1区で検出した南北に長軸をとる長方形土坑である。北壁から東壁にかけて削平を受け、また東壁南半は擾乱坑により破壊される。現状で南北長4.3m、東西幅3.0m。残存部から復元した平面は、東西幅3.2m、南北長4.5m前後の長方形となり、この遺跡の土坑としてはきわめて端正なプランとなる。ただ西南隅は膨らんで段状をなし、そのコーナーには径0.70～0.75m、深さ25cmのいびつな円形坑が取り付く。深さは残りの良い西壁下で40cm程度、底面は凹凸が著しい。柱穴の類は認められない。坑内覆土は①灰褐色土、②細砂、③灰褐色土、④炭化物を含んだ黒褐色粘質土、⑤地山の崩れた黄褐色土となる。炭化物・焼土を多く含んだ層がここにはない。遺物は③・④に多く含まれ、また底面にまで炭化材、土器類が密着する。

出土遺物（第46～49図） 多量の土師器、須恵器の他、砥石、加工痕のある木片などが出土した。

土師器（373～398） 373～375は甕。373は張りのある胸部から口縁部が直線的に外傾する。胸部外面は刷毛目を横ナデで消す。口縁部内面には刷毛目が残る。374は球形状の胸部から口縁部が外傾するもので、端部は肥厚し丸みをもつ。全体に磨滅気味であるが、胸部には刷毛目痕、煤の付着がある。胎土には多量の砂粒を混え、暗赤褐色を呈する。375は大形甕の口縁部を欠くもの。底部は丸みをもちながらも平底をなす。胸部外面は細かい刷毛目、内面もヘラ削り

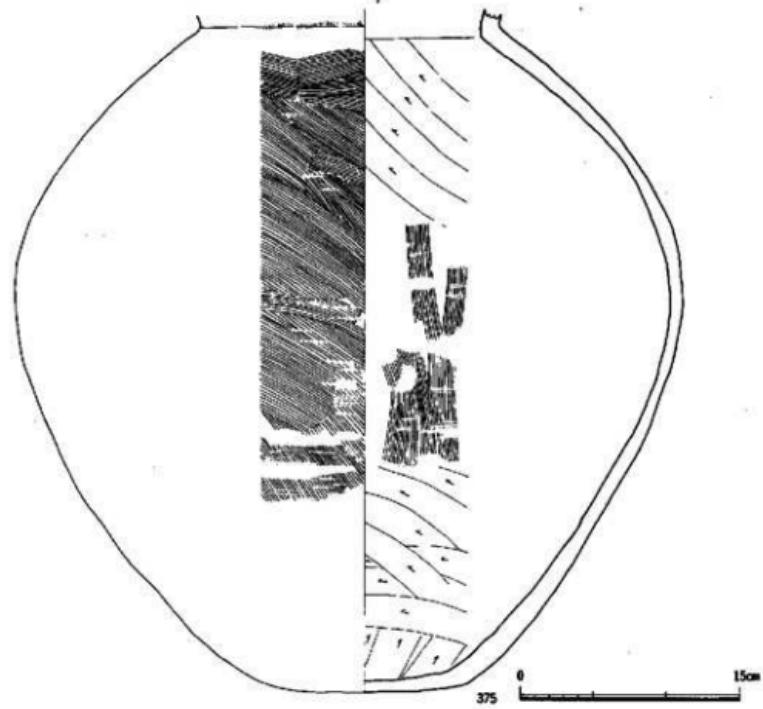
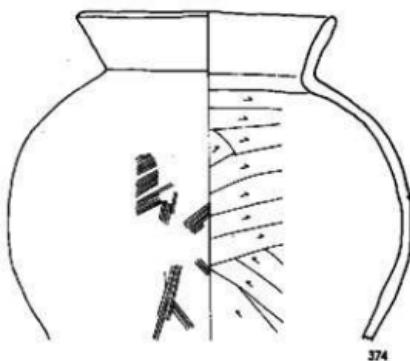
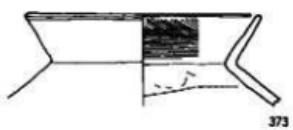
SK16



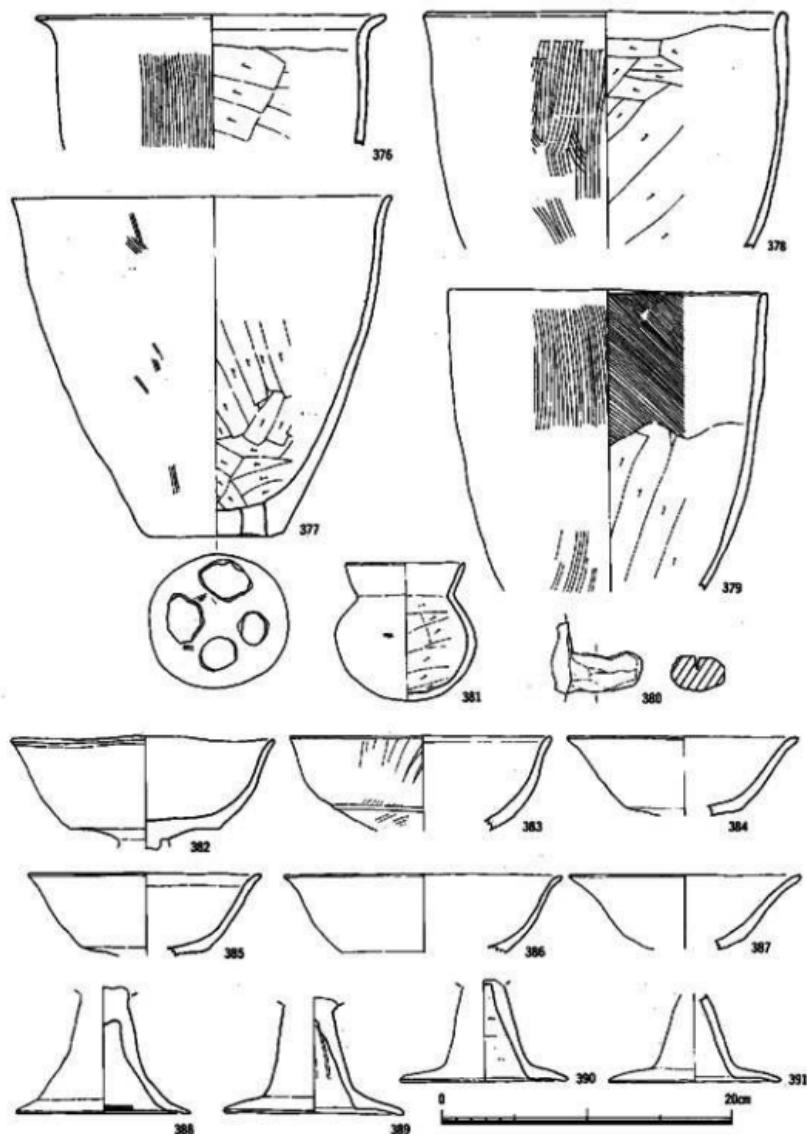
第45図 SK16 (1/40)

の後同じ調整を行う。

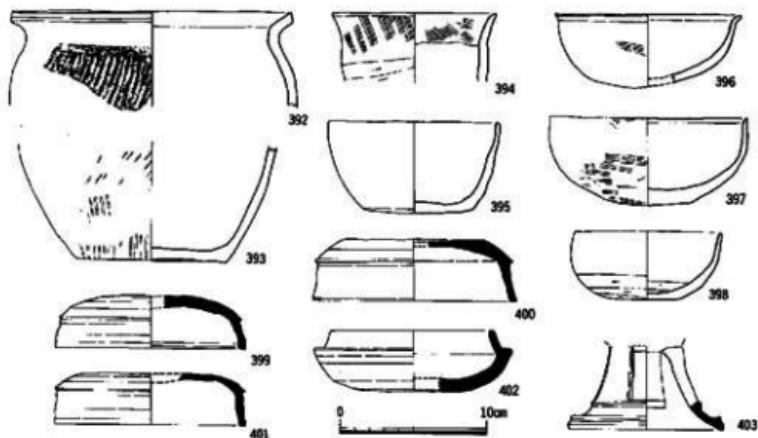
376～379は瓶。胸部は張りがなく、口縁部は376が大きく外反、377・378がゆるく外反、379は直立する。377は平底で、4個の橢円形蒸気孔をあける。いずれも外面は刷毛目、あるいはそれをナデ消している。内面は376・378が口縁直下までヘラ削り、377が上半を横ナデ、379がや



第46図 SK16出土遺物1 (1/4)



第47図 SK 15出土遺物 2 (1/4)



第48図 S K16出土遺物3 (1/4)

はり上半を刷毛目調整で仕上げている。胎土には砂粒が多く混じる。376は小片で確認できないが、他のものには把手は付かない。380は把手。反りの少ない舌状をなし、上面にはヘラによる切込みが入る。瓶あるいは鍋に伴うものであろう。

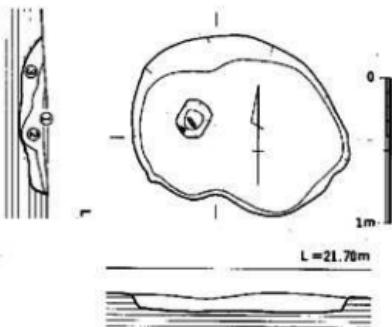
381は小形丸底壺。球形の胴部から口縁部が外傾し、端部は尖り気味におさめる。表面は磨滅。胎土・色調は374の壺によく似る。

382～391は高杯。382～387の杯部片はいずれも深い体部をもち、口縁部はわずかに外に引き出す。底部との境には段を作るが、387にはそれがない。382は横ナデ、383は刷毛目の後横ナデで仕上げる。他のものは器表が磨滅する。388～391は脚部片。388は筒部と裾部が不明瞭なまま開く。他は明瞭で、裾部は上反りになる。杯部との接合は388・389が挿入式、390はリング状式である。調整は磨滅して不明。

392～395は鉢。392は深鉢で口縁部は大きく外反し、端部が中くぼみの面を作る。胴部外面は平行タタキ、他は内面も含め横ナデ調整で仕上げる。内外面とも煤を帯びる。393は392のような鉢の底部。平底で、胴部外面には平行タタキが残る。やはり内外面とも煤が付着する。394は口縁部がゆるく外傾し、端部は外側に膨らみをもつ。口縁部は内外面とも刷毛目、胴部外面下半はヘラ削り、内面は横ナ



第49図 S K16出土遺物4 (1/2)



第50図 SK 17 (1/40)

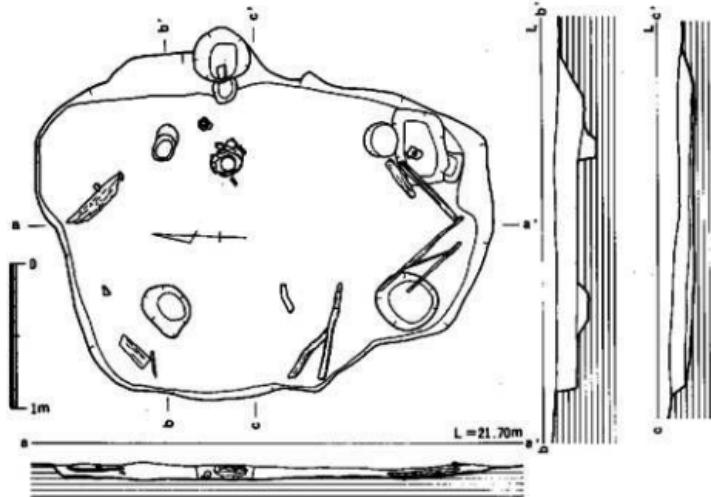
で仕上げる。395は平底鉢で、口縁部は直立する。内外面とも横ナブ調整。また煤が付着する。胎土には砂粒が多い。

396～398は丸底の椀。396は口縁端部を外に引き出す。397・398の口縁部は直立気味である。398の底部はわずかに上げ底となる。396・397の外面は刷毛目、398の脚部下半はヘラ削りを行う。397は内外面とも煤が覆う。

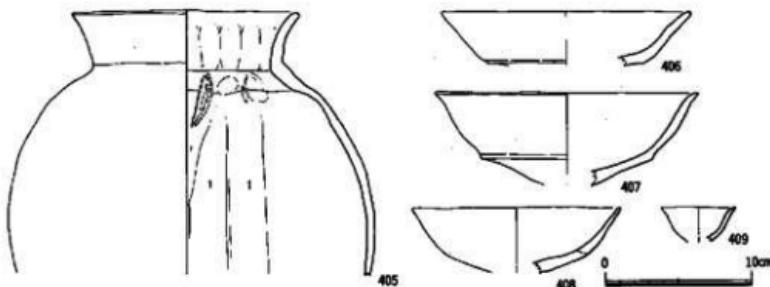
須恵器 (399～403) 399～401は蓋。天井部は平坦に近く、稜を境にして口縁部がわずかに外に開く。端部は平坦あるいは中

くぼみとなる。401は口縁部の開きも少なく、天井部も平坦で箱型に近い。402は杯。立ち上がり部は内傾し、端部は丸みを帯びた平坦面を作る。受け部は上方に短く延び、体部は丸みが少ない。403は高杯脚部片。四方に長方形の透かしを設ける。透かしの下と脚端上部に凸帯が一条ずつ巡り、脚端は丸くおさめる。

石器 (404) 一端を丸く作るがほぼ長方体をなす砥石である。長辺の4面を使用しており、溝状にすり減る部分もある。砂岩製。



第51図 SK 18 (1/40)



第52図 SK 18出土遺物 (1/4)

S K 17 (第50図) H - 1 区で検出した東西に主軸をとる精円形土坑である。長さ1.50m、幅1.15m、深さ15cm。南壁中央がやや中に入り込む。底面はほぼ平坦である。坑内土層は①灰褐色土、②炭化物・焼土を多く含んだ黒褐色土、③灰褐色土に地山の黄褐色土混じりの3層で、②と③の間には薄く炭化物層が入る。底面西寄りの柱根をもつ柱穴はこの遺構を切るS B07のものである。また南側でSK 18と接するが、先後関係は不明。高杯、壺などの土師器片だけが出土したが、細片が多く特に図示するものはない。

S K 18 (第51図) H - 1 区、SK 17の南側に接して検出した。南北長3.16m、東西幅2.40mをはかる不整長方形のプランをもつ。覆土は茶褐色土1層のみで、深さは10cm前後と浅い。底面の四隅のやや内側に各々柱穴が1個ずつあり、また東側壁中央北寄りには径40cm、深さ20cmのピットがある。4柱穴からすれば覆屋的なものがあったものと想定される。このような施設をもつものは今回調査した土坑のなかではこれが唯一である。床面の側壁寄りには丸木や板材が散乱しており、中央東寄りには壺が倒立した状態で出土した。S B07に切られている。

出土遺物 (第52図) 土師器壺・高杯、須恵器蓋などがある。高杯は11個ほどあるが、図示できたのは3点である。405は壺。球形の胸部から口縁部が長めに外反する。胸部内面は縦の荒いヘラ削り、他は横ナデ調整で仕上げる。外面には黒斑があり、煤も付着する406～408は高杯杯部片。406・408は体部が浅く、408には底部との境の段もない。407は深いもので、底部の傾きが大きい。409はミニチュアの杯。横ナデ調整で仕上げた薄手のものである。

S K 21 (第53図) J - 1 区で検出した。南端は破壊され、現状で4.15×2.18mと東西に長い平面をもつ土坑である。深さ18cm。底面は西側に向かって高くなる。第3次調査では長さ5.0m、幅4.0mの東南部に張り出しをもつ長方形の上面として確認されている。坑内土層は①茶褐色砂混じり土、②炭化物、③灰色粘質土、④淡灰色砂質土となる。②の炭化物層は土坑のほぼ全域にわたって広がる。遺物の多くは①・②層から出土している。

出土遺物 (第54図) 弥生土器、土師器、陶質土器等が比較的多量に出土した。さらに少量



第53図 S K 21 (1/40)

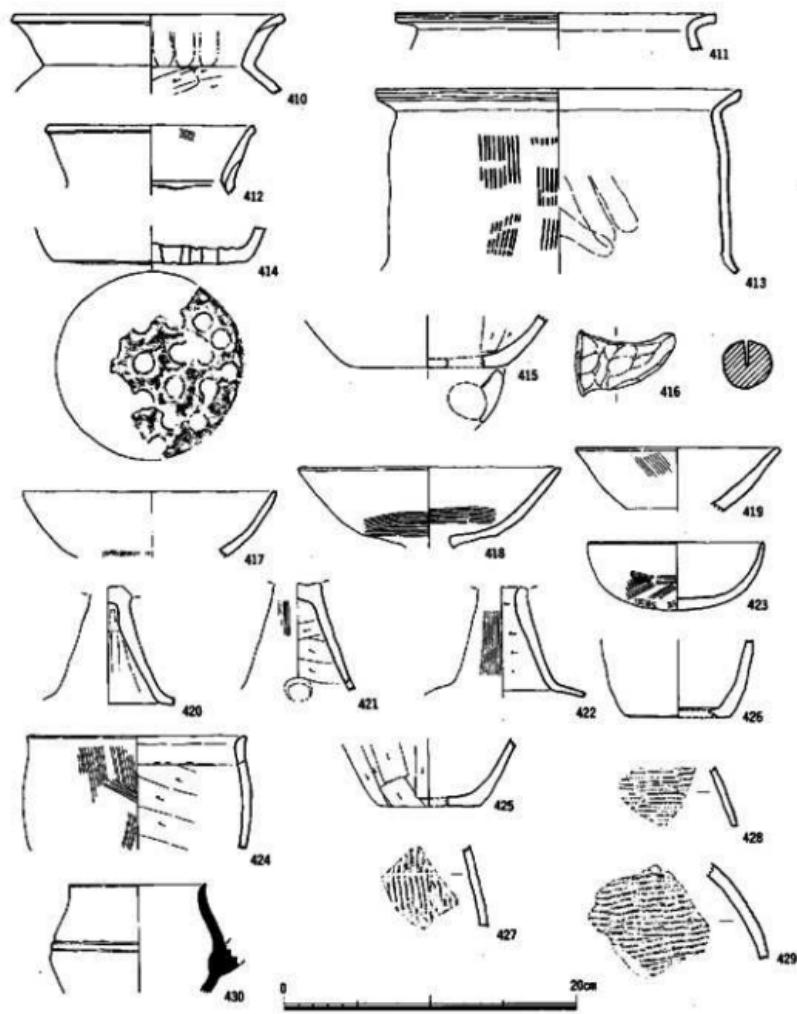
の木片がある。

#### 土師器 (410~429)

410は壺で、肩部からくの字状に外反する口縁部をもつ。口縁部内面には指搾え痕が残る。胎土には砂粒が多く混じり、褐色～暗褐色である。411は壺の口縁部で、強く外反した口縁部は横ナデ調整を行い、端部には沈線を巡らす。胎土には比較的小量の砂粒が混じり、焼成はややあまく、淡褐色～淡赤褐色を呈する。復元口径22.2cmをはかる。朝鮮半島にその起源をなすと思われる土器と類似性が高い土器である。

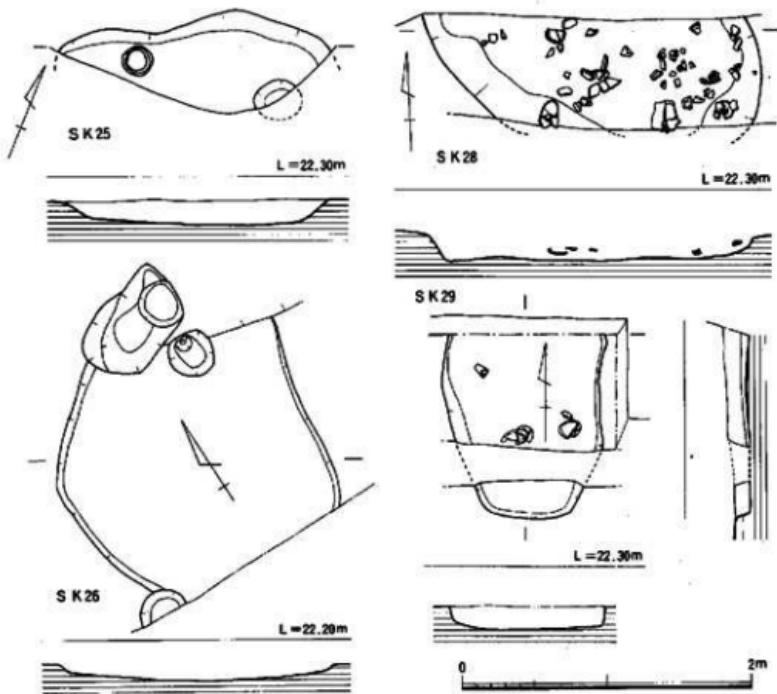
412は壺である。口縁部はまっすぐに外反し、端部は小さく外につまみ出す。内面には斜刷毛目の後ナデ消しを施す。胎土には砂粒が比較的多く混じり、暗褐色である。外面には煤の付着が見られる。

413~415は壺である。413の胴部はわずかに膨らみ、強く外反する短い口縁部をもつ。胴部には把手との接合を示す痕跡がある。外面調整は口縁部に横ナデ、胴部には縦・斜方向の平行タタキ、さらに部分的にナデ消しを行う。胴部内面には指搾え痕が残る。焼成や軟質。胎土には砂粒が比較的少ない。外面には煤の付着があり、淡赤褐色～褐色あるいは灰褐色を呈する。復元口径24.8cm。414~415は平底を呈し、蒸気孔をもつ底部破片である。414には径約1.4cm



第54図 SK 21出土遺物 (1/4)

の円形の孔がみられ、部分的に欠損する孔を加えると17個が残存する。器面調整はナデ。胎土に砂粒は多く混じる。復元底部径13.0cmをはかる。415は1個の蒸気孔しか残存がしないが、孔



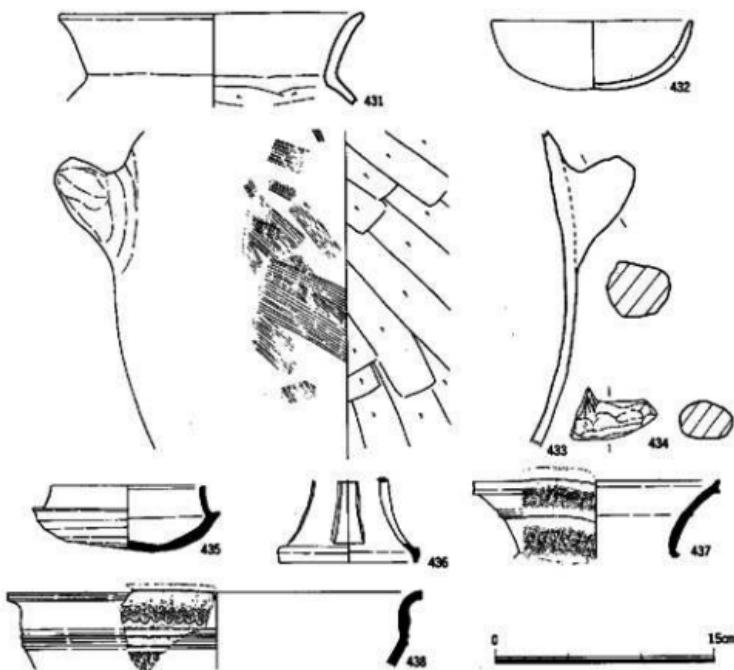
第55図 SK 25・26・28・29 (1/40)

そのものは414のものより大きく、それだけ数も少ないものである。内面にはヘラ削りを施す。胎土には砂粒が比較的少ない。復元底部径は10.6cmである。

416は把手で、上面にはヘラ工具による切込みがある。胎土には多量の砂粒が混じる。長さ6.85cm。径2.25~3.5cm。

417~422は高杯。417~419は杯部片である。417は段をもたず、内湾ぎみに口縁端部に至る器形をなす。体部外面にはわずかに絨刷毛目の調整痕がみられる。胎土には比較的少量の砂粒が混じる。418は下位部に段をもち、脚部とはソケット状に接合する。胎土には砂粒が多く混じる。復元口径17.8cm。419は下位部に明瞭な段を設け、わずかに内湾しながらゆるやかに外へ開く口縁部をもつ。外面には斜刷毛目の調整痕がある。胎土には比較的少量の砂粒が混じり、外面には部分的に煤の付着がある。420~422は脚部片で、ハの字状に大きく開く器形と思われる。420は内面に指紋りを施す。421には穿孔があり、内面調整にヘラ削りを行う。422の裾部は折れて外反する。ソケット部はリング状を呈し、杯部と接合する。

423は椀で、焼成やや軟質で、胎土には砂粒が多く混じる。外底部には黒斑がある。復元口径



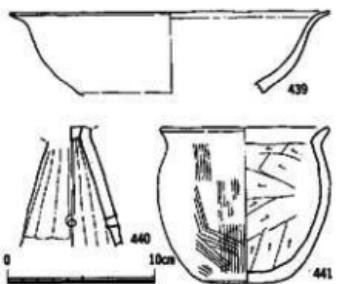
第56図 SK 28出土遺物 (1/4)

11.9cm。器高4.7cm。

424～426は鉢である。424は口縁部～胴部片で、ゆるやかな膨らみのある胴部から小さく外反する口縁部をもつ。胎土には砂粒が多く、軟質ぎみで、暗褐色を呈する。外面には煤が付着し、内面は二次的な焼成のためもろく、黒褐色である。425・426は底部片で、平底となる。425は外面にヘラ削りを施し、煤の付着もみられる。胎土には砂粒が多く混じり、焼成はやや軟質気味である。426の内外面には煤の付着がある。胎土には砂粒が比較的少ない。

427～429は外面に平行タタキを施す壺の胴部片である。427では縱方向のタタキとヘラによる横方向の沈線を施す。428・429では横方向のタタキである。内面は全てナデ調整を行う。いわゆる赤焼土器と称される一群である。

陶質土器 (430) 把手付鉢である。膨らんだ胴部とゆるやかに外反する短い口縁部をもち、胴部には2条の凹線を施す。この凹線下に断面が梢円形状となる把手を付ける。鉢部との接合



第57図 SK 29出土遺物 (1/4)

痕が1ヶ所しかないところからすると、上方に反る牛角状の把手と考えられる。把手を除く全面には丁寧な横ナデ調整を施す。胎土は緻密で、軟質である。色調は青灰色。口径9.2cm。

S K 22 (付図) K-1区で検出した土坑である。長径0.8m、短径0.7mの南北にやや長い橢円形の平面で、深さは15cm。底面東寄りに深さ5cmの円形掘り込みがある。土師器の細片が少量出土したが、図化できるものはない。

S K 25 (第55図) G-2区南端で検出したも

のであるが、大半が調査区外にかかり北壁の一部約2mだけを確認したにとどまる。深さ16cm。底面は平坦である。第3次調査では東西3.7m、南北2.0mの橢円形として全体が確認されている。覆土からは土師器甕が4片出土したが実測に耐えない。

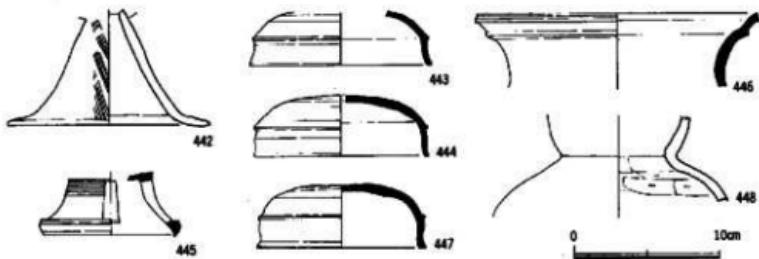
S K 26 (図55図) H-2区で検出した。北側がピットおよび段落ちに切られ、南側は調査区外となるため東西両壁の一部を確認したにとどまる。西側壁は屈曲する。南端近くで幅1.7m、深さ10cm。第3次調査では南北長5.3m、東西幅2.5m前後の遺構として確認されているが、形がいびつであるところからすれば、2つの遺構の重複の可能性もある。土師器の細片が少量出土したが、図化できるものはない。

S K 28 (第55図) F-1区拡張部で検出した。南側を水抜き溝で切られ、北側は調査区外に延びる。第3次調査では全体が表面確認されており、それによれば西北-南東に長軸をもつ長さ2.4m、幅1.4mの橢円形プランとなる。検出部床面はほぼ平坦で、深さ約20cmをはかる。S K 11の北側を切っている。

出土遺物 (第56図) 出土遺物には土師器と須恵器がある。

土師器 (431~434) 431は甕である。大きく外反する口縁部と張りの小さな胸部をもつ。胸部内面はヘラ削り、口縁部は横ナデによって仕上げている。淡褐色を呈し、胎土には砂粒を多く含む。432は椀である。丸底の底部から稜をもたずして口縁部へと続く。明茶褐色を呈し、磨滅が著しい。433は瓶である。中膨らみの胸部に一对の短く上反する把手をもつ。内面をヘラ削り、外面を刷毛目により仕上げている。灰褐色を呈する。434は把手である。淡褐色を呈し、胎土には砂粒を多く含む。

須恵器 (435~438) 435は杯である。立ち上がり部は外溝気味に延び、端部はわずかな段をもっておさめている。体部は明確な稜を形成しながら底部へつながる。底部はつぶれて変形している。受部以下はヘラ削り、他は横ナデ、ナデにより仕上げている。暗青灰色を呈する。436は高杯脚部片である。端部は逆くの字形に直立しておさめる。透かしは長方形で4ヶ所に配



第58図 その他の土坑出土遺物 (1/4)

する。暗灰色を呈する。裾部径9.4cm。437は壺である。口縁部は大きく外反し、端部と頸部に各々1条の凸帯が巡り、その間に波状文を施す。暗灰色を呈する。438は高杯形器台である。ほぼ直立する口縁の端部を短く外反させている。口縁直下に1条、頸部下に2条の凸帯が巡り、波状文が施されている。暗灰色を呈する。

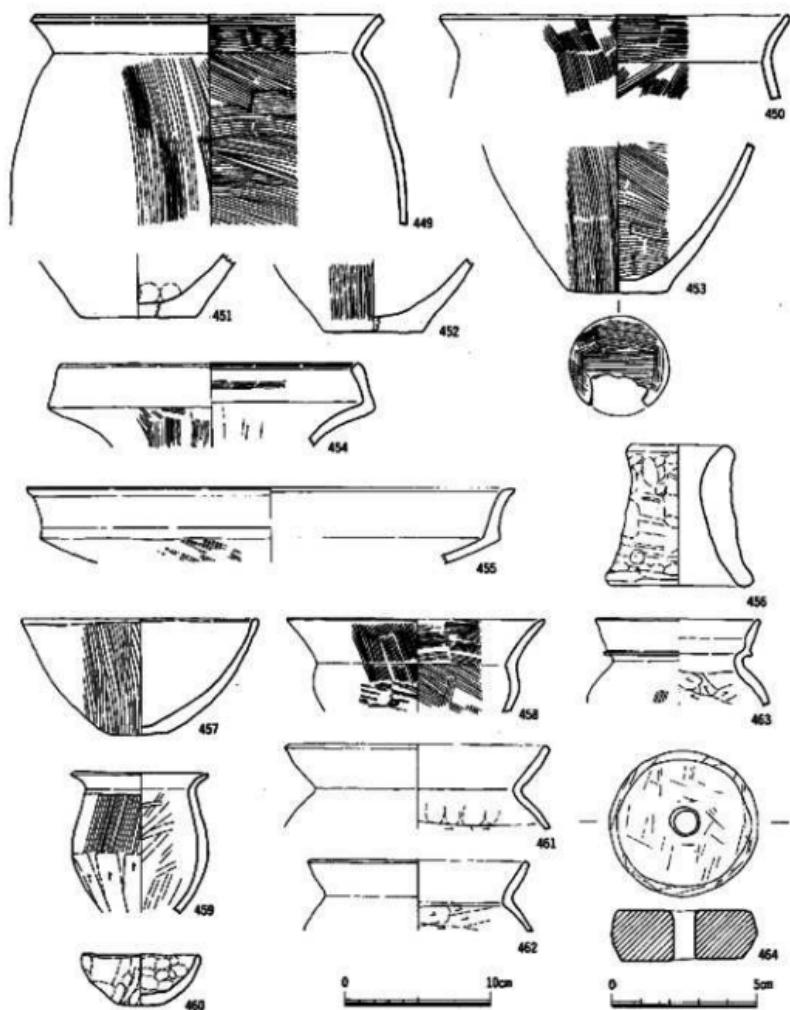
S K 29 (第55図) F-1区、S K05の西隣で検出した土坑である。北側が調査区外にかかり全貌は判明しない。しかし第3次調査で全体が確認されており、これを合わせれば南北に長軸をとる長さ1.3m、幅0.55mの橢円形プランと想定される。深さ8cmで、底面は平坦である。覆土は炭化粒を含んだ暗灰色粘質土1層である。

出土遺物(第57図) 土師器、須恵器が少量出土したほか、粘土塊が11個出土している。439・440は高杯。439の杯部は深く、口縁部は外に引き出す。440の脚部には円形孔を2ヶ所設けている。441は鉢。平底で、張りの少ない脚部から口縁部がくの字状に外反する。外面は刷毛目調整、内面はヘラ削りを行う。

他の土坑(付図) 「調査の概要」の章でも述べ、この土坑の遺構説明のなかでも再三ふれたように、F区～L区に至る部分は第3次調査で遺構確認が行われていた。今回の調査で、F・G区のほとんど遺構はそのまま再確認。調査することができたが、それ以東は削平が著しく、遺構らしきものはその一部を確認したにとどまった。そこで、付図に第3次調査の際の遺構確認図を載せ、土坑としてS K31～54までの番号を付けた。これはあくまでも表面確認にしかすぎず、複数遺構の切り合いや、井戸のような別遺構がある可能性もある。これらの土坑は形態・大きさもまちまちで、その一部からは少量ながら遺物が採集されている。

出土遺物(第58図) ここでは第3次調査で採集された土坑出土遺物について観察する。

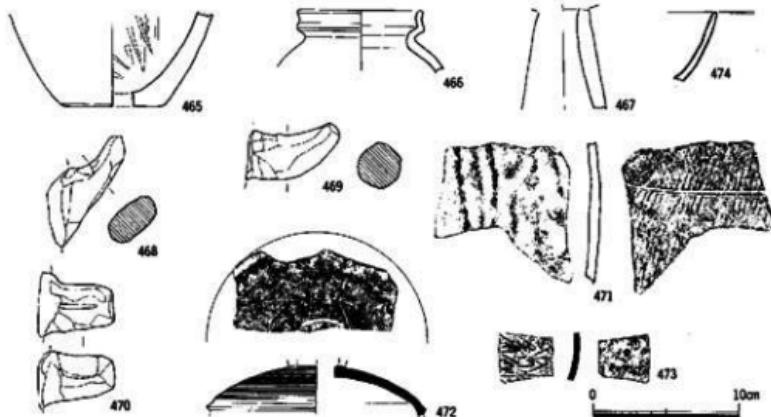
442～446はS K05・S K06の上面で採集されたものである。442は土師器高杯脚部。筒部は大きく開き、裾部は横に延びる。443～444は須恵器蓋。天井部はやや丸みをもち、口縁部は443が反り気味に開き、444がほぼ直立する。445は須恵器高杯脚部片。短脚で四方に長方形透かしをあける。脚端部は尖り気味におさめる。446は須恵器壺。口縁部は大きく開き、端部直下とその



第59図 SD01出土遺物 (1/2, 1/4)

下の肩曲部に凸帯を巡らす。

447はSK12の上面から出土した須恵器蓋。天井部はわずかに丸みをもち、口縁部は直立し端



第60図 ピット・表土出土遺物 (1/4)

部は外に肥厚する。

448はSK35から出土した土師器壺。球形の胴部から口縁部が内湾気味に立ち上がる。厚手の作りである。

#### 4) 溝

SD01 (付図) A-2からD-2区にかけてほぼ一直線に東南方向に走り、調査区外に抜ける溝である。西端部分は段落ちの手前でゆるやかに上がっており、東南に進むに従い深くなっている。B-2区で溝幅約2m、深さ24cm、C-2区で深さ44cmをはかる。土層はSK01に示した通りである。東南部分でSK01、SB03に切られている。上面から土師器が出土しているが、溝そのものは弥生時代後期である。

出土遺物 (第59図) 449～460は弥生土器。449～453は壺。くの字状に外反する口縁部とわずかに膨らむ胴部をもつ。口縁端部は449が中くぼみの面をなすのに対し、450は丸くおさめる。底部は平底。器面調整は内外面とも刷毛目を用いるものが多い。453は底面にまでそれがおよんでいる。454は複合口縁壺。口縁端部は中くぼみとなる。455は高杯。口縁部は短く外傾し、端部を外に引き出す。456は器台。手捏ねの厚い作りで、器高も低い。457は鉢。平底の底部から胴部が外傾して立ち上がり、端部は丸くおさめる。外面は刷毛目、内面は横ナデ調整。458は広口の鉢、内外面とも刷毛目調整で仕上げる。459は小形壺とでも呼べるものか。口縁部はくの字状に外反し、胴部はやや下膨らみになる。胴外面下半はヘラ削り、上半は刷毛目、内面はヘラナデで仕上げる。460は手捏ねの杯。底部はわずかに平底をなす。

461～463は上面から出土した土師器。461・462は甕で、口縁部はくの字状に開く。463は山陰系の複合口縁甕。口縁部上半は外傾する。

464は滑石製の紡錘車。表面には研磨痕が残る。上面出土。

S D02（付図） 第3次調査で確認された溝で、L-1区から直線的に東に延びる。第3次調査のF区にこれに続く部分が検出されている。

### 5) その他の出土遺物（第60図）

ここでは、ピット、表土層から出土した遺物のうち、実測可能なものだけについて述べる。各々の出土遺構については本文末の観察表に依られたい。

弥生土器（465） 甕の底部片。平底で、器壁が厚い。内面にはヘラによる擦痕がある。

土師器（466～471） 466は山陰系の複合口縁甕。口縁部上位は内反りに立ち上がる。467は高杯。体部とはリング式の接合をするもので、筒部の開きは小さい。468～470は概頬の把手。470は短く横に延びるもので、上面にヘラによる切込みをもうける。471は頬であろうか。外面に縦方向の平行タタキを施し、1条の凹線を巡らす。内面はヘラナデで仕上げる。焼きあまく、灰色を呈する。朝鮮半島系の土器であろうか。

須恵器（472・473） 472は蓋。天井部全体にカキ目を施し、その上位に櫛描波状文を入れる。縹は小さく、口縁部は直立するようである。つまみは方形状透かしのあるもの。蓋とすれば陶質土器の可能性もあるが、高杯の可能性もないではない。473は内面に鳥足状タタキをもつ甕？。SK08の308とは逆になる。胎土は精良、焼きも良い。

青磁（474） 龍泉窯系碗の口縁部片である。緑色を発し、その外面には貫入がはいる。

## 5 おわりに

先の章で第5次調査の内容について述べたが、吉武遺跡群約47万m<sup>2</sup>のうちのわずか1,800m<sup>2</sup>の調査にしか過ぎず、また道路建設地内の発掘ということもあって遺跡群の一端に幅広のトレンチを入れた感がないでもない。また調査区内でも東側部分が大きく破壊されており、第3次調査の際の表面調査をもとに遺構の復元を計ったが、その相互関係ははっきりとつかめないままであった。くわえて10万m<sup>2</sup>以上の調査面積と多種多様な遺構・遺物を検出した面倒な整備に伴う調査の整理・報告が十分に進んでいないため、吉武遺跡群そのものの意義付けを行うことは時期早急と云わざるを得ない。したがってここでは第5次調査の簡単なまとめと、若干の問題点について触れたい。

遺構の性格と時期 今回の調査で検出した遺構は第3次調査で表面確認されたものを除き、掘立柱建物7棟、井戸5基、土坑23基、溝2条である。第3次調査の際には、この他に調査区東側

を中心に掘立柱建物4棟、上坑状遺構24基が表面確認されているが、再三述べてきたように、それらは破壊され、遺物も含めほとんど残存するものがない。

まずこれらの遺構の時期についてみていく。遺構間では次の切り合い関係が認められる。(古) S D01→S K01→S B03(新)、(古) S E27→S K04(新)、(古) S K06→S E30(新)、(古) S K06→S K07→S K05(新)、(古) S K16→S K15(新)、(古) S K17→S B07(新)、(古) S K18→S B07(新)。これに出土遺物を考えあわせると、おおまかにではあるが①S D01→②S K01→③S K01以外の土坑・井戸→④掘立柱建物といった構築年代順を追うことができる。

このうち①のS D01は溝底から弥生後期中頃の土器が出土しており、掘削の時期をこれ以前に求められよう。S D01上面覆土には古式土師器が認められ、さらにその上に②のS K01が構築されている。

そのS K01は出土土器に須恵器を全く含まず、土師器の型式としても他の土坑、井戸に比べ先行している。ただ遺構の項でも述べたように、複数遺構の重複した可能性があり、遺物にも時期幅があることが認められる。

③の土坑・井戸はそれぞれの間で切り合い関係をもつものも多い。このうちS K21は陶質土器やいわゆる赤燒土器を含むものの須恵器はみられず、土師器からしても他の土坑・井戸に先行するものであろう。他ではS K06やS K09のように出土遺物に須恵器を混じえないものもあるが、土師器からみるとそれが出土してもおかしくない時期と考えられる。またS K05出土の須恵器はT K73からT K208併行の段階までのものを含んでいるが、S K06に後出するものである。出土土師器、須恵器からすればS K06・10・12・13・16・28などが古い様相を示し、S E20、S K04・05・11・14・18などが新しい様相を示す。しかしこの両者の時期的な隔たりはきわめて小さいものと考えられる。

④の掘立柱建物からの出土遺物はきわめて少なく、時期は決し難いが、土坑にさほど遅れるものではない。第3次調査で検出された掘立柱建物は5世紀に遡るものとされ、本調査のものもこれと同じと考えられる。

以上の遺構のうち②、③を糸島平野の御床松原遺跡の当該期の編年<sup>11</sup>に照らし合わせると、②はIV期を前後する時期、③のS K21はV期、他はVIa期を前後する時期に相当するものと考えられる。ただ吉武遺跡群ではこれまでの調査で、当該期の良好な資料が多数検出されており、厳密な編年、年代決定はそれらの発表を待つ必要があろう。

次に主だった遺構についてまとめてみる。掘立柱建物はS B03・07を除けば、2×2間の総柱の倉庫、あるいは1×2間の小規模な建物が多いのが特徴的である。建物方位は北から西に振れるものが多い。調査区東側の北壁側にみられる段落ちは東北方向に延びる溝(旧河川か)と考えられ、第2次調査地点の建物の配置を考え合わせると、掘立柱建物はこれに平行するように建てられた可能性もある。吉武遺跡群では弥生時代から掘立柱建物が構築されており、古

墳時代中期以降にはそれが大勢を占めるようである。規模的には $2 \times 2$ 間、 $2 \times 3$ 間が多く、また縦柱のものが大半を占める。古墳時代の掘立柱建物と竪穴住居跡の関係をこれまでの調査でみると、第2・3次調査では約70棟の古墳時代の掘立柱建物に対し、竪穴住居跡は1基、第4・5次調査では100棟を越す掘立柱建物に対し、竪穴住居跡は20基程度にしか過ぎない。ただ8次調査では30基以上の竪穴住居跡が集中して検出されている。これら掘立柱建物と竪穴住居跡については、その報告を待つて時期・性格などの詳細な検討を加える必要がある。ただ当該期の集落である糸島平野の御床松原遺跡、福岡平野の松木遺跡<sup>2)</sup>では掘立柱建物がなく、吉武遺跡群とは集落としての質の違いを認めてもよいであろう。

井戸はいずれも素掘りで、最も深いS E 20でも1m程度である。断面形は底細りの筒形が多いが、S E 19・30は段状の掘り込みを側壁に取り付けており、井戸本体も浅い。井戸内からの出土遺物は少なく、特に祭祀に用いられたような遺物もない。吉武遺跡群での井戸の検出例は、掘立柱建物・竪穴住居跡の数に比べきわめて少ない。遺跡群内には旧河川が幾条も確認されており、生活に必要な水の多くはこれに寄ったためと想定される。

土坑は一部を除き覆土に炭化物、焼土などを多量に含んだ層をもつのが特徴的である。その平面形態は多様で、整った形をするものは少ない。また全体に浅い。出土遺物は豊富で、特にS K01・05・16など点数が多い。単なる廐棄物処理坑なのか、それとも祭祀土坑なのかの判断はつかない。S K05では多量の土師器、この時期にしてはきわめて多い点数の須恵器の他、平鉢・楕などの木製品、ガラス玉、子持勾玉、植物遺体、動物遺体などが出土しており、廐棄物処理坑と一概に云いがたいところもある。この種の土坑は吉武遺跡群の各所でこれまで認められており、その数は300基を越す。第3次調査では「断面形が皿状をなし、不整形で埋土内部に焼土・木灰の堆積の多い土坑122基」が検出されており、初期須恵器などの多数の遺物が出土している。状況的には今調査の土坑と変わることろがない。

**出土遺物について** 今回の調査では土坑を中心に土師器・須恵器をはじめとした多量の遺物を検出した。これらの遺物は須恵器出現前後の時期の良好な資料になるものと考えられるが、ここでは注意をひいた遺物2、3について触れるにとどめたい。

須恵器ではT K73からT K208併行段階のものが出土している。胎土分析を経ておらず、また他遺跡出土の当該期の須恵器との検討を行っていないため確実なことは云えないが、その特徴からすれば陶邑窯産の他、在地の小限窯産も含まれているようである。また上方にのびる牛角状の把手のつくSK21出土の椀(430)は、陶質土器とみてよいものであろう。焼きはあまりく、青灰色を呈する。他にも陶質土器の可能性があるものが数点ある。SK05の蓋(208)は、天井部に櫛状工具による押し引き状の文様を施し、形態的にも古い様相をもつ。焼成は良好で、器面には自然釉がかかる。天井部の施文は管見の限りでは類例を見ない。第3次調査の際採集された蓋(472)は、つまみに透かしをもつもので、天井部にはカキ目の上に波状文を巡

らしている。同様な例は韓国金海礼安里遺跡36号墳中にあり、古墳そのものは礼安里II c期(5世紀後半前葉)に位置づけられている。<sup>1)</sup> 北部九州では大野城市牛頭周辺で採集されたものがあるが、天井部の施文はない。SK08(309)と表採資料(473)の器面に鳥足状のタタキをもつものも特異である。ともに小片であるが、309は外面に、473は内面にそのタタキだけがある。焼きは須恵器と同じで堅緻、黒色を呈する。この種のタタキをもつものは国内では関西、北部九州にこれまで出土例があり、その集成と朝鮮半島での出土例についての検討も行われている。<sup>2)</sup> 集成からもれているがさきにあげた御床松原遺跡でも小片が出土している。これも含め国内の他の出土例はいずれも平行タタキの上に鳥足状タタキを施しており、また内面に施文するものは認められない。本調査のものとは趣きを異にする。この他SK05の繩文タタキをもつ壺(273)も陶質土器の可能性をもつ。

このように朝鮮半島から将来されたもの、影響のもとに作られたものは須恵器・陶質土器にとどまらない。SE20から出土した椀(005)は土師器の形態をとりながら、内外面とも研磨され黒色にいぶされている。最近近畿地方で、器形は異なるものの、黒色研磨土器として報告されている類のものであろうか。現物には当たっていないが福岡県内でも池の上遺跡、松木遺跡の報告にやはり黒色にいぶされたのではないかと考えられるものがある。また近畿地方を中心に韓式系土器などの名称でよび慣らされている土器も、本報告では土師器の項のなかで扱ったが、多数出土している。平底鉢、甌、格子目や平行タタキをもつ壺などがそれにあたる。ただ繩文タタキをもつものは認められない。このなかで中心をなす平底鉢には、タタキ目をもつものはほとんどなく、刷毛目、ナデ調整が主となっている。また平底鉢のほとんどが器壁が剥離するほどの強い2次的な焼成を受け、煤にまみれている。この種の土器は第3次調査でも多く検出されている。

このような朝鮮半島系の土器、初期須恵器は吉武遺跡群の各所に認められ、第3次調査の報告の他、第4次調査出土のものについての胎土分析を経た小報もある。第2・4次調査では初期須恵器、陶質土器がまとめて出土しており、そのなかには本調査で細片でしか見いだせなかつたものが、完形に近い形で出土している。報告を待ちたい。

以上今回の調査について簡単なまとめを行ったが、十分な検討にはほど遠い。また胎土分析、樹種同定などの分析を欠いたため、報告としては不十分なものとなった。機会をみてそれらの分析・鑑定を行い、公にしたいと考えている。

- 1) 志摩町教育委員会「御床松原遺跡」志摩町文化財調査報告書第3集 1983
- 2) 那珂川町教育委員会「松木遺跡I」那珂川町文化財調査報告書第11集 1984
- 3) 奈良大学博物館「金海礼安里古墳群I」 1985
- 4) 泉武「須恵器にみる特殊なタタキ」櫻原考古学研究所論集 第九 1988

遺物番号	持出回数	出 土 遺 場	遺物種類	口 径	底(深)径	基 高	調 査	色 調	その他の特徴	登録番号
001	6	15	S E 19	土器・甕	(33.6)	—	口縁内側ナメ、内面ヘラ削り、外輪刃 内ヘラ削り、外輪刃	淡灰褐色		00421
002	8		S E 20	H・甕	(22.9)	—	口縁不規、内面ヘラ削り	淡褐色		00425
003	H		H・瓶	(29.6)	—	口縁内ナメ、底内凹毛	褐色		00424	
004	H		H・口	—	—	内ヘラ削り、外輪削り	淡褐色	把手のみ	00425	
005	H	15	H・甕	12.7	—	ヘラ底	褐色		00427	
006	H	15	H	須恵・杯身	10.9	4.8	内側ヘラ削り、低腰、底	灰色		00428
007	10		S E 24	土器・甕	(16.4)	—	口縁内ナメ、口縁削 ナメ	褐色		00450
008	H		H・盆	(7.9)	—	底内凹毛、口縁削ナメ	淡褐色		00451	
009	H	15	S E 27	H・高杯	—	13.6	横ナメ、ナメ	褐色		00453
010	H		S E 30	H・甕	(18.2)	—	口縁内ナメ、口縁外 削り、底内凹毛	グ		00465
011	H		H・高杯	(18.3)	—	口縁削ナメ、底内凹 削り、底内凹毛	グ		00464	
012	H		須恵・盤	(12.0)	—	内側小傾ナメ	淡褐色		00466	
013	12	15	S K 01	土器・甕	17.0	—	口縁内ナメ、底内凹 削り、底内凹毛	淡褐色		00064
014	H	15	H・B	H	17.9	—	28.1 口縁削ナメ、底内凹 削り、内輪毛	褐色	外縁付着、ヘラ削り洗 削	00010
015	H		H・E	H	(19.2)	—	口縁削ナメ、削内ヘラ 削り	淡褐色		00018
016	H		H	H	15.6	—	口縁削ナメ、削内ヘラ 削り、内輪毛	淡褐色		00012
017	H		H	H	(14.9)	—	口縁削ナメ、削内ヘラ 削り、内輪毛	淡褐色	外縁付着	00091
018	H	15	H	H	16.7	—	口縁削ナメ、削内ヘラ 削り、内輪毛	淡褐色		00013
019	H	15	H・E	H	17.8	—	30.6 口縁削ナメ、削内ヘラ 削り、内輪毛	淡褐色	内側化物付着	00022
020	H	16	H・E	H	17.0	—	24.8 口縁削ナメ、削内ヘラ 削り、内輪毛	淡褐色	外縁付着	00007
021	H	16	H・E	H	16.6	—	口縁削ナメ、削内ヘラ 削り、内輪毛	淡褐色	H	00086
022	13	H	H・C	H	(17.2)	—	口縁削ナメ、削内ヘラ 削り、内輪毛	淡褐色	H	00019
023	H		H	H	(14.6)	—	口縁削ナメ、削内ヘラ 削り、内輪毛	淡褐色		00029
024	H	16	H	H	14.5	—	削り、内輪毛、削内ヘラ 削り、内輪毛	淡赤褐色	外ヘラ削り洗状文、削 削文	00001
025	H	16	H・E	H	(14.2)	—	口縁削ナメ、削内ヘラ 削り、内輪毛	淡褐色	外縁付着	00015
026	H	16	H	H	15.6	—	口縁削ナメ、削内ヘラ 削り、内輪毛	グ	外縁削り洗状文、底内 凹毛	00006
027	H		H・E	H	(16.0)	—	口縁削ナメ、削内ヘラ 削り、内輪毛	淡赤褐色	外縁削付着	00015
028	H	16	H	H	(16.2)	—	口縁削ナメ、削内ヘラ 削り、内輪毛	淡褐色	外縁付着	00006
029	H	16	H	H	16.8	—	口縁削ナメ、削内ヘラ 削り、内輪毛	淡赤褐色	H	00002
030	H		H・D	H	(16.5)	—	口縁削ナメ、削内ヘラ 削り、内輪毛	淡褐色		00008
031	H	16	H・E	H	18.0	—	口縁削ナメ、削内ヘラ 削り、内輪毛	グ	H	00003
032	H	17	H・E	H	15.6	—	口縁削ナメ、削内ヘラ 削り、内輪毛	グ	H	00011
033	14	17	H	H	16.5	—	口縁削ナメ、削内ヘラ 削り、内輪毛	グ	H	00085
034	H	17	H	H	16.1	—	口縁削ナメ、削内ヘラ 削り、内輪毛	淡褐色	H	00009
035	H	17	H・E	H	14.8	—	口縁削ナメ、削内ヘラ 削り、内輪毛	淡赤褐色	外縁突文、保付着	00014
036	H	17	H・E	H	17.7	—	30.3 口縁削ナメ、削内ヘラ 削り、内輪毛	褐色	外縁、内底炭化物	00020
037	H		H・D	H	(18.0)	—	口縁削ナメ、削内ヘラ 削り、内輪毛	淡赤褐色	保付着	00067
038	H	17	H・B	H	12.3	—	口縁削ナメ、削内ヘラ 削り、内輪毛	武神色	外縁底	00032
039	H	17	H・E	H	(13.2)	—	口縁削ナメ、削内ヘラ 削り、内輪毛	褐色	外縁底、保付着	00024
040	15	18	H・E	H	15.6	—	28.4 口縁削ナメ、削内ヘラ 削り、内輪毛	グ	H	00021
041	H	18	H	H	(14.3)	—	28.5 口縁削ナメ、削内ヘラ 削り、内輪毛	グ	外竹管文、黒底、保付着	00025
042	H	18	H・E	H	(16.5)	—	25.6 口縁削ナメ、削内ヘラ 削り、内輪毛	グ	外縁、内底炭化物	00028
043	H	18	H・E	H	17.3	—	26.9 口縁削ナメ、削内ヘラ 削り、内輪毛	グ	外縁付着	00023
044	15	18	H・B	H	22.0	—	口縁削ナメ、削内ヘラ 削り、内輪毛	グ	外縁底	00030
045	H	18	H・E	H	22.0	—	口縁削ナメ、削内ヘラ 削り、内輪毛	淡褐色	外ヘラ削り到突文、黑 底	00026
046	17		H・B	H	(34.0)	—	—	褐色	外縁、頭へラ削り洗	00029
047	H	19	H・E	H	17.7	—	33.1 口縁削ナメ、削内ヘラ 削り、内輪毛	淡褐色	外縁削付着	00027
048	H	19	H	H	12.8	—	20.4 口縁削ナメ、削内ヘラ 削り、内輪毛	淡褐色	外縁、内底炭化物	00031
049	H	19	H・F	H	(12.8)	—	19.2 口縁削ナメ、削内ヘラ 削り、内輪毛	褐色	外底	00033
050	H	19	H・E	H	11.6	—	15.4 口縁削ナメ、削内ヘラ 削り、内輪毛	赤褐色	外縁、内底炭化物、刻文	00034

第2表 掘載遺物一覧1

遺物番号	種類	四角	出土 重機	遺物種類	□ 径	底(筒)径	器 高	調 定	色 調	その他の特徴	登録番号
051	17	19	S K01・F	土師・壺	12.4	—	15.6	口縁内凹形、傾いた脚 内へくらり、脚内へくら リナマ、外脚内凹形、ヘラ 足2、脚ナマ	褐色	外底黒斑、ヘタ模様文 立	00035
052	18	19	H	II II	12.4	—	11.5	口縁内凹形、傾いた脚 内へくらり、脚内へくら リナマ、外脚内凹形、ヘラ 足2、脚ナマ	赤褐色	外黒斑	00037
053	II	19	H + E	II II	—	—	—	内ナマ、外脚内凹形、ヘラ 足2、脚ナマ	褐色	外底、黒斑	00088
054	II	20	H + F	II II	—	—	—	内へくらり、外脚内凹形	灰褐色	II	00036
055	II	20	H	II II	11.4	—	12.5	口縁内凹形、傾いた脚 内へくらり、脚内へくら リナマ、外脚内凹形、ヘラ 足2、脚ナマ	褐色	II	00038
056	II	20	H	II 壺	(9.4)	—	—	内脚内凹形、直ナマ、脚 内へくらり	赤褐色	外脚内凹形直ナマ、脚 内へくらり	00039
057	II	20	H	II II	9.6	—	8.2	口縁内凹形、傾いた脚 内へくらり、脚内へくら リナマ、外脚内凹形、ヘラ 足2、脚ナマ	灰褐色	外黒付普	00040
058	II	20	H + F	II II	(10.6)	—	8.2	脚ナマ、傾いた脚内凹 形2	褐色	外底、昂底	00041
059	II	20	H + E	II II	7.8	—	9.8	口縁内凹形、傾いた脚 内へくらり	赤褐色	外黒斑底	00042
060	II	20	H	手提土 壺	5.6	—	7.6	口縁内凹形、傾いた脚 内へくらり、脚内へくら リナマ、外脚内凹形、ヘラ 足2、脚ナマ	II	外へラ模様比拡、黒斑	00043
061	II	—	H + D	II II	—	—	—	内脚ナマ、外脚内凹形	褐色	00083	
062	II	—	H	II II	—	—	—	脚内凹形	赤褐色	00084	
063	II	20	H + E	高杯	16.4	12.2	12.7	内脚内凹形、脚内凹形 内へくらり、脚内へくら リナマ、外脚内凹形	褐色	脚底	00044
064	II	20	H + E	II II	(16.4)	—	—	内脚内凹形、脚内凹形 内へくらり、外脚内凹形	褐色	00049	
065	II	21	H + E	II II	12.7	—	—	内へくらり、外脚内凹形	赤褐色	外黒斑	00048
066	II	—	H	II II	(14.6)	—	—	脚内凹形、脚ナマ、ニア モチ	褐色	内外運付普	00060
067	II	—	H	II II	17.6	—	—	脚内凹形、脚ナマ	II	外底、黒底、内脚内付普	00062
068	II	21	H + E	II II	18.6	—	—	内脚内凹形、脚内凹形 内へくらり、脚ナマ	II	脚赤褐色瓶斜	00046
069	II	21	H + E	II II	15.9	—	—	内へくらり、脚内へくら リナマ、脚内へくら リナマ	II	杯、脚赤褐色瓶斜	00045
070	II	21	H + E	II II	18.7	—	—	内へくらり、脚内へくら リナマ、脚内へくら リナマ	II	00047	
071	II	21	H + F	II II	16.9	—	—	内へくらり、脚内へくら リナマ、脚内へくら リナマ	II	内外黒斑	00053
072	19	—	H	II II	—	—	—	内へくらり、脚内へくら リナマ、脚内へくら リナマ	赤褐色	外黒付普	00063
073	—	H	II II	—	—	—	内へくらり、ナマ、内ナマ	赤褐色	赤褐色、穿孔	00062	
074	—	H + D	II II	—	—	—	内へくらり	褐色	穿孔	00061	
075	II	21	H + E	II II	—	12.4	—	内へラ河内、脚内凹形 内へくらり、脚内凹形	褐色	穿孔	00056
076	II	—	H + E	II II	—	—	—	内へラ河内、脚内凹形 内へくらり、脚内凹形	褐色	穿孔、穿孔	00058
077	II	—	H	II II	—	—	—	内へラ河内、脚内凹形 内へくらり	褐色	穿孔、穿孔	00057
078	II	—	H + E	II II	—	10.9	—	内へラ河内、脚内凹形 内へくらり、脚内凹形	赤褐色	穿孔、穿孔	00064
079	II	—	H + F	II II	—	—	—	内へくらり、ナマ、内ナマ	赤褐色	00059	
080	II	—	H	II II	—	16.6	—	内へくらり、ナマ、内ナマ	赤褐色	やや軟質化、穿孔	00055
081	II	21	H + E	II II	13.1	10.1	7.3	口縁内凹形、脚内凹形 内へくらり、脚内凹形	赤褐色	00074	
082	II	21	H + E	杯	11.0	—	4.9	口縁内凹形、内脚内凹形 内へくらり、脚内凹形	赤褐色	外黒付普	00076
083	II	21	H + E	II II	(8.4)	—	6.0	口縁内凹形、内脚内凹形 内へくらり、脚内凹形	褐色	00080	
084	II	—	H + E	II II	—	4.6	—	内脚内凹形、脚ナマ	赤褐色	赤褐色斜纹	00077
085	II	22	H	盆	15.7	—	5.9	内脚内凹形、脚内凹形 内へくらり、脚内凹形	褐色	内外黒斑	00066
086	II	22	H + C	II II	15.9	—	6.2	内へくらり、脚内凹形 内へくらり、脚内凹形	褐色	内外黒斑	00067
087	II	—	H	II II	(16.0)	—	—	内へくらり、脚内凹形	赤褐色	磨滅らしい	00068
088	II	22	H + E	II II	(14.9)	—	9.2	内へくらり、脚内凹形 内へくらり、脚内凹形	赤褐色	外黒付普	00071
089	II	22	H + E	II II	(13.7)	—	7.3	内脚内凹形、脚内凹形 内へくらり、脚内凹形	赤褐色	内外黒斑	00069
090	II	22	H + E	II II	(10.2)	—	8.6	口縁内凹形、内脚内凹形 内へくらり、脚内凹形	赤褐色	内口縁爆付普	00070
091	II	22	H	II II	(18.0)	—	8.9	口縁内凹形、内脚内凹形 内へくらり、脚内凹形	褐色	外黒斑	00073
092	II	—	H + E	手提土 壺	(9.6)	—	5.1	内へくらり、脚ナマ	赤褐色	00079	
093	II	22	H + F	II II	9.0	—	6.1	内へくらり、脚ナマ	赤褐色	外黒付普	00078
094	II	22	H + E	II II	7.5	—	5.2	口縁内凹形、内脚内凹形 内へくらり、脚内凹形	赤褐色	00075	
095	20	22	H + E	白竹林 杯	12.8	9.4	10.1	内へくらり、脚ナマ	褐色	外黒斑	00072
096	II	—	H + ジョッカ	—	(17.0)	—	—	内脚内凹形、脚内凹形 内へくらり、脚内凹形	赤褐色	把手残存	00062
097	II	22	新潟県	盆	4.4cm、深0.7cm、 底5.16cm、口縁3.16cm	—	—	—	—	光形	00081
098	22	S K03	土師・壺	(13.0)	—	—	—	口縁内凹形、脚内凹形 内へくらり、脚内凹形	赤褐色	—	00095
099	II	—	H + 砂	(12.6)	—	—	—	口縁内凹形、脚内凹形 内へくらり、脚内凹形	赤褐色	00096	
100	II	—	H	II II	(14.5)	—	—	ナマ	赤褐色	磨滅著しい	00094

第3表 掘藏遺物一覧2

遺物番号	標題	出 土 連 構	遺物種類	口 径	底(脚)径	高	調 研	色 製	その他の特徴	登録番号
101 22	S K03	土師・瓶	—	—	—	内ヘラ刷毛、外ナダ	灰褐色	把手のみ	00093	
102 22	S K04	赤牛・甕	—	7.0	—	白陶質、内アマ、外施毛	暗褐色		00108	
103 22	—	—	—	(8.3)	—	内側毛目、外横ナダ、ナ	淡褐色		00109	
104 22	—	土瓶	—	(16.9)	—	口縁横ナダ、内ヘラ刷	灰黑色	外縁付着	00107	
105 22	—	—	—	14.6	—	ナダ	褐色	施毛等しい	00098	
106 22 23	—	—	—	(14.0)	—	内アマ、外施毛、内ヘラ	褐色	外縁付着	00102	
107 22 23	—	—	—	11.2	—	内側毛目、外横ナダ、ナ	灰褐色		00101	
108 22	—	—	—	—	—	内ナダ、外ヘラ刷毛、ナ	褐色		00104	
109 22	—	—	—	—	—	内側毛目、外ナダ	暗褐色		00103	
110 22	—	—	—	—	—	ナダ、ナダ	深赤褐色		00106	
111 22 23	—	—	—	11.6	—	6.3	口縁横ナダ、内アマ、外	灰褐色	外縁付着、内泥化物	00097
112 22 23	—	—	—	10.8	—	4.6	内側毛目、ナダ	—	00100	
113 22	—	—	—	—	—	ナダ、外ヘラ刷毛、ナ	褐色	外ヘラ刷毛刻文	00105	
114 22	—	—	—	—	—	内側横ナダ、外ナダ	暗赤褐色	把手のみ	00099	
115 24	S K05	甕	(23.1)	—	—	—	口縁横ナダ、内ヘラ刷毛、外施毛	淡褐色	00217	
116 22	—	—	—	(17.9)	—	—	口縁横ナダ、内ヘラ刷毛、外施毛	—	赤身をおびた黄褐色	00215
117 22	—	—	—	(22.1)	—	—	内側毛目、外施毛	—	00214	
118 22	—	—	—	(21.3)	—	—	口縁横ナダ、内側毛目、外施毛	—	00216	
119 22	—	—	—	(25.6)	—	—	口縁横ナダ、内側毛目、外施毛	—	00211	
120 22	—	—	—	(19.1)	—	—	口縁横ナダ、内側毛目、外施毛	—	00209	
121 22	—	—	—	(17.8)	—	—	口縁横ナダ、内側毛目、内ヘラ	暗褐色	口縫埋付着	00202
122 22	—	—	—	(13.4)	—	—	二輪脚、内側毛目、内ヘラ	—	縫付着	00201
123 22	—	—	—	(19.3)	—	—	口縁横ナダ、内側毛目、内ヘラ	褐色	口縫埋付着	00219
124 22	—	—	—	(15.6)	—	—	口縁横ナダ、内側毛目、内ヘラ	—	00213	
125 22 23	—	—	—	(14.8)	—	15.9	口縁横ナダ、内側毛目、内ヘラ	—	外縁付着	00195
126 22 23	—	—	—	15.5	—	—	口縁横ナダ、内側毛目、内ヘラ	暗褐色	外縁付着	00208
127 25	—	—	—	(17.7)	—	—	口縁横ナダ、内側毛目、内ヘラ	—	外縁付着	00212
128 22	—	—	—	—	—	—	口縁横ナダ、内側毛目、内ヘラ	—	外縁付着	00219
129 22 23	—	—	—	(13.2)	—	—	口縁横ナダ、内側毛目、内ヘラ	暗褐色	漆、漆化物付着	00196
130 22 23	—	—	—	—	—	—	口縁横ナダ、内側毛目、内ヘラ	褐色	漆中位近に縫付着	00282
131 22	—	—	—	(17.3)	—	—	口縁横ナダ、内側毛目、内ヘラ	—	縫きやわあまい	00289
132 26 23	—	—	—	(20.0)	—	—	内側横ナダ、外カタキ、ナ	—	外縫付着	00290
133 22	—	—	—	—	—	—	内ナダ、外カタキ	深赤褐色	小片、焼きやわあまい	00279
134 22 24	—	—	—	(26.8)	—	27.4	口縁横ナダ、内側毛目、ナダ	暗褐色	縫付着、焼きやわあまい	00291
135 22	—	—	—	—	—	—	内ヘラ刷毛、外縫付	褐色	把手のみ	00276
136 22	—	—	—	—	—	—	—	—	—	00268
137 22	—	—	—	—	—	—	—	—	—	00269
138 22	—	—	—	—	—	—	—	—	—	00270
139 22	—	—	—	—	—	—	—	—	—	00278
140 22	—	—	—	—	—	—	内ナダ、外縫付	—	—	00273
141 22	—	—	—	—	—	—	外縫付	—	—	00277
142 22	—	—	—	—	—	—	—	—	—	00272
143 22	—	—	—	—	—	—	—	—	—	00275
144 22	—	—	—	—	—	—	—	—	—	00274
145 22	—	—	—	—	—	—	内ナダ、外縫付	—	—	00271
146 27	—	—	—	—	—	—	口縫横ナダ、内ナダ	深赤褐色		00242
147 22	—	—	—	(17.8)	—	—	横ナダ	褐色		00245
148 22	—	—	—	(17.7)	—	—	ナダ	褐色		00247
149 22	—	—	—	(18.8)	—	—	ナダ	褐色		00249
150 22 24	—	—	—	17.0	—	—	口縫横ナダ、内側、外縫	褐色		00244

第4表 掘載遺物一覧3

遺物番号	標本記号	出土遺構	遺物種類	口径	底(周)径	器高	調査	色調	その他の特徴	登録番号
151	27	S K65	土器・高杯	(16.8)	—	—	口縁擴ナゲ、底不明	淡赤褐色	一部縫付着	00250
152	# 24	#	#	15.8	—	—	口縁擴ナゲ、弓張ナゲ、海色	口縁外縫付着	00243	
153	#	#	#	(14.8)	—	—	口縁擴ナゲ、底灰ナゲ	淡赤褐色	00246	
154	#	#	#	(15.8)	—	—	内ナゲ、外側ナゲ	淡褐色	外赤色顔料	00248
155	#	#	#	(19.4)	—	—	内ナゲ、外側ナゲ	海色	00251	
156	# 24	#	#	15.1	—	—	口縁擴ナゲ、底灰白	海色	00240	
157	# 24	#	#	(15.7)	11.2	13.0	内ナゲ、外縫付着	淡褐色	00241	
158	#	#	#	(16.7)	—	—	内ナゲ、外縫付着、外側ナゲ、ナゲ	淡赤褐色	00236	
159	# 24	#	#	—	12.6	—	内ナゲ、外縫付着、外側ナゲ、ナゲ	淡褐色	00238	
160	#	#	#	—	15.0	—	外縫付着、外側ナゲ、ナゲ	淡赤褐色	00262	
161	#	#	#	—	(11.8)	—	ナゲ	ナゲ	00253	
162	# 24	#	#	—	(13.6)	—	内ナゲ、外縫付着、外側ナゲ、ナゲ	外へラ墨書き沈継文	00239	
163	# 24	#	#	—	13.1	—	内へナゲ、外縫付着、外側ナゲ、ナゲ	ナゲ	00237	
164	#	#	#	—	(12.5)	—	内へナゲ、外縫付着、外側ナゲ、ナゲ	褐色	外縫付着	00254
165	#	#	#	—	—	—	ナゲナゲ、ナゲ	灰黒褐色	00266	
166	28	24	#	鉢	(16.1)	—	口縁擴ナゲ、底ナゲ、内ナゲ、外縫付着	褐色	煤、炭化物付着	00197
167	# 25	#	#	(15.3)	—	19.4	内ナゲ、ヘナナゲ、ナゲ	ナゲ	縫付着、やや軟質	00203
168	# 25	#	#	16.2	—	18.8	内ナゲ、外縫付着、外へナゲ、ナゲ	褐色	煤、炭化物付着、軟質	00199
169	# 25	#	#	15.9	—	—	口縁擴ナゲ、ナゲナゲ、内ナゲ、外縫付着	褐色	縫付着	00198
170	# 25	#	#	(14.6)	—	—	口縁擴ナゲ、内ナゲ、外縫付着	淡赤褐色	底わざか縫付着	00204
171	#	#	#	(15.9)	—	—	内ナゲ、外縫付着、内へナゲ	ナゲ	縫付着	00200
172	#	#	#	(20.0)	—	—	内ナゲ、外縫付着、内へナゲ	ナゲ	ナゲ	00207
173	#	#	#	(17.7)	—	—	内ナゲ、外縫付着、内へナゲ	淡褐色	ナゲ	00205
174	# 25	#	#	(14.8)	—	—	口縁擴ナゲ、内へナゲ、ナゲナゲ、内縫付着	淡赤褐色	縫付着、やや軟質	00194
175	#	#	#	(15.8)	—	—	内ナゲ、外縫付着	褐色	00206	
176	# 25	#	#	(13.7)	—	12.0	口縁擴ナゲ、内へナゲ、外縫付着、ナゲナゲ	淡褐色	縫付着、やや軟質	00188
177	# 25	#	#	11.6	—	—	内ナゲ、外縫付着、内へナゲ	ナゲ	00190	
178	# 25	#	#	—	7.2	—	内へナゲ、外縫付着	淡赤褐色	00218	
179	#	#	#	—	8.5	—	内ナゲナゲ、外縫付着、ナゲナゲ	褐色	わざか縫付着	00283
180	29	#	#	(11.6)	—	—	口縁擴ナゲ、内へナゲ、ナゲナゲ、内縫付着	ナゲ	縫付着	00189
181	#	#	#	(12.5)	—	—	内ナゲ、外縫付着	ナゲ	00192	
182	#	#	#	(13.8)	—	—	内ナゲ、外縫付着	ナゲ	00191	
183	#	#	#	(9.6)	—	—	内ナゲ、外縫付着、内へナゲ	淡褐色	00193	
184	# 25	#	#	(9.5)	—	8.5	口縁擴ナゲ、内へナゲ、ナゲナゲ、内縫付着	ナゲ	ナゲ	00187
185	# 26	#	#	12.7	—	9.6	内へナゲ、外へナゲ	ナゲ	00184	
186	# 26	#	#	10.9	—	(9.6)	口縁擴ナゲ、内へナゲ、ナゲナゲ、外縫付着	ナゲ	煤、炭化物付着、軟質	00186
187	#	#	#	—	7.2	—	内ナゲ、外縫付着、内へナゲ	ナゲ	縫付着、軟質	00185
188	#	#	#	鉢	(12.2)	—	口縁擴ナゲ、外縫付着、ナゲナゲ	ナゲ	外縫付着	00232
189	# 26	#	#	13.1	—	5.3	内ナゲ、外縫付着、内へナゲ	褐色	00222	
190	# 26	#	#	(13.8)	—	—	口縁擴ナゲ、体内ナゲ、内へナゲ、ナゲナゲ	淡褐色	00223	
191	#	#	#	(13.7)	—	—	内ナゲ、外縫付着、ナゲナゲ	淡褐色	00235	
192	# 26	#	#	13.6	—	6.2	口縁擴ナゲ、底ナゲ	淡褐色	牛牛軟質	00221
193	#	#	#	(14.1)	—	—	口縁擴ナゲ、内ナゲナゲ	褐色	00234	
194	#	#	#	(12.9)	—	—	口縁擴ナゲ、底ナゲナゲ	ナゲ	00233	
195	#	#	#	(12.4)	—	—	口縁擴ナゲ、底ナゲナゲ	ナゲ	00226	
196	#	#	#	(12.9)	—	—	口縁擴ナゲ、底ナゲナゲ	淡褐色	00225	
197	# 26	#	#	(12.8)	—	—	口縁擴ナゲ、体内ナゲ、内へナゲ	褐色	00224	
198	#	#	#	(14.6)	—	—	口縁擴ナゲ、体内ナゲ、内へナゲ	ナゲ	00227	
199	# 26	#	#	(13.7)	—	6.0	口縁擴ナゲ、内ナゲナゲ、内へナゲ	淡赤褐色	00231	
200	#	#	#	(11.8)	—	—	内ナゲナゲ、体内ナゲ、内へナゲ	褐色	00228	

第5表 掘載遺物一覧4

遺物番号	測量記号	出土遺構	遺物種類	口径	底(脚)径	器高	裏面	色調	その他の特徴	登録番号	
201	29	S K05	土師・鉢	(12.2)	—	—	口縁部ナデ、腹ナデ	灰褐色		00229	
202	H	H	H H	(12.5)	—	—	口縁部ナデ、底内面も白目 外側白目	高褐色		00230	
203	H	26	H H	12.4	—	7.9	口縁部ナデ、底内面ナデ?外 側白目、ナデ剥離	褐色		00220	
204	H	H	H 杯	(5.9)	—	1.8	ナデ	タ	ミニチュア土器	00227	
205	H	H	H H	(4.0)	—	2.9	ナ	タ		00285	
206	H	H	H 鉢	—	1.8	—	内側白目、外ナデ	灰褐色	タ	00224	
207	H	H	H H	—	—	—	ナデ	タ		00226	
208	30	26	H	四足・盃	(16.7)	—	内側井干形、底内面ナデ?外 側白目、ナデ剥離	灰褐色	内面白色地	00176	
209	H	H	H H	(12.7)	—	—	内側井干形、外大井へラ附 り、底ナデ	灰黒色	焼きややあまい	00125	
210	H	H	H H	(12.5)	—	—	内側井干ナデ、外天井へラ附 り、底ナデ	灰		00126	
211	H	26	H	H H	(13.3)	—	鳥天井へラ附り、底ナデ	暗青灰色	焼きややあまい	00117	
212	H	H	H H	(13.0)	—	—	鳥天井へラ附り、底内面ナデ	暗		00123	
213	H	26	H	H H	12.0	4.0	内側井干ナデ、外天井へラ附 り、ナデ、底内面ナデ	灰白色	焼きややあまい	00112	
214	H	H	H H	(13.5)	—	—	内側井干ナデ、外天井へラ附 り、底ナデ	灰黒色		00114	
215	H	26	H	H H	12.6	4.0	内天井カキ目、底内面ナデ	明青灰色		00111	
216	H	26	H	H H	(12.5)	3.9	内側井干ナデ、外天井へラ附 り、ナデ、底内面ナデ	灰	焼きややあまい	00116	
217	H	H	H H	(12.6)	—	—	外天井へラ附り、底ナデ	灰黒色		00115	
218	H	H	H H	(10.9)	—	—	外天井へラ附り、底内面ナデ	タ		00119	
219	H	H	H H	(11.3)	—	—	外天井へラ附り、底内面ナデ	暗青灰色		00120	
220	H	27	H	H H	(11.2)	4.3	内天井カキ目、外天井へラ附 り、ナデ、底内面ナデ	灰黒色		00121	
221	H	27	H	H H	12.6	4.6	外天井へラ附り、底ナデ	灰		00113	
222	H	27	H	H H	(13.6)	4.3	内天井カキ目、外天井へラ附 り、ナデ、底内面ナデ	タ	焼きややあまい	00122	
223	H	27	H	H H	12.6	4.1	内天井ナデ、外天井へラ附 り、底内面ナデ	灰黒色		00119	
224	H	27	H	H H	(12.2)	4.3	内天井ナデ、外天井ナデ、 ヨウモク、底内面ナデ	灰		00127	
225	H	H	H H	—	—	—	内天井ナデ、外天井ナデ、 ヨウモク	青灰色		00128	
226	H	H	H H	—	—	—	内天井ナデ、外天井ナデ、 ヘラ附り、底内面ナデ	淡青灰色	焼きややあまい	00129	
227	H	27	H	H 杯	(10.8)	—	5.5	内天井ナデ、外天井へラ附 り、底内面ナデ	暗青灰色	タ	00134
228	H	H	H H	(9.4)	—	4.6	内天井ナデ、内底へラ附り、 底内面ナデ	青灰色		00132	
229	H	27	H	H H	10.6	5.4	外天井へラ附り、底内面ナデ	灰		00131	
230	H	H	H H	(11.7)	—	—	外天井へラ附り、底内面ナデ	暗青灰色		00136	
231	H	27	H	H H	10.6	4.5	内天井ナデ、外天井へラ附 り、底内面ナデ	青灰色		00130	
232	H	27	H	H H	(9.6)	4.7	外天井へラ附り、底内面ナデ	タ		00133	
233	H	27	H	H H	(16.4)	—	外天井へラ附り、底内面ナデ	タ		00136	
234	H	H	H 高杯	(15.6)	—	—	外天井へラ附り、底内面ナデ	灰	焼きややあまい	00137	
235	H	27	H	H H	(10.6)	—	内天井へラ附り、外天井カキ目、 底内面ナデ	灰黒色	高杯か?	00138	
236	H	H	H H	受部残	(12.2)	—	内天井ナデ、外天井カキ目、 底内面ナデ	灰		00141	
237	H	27	H	H H	(13.0)	—	内底、開口ナデ、外底へラ 附り、カキ目、底内面ナデ	灰		00143	
238	H	27	H	H H	(12.5)	—	底ナデ	暗灰色	焼きややあまい	00140	
239	31	H	H H	—	—	—	内底ナデ、底内面ナデ	奇跡灰色	4ヶ所の邊かし	00144	
240	H	H	H H	(13.5)	—	—	内底ナデ、外底へラ附り、 カキ目、底内面ナデ	灰白色	焼きややあまい	00139	
241	H	H	H H	(16.6)	—	—	底ナデ	灰黒色		00124	
242	H	H	H H	(16.7)	—	—	外底へラ附り、底内面ナデ	明灰色	波状文	00145	
243	H	28	H	H H	16.5	11.3	12.4	内底ナデ、外底へラ附り、 底一部カキ目、底内面ナデ	灰黒色	波状文、4ヶ所の邊か し	00142
244	H	H	H H	—	—	—	底ナデ	灰黒色	波状文	00177	
245	H	H	H H	—	—	—	底ナデ	灰	波状文	00149	
246	H	H	H H	—	—	—	底ナデ	灰黒色	波状文、把手	00148	
247	H	H	H H	—	(11.7)	—	底ナデ	暗灰色		00170	
248	H	H	H H	—	(10.2)	—	底ナデ	灰黑色	邊かし	00155	
249	H	H	H H	—	(10.3)	—	底ナデ	深灰黑色	邊かし	00169	
250	H	H	H H	—	(20.6)	—	底ナデ	灰		00158	

第6表 掘立遺物一覧5

遺物番号	地図	段階	出土場所	遺物種類	口 径	高(脚)径	幅	高	調	色	調	その他の特徴	登録番号
251	31		S K05	漆器・高杯		(10.4)	—	横ナデ	灰白色	4ヶ所の透かし、焼きあしまれ		00147	
252	#	#	#	#	#	(9.0)	—	横ナデ	青灰色	4ヶ所の透かし		00146	
253	#	28	#	#	#	(24.4)	—	横ナデ	淡灰黑色	透状文、透かし		00165	
254	#	#	#	#	#	(9.1)	—	横ナデ	灰黑色	透状文、一部灰輪		00151	
255	#	#	#	#	#	—	—	横ナデ	灰黑色	透状文、一部灰輪		00179	
256	#	28	#	#	#	(9.8)	—	横ナデ	淡灰黑色	透状文、内面自然輪		00173	
257	#	#	#	#	#	—	—	横ナデ	灰黑色	透状文、内面自然輪		00180	
258	#	#	#	#	#	—	—	横ナデ	淡灰黑色	透状文		00181	
259	#	#	#	#	#	(11.2)	—	横ナデ	暗赤褐色	透状文、一部灰輪		00150	
260	#	28	#	#	#	(14.8)	—	横ナデ	灰黑色	透状文		00166	
261	#	#	#	#	#	(17.8)	—	横ナデ	黑色	粗い透状文		00175	
262	#	28	#	#	#	(17.4)	—	横ナデ	淡灰黑色	透状文、内面自然輪		00174	
263	#	#	#	#	#	(19.2)	—	横ナデ	灰黑色	透状文、一部自然輪		00167	
264	#	28	#	#	#	15.0	—	横ナデ、ナデ	灰黑色	透状文		00160	
265	32	28	#	#	#	(13.3)	—	11.3	内面ナキ縁、外底ヘラ ナダ、透窓ナダ	灰黑色	透状文	00164	
266	#	#	#	#	#	(9.9)	—	5.4	外底ヘラ削り、透窓ナ ダ	灰黑色	透状文、把手	00178	
267	#	#	#	#	#	(9.8)	—	外底ヘラ削り、透窓ナ ダ	灰黑色	透状文、把手		00153	
268	#	#	#	#	#	—	—	ナダ、底ヘラナダ	暗灰色	把手		00172	
269	#	#	#	#	#	(18.2)	—	横ナデ	深緑灰色	ヘラ彫り文、焼きやせ あしまれ		00156	
270	#	#	#	#	#	(6.2)	—	内面ナダ、ナダ、外カキ 口、透窓ナダ	明灰色			00154	
271	#	#	#	#	#	(19.6)	—	内面ナダ、ナダ、透窓ナ ダ	明灰色	透状文		00158	
272	#	#	#	#	#	(16.0)	—	口縁ナダ、ナダ、内窓ナ ダ、ナダ、カタチ	灰褐色			00152	
273	#	28	#	#	#	(16.6)	—	口縁ナダ、内窓ナダ、 外カキナダ	灰色	外窓透文		00157	
274	#	#	#	#	#	—	—	内面ナダ、ナダ、内窓ナ ダ、外窓ナダ	淡灰黑色	外窓、内面自然輪		00183	
275	#	#	#	#	#	—	—	内ナダ、外カキナ	灰黑色			00182	
276	#	#	#	#	#	(23.0)	—	内ナダ、外カキナ	暗灰			00159	
277	#	28	#	ガラス小玉	最大径0.9cm、最大厚0.68cm、穿孔径0.15cm、重量0.8g							00483	
278	#	28	#	手神石丸	長さ6.4cm、幅2.6cm、最大厚1.0cm、重量17.1g							00484	
279	33	29	#	石器・石器	長さ6.3cm、幅3.6cm、最大厚0.8cm							00487	
280	#	29	#	石器	長さ11.5cm、最大幅3.5cm、最大厚4.4cm、重量22.6g							00485	
281	#	29	#	木器・平歛	長さ20.5cm、最大幅11.5cm、最大厚1.2cm							00509	
282	#	29	#	木器	長さ45.7cm、最大幅11.4cm、底部最大幅6.7cm							00512	
283	#	29	#	骨子	長さ23.3cm、最大幅6.5cm							00510	
284	#	29	#	不明	長さ63.9cm、最大幅6.0cm、最大厚1.5cm							00513	
285	#	#	#	#	#	長さ24.7cm、最大幅6.5cm、最大厚6.8cm						00514	
286	#	#	#	#	#	長さ29.1cm、最大幅4.0cm、最大厚3.6cm						00515	
287	#	#	#	#	#	長さ15.1cm、最大幅9.5cm、最大厚1.1cm						00517	
288	35	29	S K06	土師・高杯	16.5	11.2	13.3	外側毛目、内ナダ、御 内ナダナダ	淡赤褐色	焼きやわらかい		00298	
289	#	29	#	#	#	(15.9)	12.2	13.4	#	#		00292	
290	#	#	#	#	#	—	(14.9)	脚内拘束、底不明	淡褐色			00294	
291	#	#	#	#	#	(14.2)	—	口縁ナダ、内窓ナダ、 脚内ヘラ削り、外脚毛目	暗褐色	頭部付着		00296	
292	#	#	#	#	#	(6.2)	—	口縁ナダ、内窓ナダ、 脚内ヘラ削り、外脚毛目	暗褐色	ミニチュア上器		00293	
293	#	#	#	朱生・高杯	—	—	—	内持ばり、外脚毛目	淡褐色			00295	
294	#	#	#	#	#	(6.4)	—	不明	暗褐色			00297	
295	#	30	S K07	土師・壺	15.9	—	—	脚内ナダ、脚外ナダ、 脚内脚外目	茶褐色			00299	
296	#	#	#	#	#	(15.9)	—	口縁ナダ、内窓ナダ、 脚内ヘラ削り、外脚毛目	暗褐色	調外わざか保付着		00301	
297	#	30	#	#	#	(10.0)	—	内ナダ削り、外脚毛目、 ヘラナダ	#	軟質、外脚付着		00302	
298	#	#	#	#	#	(11.1)	—	口縁ナダ、内窓ナダ、 脚内ヘラ削り、外脚毛目	#	外わざか保付着		00303	
299	#	30	#	#	#	12.0	—	5.1 体外脚毛目、脚横ナ ダ、ナダ	褐色	保付着		00300	
300	37		S K08	#	高杯	—	—	内外脚毛目、ナダ	淡褐色			00305	

第7表 掘藏遺物一覽6

遺物番号	鉢	皿	出土遺構	遺物種類	口径	底(脚)径	高さ	調査者	色調	その他の特徴	登録番号
301	37	S K08	土器・高杯	—	—	—	—	内横ナデ、内へラ形 タマヘラナデ	赤褐色	赤褐色腹斜窓	00304
302	II	II	II	II	—	—	—	不明	赤褐色		00307
303	II	II	II	II	—	—	—	外削毛目、内ナデ?	赤褐色		00306
304	II	II	II	碗	(9.4)	—	2.5	口縁横ナデ、底脚押え	灰褐色		00308
305	II	II	II	鉢	—	3.2	—	内ナデ、外削毛目	II	丸底	00309
306	II	II	II	II	—	(6.0)	—	内ナデ、外削毛目、ナデ	褐色		00310
307	II	30	II	須磨・杯	(11.2)	—	4.9	外へラ削り、他横ナデ	灰褐色		00311
308	II	II	II	盃	(10.5)	—	—	横ナデ	青灰色		00313
309	II	II	II	甕?	—	—	—	横ナデ	灰褐色	外面島起伏タグキ	00314
310	II	II	II	甕?	—	—	—	内ナデ、外タクタキ	灰黑色	軟質、小片	00312
311	39	S K09	土器・瓶	(18.0)	—	—	—	内横ヘラ削り、ナデ、外 削毛目	—		00315
312	II	II	II	高杯	—	(13.0)	—	内横ナデ、他不明	淡赤褐色		00317
313	II	II	II	II	—	(13.3)	—	外削毛目、他横ナデ	赤褐色	外わざか赤色顔料	00318
314	II	II	II	鉢	—	(5.5)	—	外削毛目、他横ナデ	II		00316
315	48	S K10	秀生・甕	(16.5)	—	—	—	口縁横ナデ、体削毛目	灰褐色	砂粒多く含む	00326
316	II	II	II	土器・鉢	—	(9.2)	—	内底へラ削り	II	内底化物付着	00331
317	II	II	II	II	—	(7.2)	—	内ナデ、外へラナデ、削 毛目	黑色	外傷付着	00328
318	II	II	II	高杯	(15.1)	—	—	内外、ナデ?	灰褐色		00322
319	II	II	II	II	(17.8)	—	—	内外、ナデ?	II		00323
320	II	II	II	II	—	(11.2)	—	内へラ削り、外横ナデ、 ナデ	淡赤褐色		00324
321	II	II	II	II	—	(15.6)	—	内削毛目、他横ナデ、ナ デ	II		00325
322	II	36	II	碗	10.2	—	5.2	口縁横ナデ、他ナデ	II		00320
323	II	30	II	II	12.2	—	5.0	口削毛目、他横ナデ、 ナデ?	II	大粒砂青む	00319
324	II	II	II	II	(10.3)	—	3.6	口縁横ナデ、他ナデ	II	II	00321
325	II	II	II	II	(12.2)	—	4.0	口縁横ナデ、内ナデ、他 不明	淡赤褐色		00326
326	II	II	II	杯	—	—	—	横ナデ	灰褐色	焼きあまい	00329
327	II	II	II	須磨・瓶	(19.6)	—	—	横ナデ	青灰色	波状文	00332
328	II	II	II	高杯	—	(13.2)	—	横ナデ	淡赤褐色	4ヶ所通かし	00333
329	42	S K11	秀生・鉢	(8.5)	—	—	—	内横ナデ、外ナデ	褐色		00339
330	II	II	II	土器・瓶	(28.8)	—	—	口横ヘラ削り、内へラ削 り、外削毛目	赤褐色		00334
331	II	II	II	甕?	(15.0)	—	—	口縁横ナデ、内へラ削 り?	灰褐色	砂粒多く含む	00335
332	II	II	II	II	(21.0)	—	—	口縁横ナデ、内へラ削 り?	II	II	00336
333	II	II	II	碗	(13.8)	—	—	横ナデ、ナデ?	灰褐色		00338
334	II	II	II	II	(10.0)	—	—	口縁横ナデ、外へラ削 り?	暗褐色		00340
335	II	II	II	鉢	(10.8)	—	—	口縫、内削毛目、内へラ削 り?	淡赤褐色		00337
336	II	30	II	高杯	(19.7)	—	—	横ナデ、ナデ?	淡赤褐色		00342
337	II	II	II	甕?	—	—	—	底押え、内へラ削り	灰褐色	把手のみ	00341
338	II	II	II	甕?	(10.4)	—	—	横ナデ	灰褐色	焼きあまい	00345
339	II	30	II	甕	(13.6)	—	4.3	外天井へラ削り、他横 ナデ	灰褐色		00343
340	II	30	II	II	14.0	—	5.6	外天井カキ目、底横ナ デ	暗青灰色	大粒、白色砂粒含む	00347
341	II	30	II	II	12.3	—	4.3	外天井へラ削り、他横 ナデ、ナデ	灰褐色	人枚砂粒多い	00346
342	II	II	II	II	(12.6)	—	—	横ナデ	暗灰色		00344
343	II	S K12	土器・甕	(22.4)	—	—	—	口縁横ナデ、内へラ削 り?、外削毛目	灰褐色	砂粒多く含む	00348
344	II	II	II	碗	(12.4)	—	3.8	横ナデ、ナデ?	淡赤褐色		00351
345	II	II	II	鉢	—	8.7	—	内外底ナデ	赤褐色	外傷付着	00352
346	II	II	II	須磨・甕	(11.1)	—	4.0	横ナデ、ナデ?	暗灰色		00349
347	II	30	II	II	(14.3)	—	—	外天井へラ削り、他横 ナデ、ナデ	II		00353
348	II	30	II	杯	(10.8)	—	4.5	外底へラ削り、他横ナ デ、ナデ	暗灰色		00350
349	II	II	II	馬杯?	(13.6)	—	—	外底へラ削り、他横ナ デ、ナデ	暗褐色		00354
350	44	S K13	土器・瓶	(25.9)	—	—	—	口縁横ナデ、体内ナデ	淡褐色	砂粒多く含む	00358

第8表 掘載遺物一覧7

遺物番号	探査回数	出土 遺構	遺物種類	口 桟	底(脚)径	器 高	調 整	色 調	その他の特徴	登録番号	
351	44	30	SK13	土器・蓋杯	(19.6)	—	横ナデ、ナデ?	淡赤褐色	砂粒多く含む	00361	
352	#	#	#	#	(13.6)	—	横ナデ、ナデ?	淡赤褐色		00357	
353	#	#	#	#	(19.2)	—	横ナデ、ナデ?	淡褐色	砂粒多く含む	00356	
354	#	#	#	#	—	—	内ヘラナデ、外ナデ	褐色	砂粒多く含む	00359	
355	#	31	#	#	—	(12.0)	横ナデ、ナデ?	褐赤褐色	大粒砂粒含む	00360	
356	#	31	#	瓶窓・蓋	(13.0)	—	外大ヘラ削り、他横ナデ?	灰褐色	焼きややあまい	00362	
357	#	#	#	受取張	(12.8)	—	外底ヘラ削り、他横ナデ?	#		00365	
358	#	#	#	蓋	(14.9)	—	周外ら凹目、波状文、他 横ナデ?	暗灰色		00364	
359	#	#	太器・不平	長さ11.4cm、最大幅3.7cm、最大厚2.1cm	—	—		#		00316	
360	#	S K14	筒生・蓋	—	(6.0)	—	内縁ナデ?	淡褐色	砂粒多く含む	00370	
361	#	#	土器・蓋	(17.8)	—	口縁ナデ、内底ヘラ 削り	#	#		00367	
362	#	#	#	鉢	(12.4)	—	外縁ナデ、内底ヘラ 削り	#		00368	
363	#	#	#	#	—	(4.5)	既存部ナデ	淡赤褐色		00372	
364	#	#	#	#	—	(6.0)	既存部ナデ	暗褐色	砂粒多く含む	00371	
365	#	#	#	#	—	10.9	内ヘラ削り、外縁毛目	暗赤色		00373	
366	#	#	#	高杯	(15.0)	—	横ナデ、ナデ?	淡褐色		00376	
367	#	#	#	#	(17.8)	—	横ナデ、ナデ?	木褐色		00375	
368	#	#	#	#	(20.0)	—	横ナデ、ナデ?	#		00374	
369	#	#	#	#	—	—	ナデ?	明褐色	砂粒多く含む	00378	
370	#	31	#	#	—	11.6	内ヘラ削り、他ナデ?	灰褐色	砂粒多く含む	00377	
371	#	31	#	#	—	13.4	横ナデ、ナデ?	暗赤褐色	砂粒多く含む	00379	
372	#	#	#	#	—	(15.0)	横ナデ、ナデ?	暗赤褐色		00366	
373	46	S K16	#	蓋	(15.7)	—	口縁外削り、内底ヘラ 削り	褐色		00399	
374	#	31	#	#	17.0	—	口縁外削り、内底ヘラ 削り、外縁毛目	暗赤褐色		00412	
375	#	31	#	#	—	14.2	内ヘラ削り、剥け目、外 縁毛目、ナデ痕?	暗褐色	炭化物付着	00413	
376	47	#	#	蓋	(23.7)	—	口縁外削り、内底ヘラ 削り、外縁毛目	#		00400	
377	#	31	#	#	(25.75)	9.2	23.4	口縁削ナデ、内ヘラ削り 外縁毛目、ナデ?	灰褐色	底部4ヶ所穿孔	00411
378	#	31	#	#	24.6	—	口縁削ナデ、内底ヘラ 削り外縁毛目	#	外縁付着	00409	
379	#	31	#	#	21.8	—	口縁削ナデ、内底毛目 ヘラ削り、外縁毛目	淡褐色		00410	
380	#	#	#	#	—	—	剥け目	褐色	把字のみ	00403	
381	#	32	#	蓋	(8.0)	—	9.5	口縁削ナデ、内ヘラ削 り、外縁毛目	暗褐色		00397
382	#	32	#	#	17.8	—	内ナデ、外縁ナデ、ナデ	淡褐色		00386	
383	#	32	#	#	17.8	—	口縁削ナデ、内ナデ、外 縁削ナデ、ナデ	暗褐色	外ヘラ彫文	00387	
384	#	#	#	#	(15.6)	—	口縁削ナデ、他ナデ	淡赤褐色	焼きややあまい	00383	
385	#	#	#	#	(15.6)	—	口縁削ナデ、内ナデ	褐色		00382	
386	#	#	#	#	(19.0)	—	口縁削ナデ、他ナデ	淡褐色	焼きややあまい	00384	
387	#	#	#	#	(16.0)	—	口縁削ナデ、他ナデ	淡赤褐色		00385	
388	#	32	#	#	—	11.9	内底毛目、ヘラ削り、外 ナデ	#	焼きややあまい	00388	
389	#	32	#	#	—	12.4	内底しづらし、横ナデ、既 ナデ	褐色		00389	
390	#	32	#	#	—	11.6	内、底毛目、ヘラ削り、 横ナデ、ナデ	淡赤褐色	焼きややあまい	00381	
391	#	#	#	#	—	(12.0)	外横ナデ、ナデ、他不明	#		00392	
392	48	#	#	鉢	(16.8)	—	剥けクッキ、既横ナデ	褐色		00401	
393	#	#	#	#	—	10.2	内ナデ、外タタキ、ナデ	淡褐色	破質、直縫縫合付	00402	
394	#	#	#	#	(11.2)	—	口縁削毛目、ナデ、内ナ デ、外ヘラ削り	暗褐色		00398	
395	#	32	#	#	(11.7)	7.4	6.3	内外ともナデ、ヘラナ デ	#	破質、縫合付	00396
396	#	32	#	碗	(12.7)	—	5.0	口縁削ナデ、外縁毛目、 内ナデ?	赤褐色	焼きややあまい	00393
397	#	32	#	#	13.5	—	6.0	口縁削ナデ、外縁毛目、 内ナデ?	暗褐色		00395
398	#	32	#	#	9.9	—	4.7	口縁削ナデ、剥下平ヘ リ	淡褐色		00394
399	#	32	#	瓶窓・蓋	(13.0)	—	3.7	外天井ヘラ削り、内天 井ナデ、既横ナデ	暗褐色		00405
400	#	#	#	#	(13.9)	—	4.2	外天井ヘラ削り、内天 井ナデ	#		00406

第9表 掘出遺物一覧表

遺物番号	地點	出所	土 連 様	遺物種類	口 番	底(脚)径	器 高	調 整	色 調	その他の特徴	登録番号
401	48	33	S K16	須恵・盤	(12.9)		3.5	外天井ヘラ削り、他模 ナゲ	灰色		00404
402		H		H 杯	(11.2)	—	4.2	内底ヘラ削り、他模ナ ゲ	H		00407
403	H			H 高杯	—	(10.6)		既存模、模ナゲ	H	推定4ヶ所達かし	00408
404	49	33	H	鉢	長さ12.45cm、最大幅5.15cm、最大深3.8cm、重量386g						00414
405	52	33	S K18	土器・甕	15.0	—		口縁模ナゲ、内へラ削 り、模ナゲ、ナゲ	淡青色	焼きややあまい	00416
406	H			H 高杯	(16.9)	—		外・脚朝白口、毫模ナ ゲ	茶褐色	内底斜付着	00418
407	H			H H	(17.6)	—		模ナゲ、ナゲ?	黄赤褐色	焼きややあまい	00419
408	H			H H	(14.2)	—		口縁模ナゲ、内ナゲ	淡青色		00417
409	H			H 杯	(5.0)	—		模ナゲ、ナゲ	青褐色	ミニチュア土器	00420
410	54	S K21	H	甕	(18.4)	—		口縁模ナゲ、底内へラ 削り	褐色		00437
411	H			H H	(22.2)	—		口縁模ナゲ、底内ナゲ	淡青色	焼きややあまい	00440
412	H			H 盆	(14.0)	—		口縁模ナゲ、底モルタル ナゲ	暗褐色	外底付着	00436
413	H	33	H	H 梶	(24.6)	—		口縁模ナゲ、底内模ナ ゲ、外タマタケ、ナゲ	淡青褐色	外底付着、焼きややあ まい	00442
414	H			H H	—	(13.0)		ナゲ	H		00439
415	H			H H	—	(10.6)		内へラ削り、ナゲ、外ナ ゲ	H		00445
416	H			H H	—			ナゲ	H	把手のみ	00441
417	H			H 高杯	(17.4)	—		口縁模ナゲ、外脚朝白 口	褐色		00430
418	H			H H	(17.8)	—		口縁模ナゲ、底脚朝白 口、ナゲ	H		00432
419	H			H H	(13.6)	—		口縁模ナゲ、脚毛口	天藍色	外底付着	00431
420	H			H H	—	—		内指しづらし、模ナゲ、外 模ナゲ	H		00433
421	H			H H	—	—		内へラ削り、ナゲ、外脚 毛口、ナゲ	褐色		00434
422	H	33	H	H H	—	—		内へラ削り、模ナゲ、外 脚毛口、模ナゲ	茶褐色		00435
423	H	33	H	H 瓢	(11.9)	—	4.7	口縁模ナゲ、内ナゲ、外 模ナゲ	淡青色	外底黒痣ある	00429
424	H			H 瓢	(14.8)	—		口縁模ナゲ、内へラ削 り、外脚朝白口	淡青色	外底付着、焼きややあ まい	00438
425	H			H H	—	(7.0)		内ナゲ、外へラ削り	淡青色	外底付着	00443
426	H			H H	—	(7.5)		内ナゲ、外模ナゲ、外底 ナゲ	淡青色	内外底付着	00444
427	H			H 甕	—	—		内ナゲ、タクタケ	淡青色		00448
428	H			H H	—	—		内ナゲ、タクタケ	淡青色		00449
429	H			H H	—	—		内ナゲ、タクタケ	H		00447
430	H	33	H	陶質・鉢	9.2	—		模ナゲ	青褐色	焼きやましい、把手付	00446
431	56	S K28	土器・甕	20.6	—			口縁模ナゲ、底内へラ 削り	淡青色	砂粒多く含む	00453
432	H	33	H	H 梶	13.7	—	4.7	模ナゲ、ナゲ?	明青褐色	砂粒多く含混	00454
433	H	33	H	H 瓢	—			内へラ削り、外脚毛口	灰褐色		00455
434	H			H H	—			把手付	淡青色	把手のみ	00456
435	H	33	H	須恵・杯	10.5	—	4.4	光背部凹下ラフ削り、 内脚朝白口、ナゲ	暗青褐色	底部変形	00457
436	H			H 高杯	—	9.4		既存模模ナゲ	淡青色	推定4ヶ所達かし	00459
437	H			H 瓢	(16.8)	—		外脚朝白状、他模ナ ゲ	H		00460
438	H			H 高杯	(28.6)	—		外脚朝白状、他模ナ ゲ	H		00458
439	57	S K29	土器・高杯	(20.9)	—			口縁模ナゲ、底ナゲ?	淡青色		00462
440	H			H H	—	—		内へラ削り、外へラナ 削り、模ナゲ	茶褐色	推定2ヶ所穿孔	00463
441	H	33	H	H 瓢	(11.4)	—	10.8	口縁模ナゲ、内へラ削 り、外脚毛口	褐色	保付書	00461
442	H	58	S K05 · 06	H 高杯	—	(13.9)		内へラ削り?、外脚毛 口、危険口	暗褐色		00508
443	H			H 甕	(12.5)	—		外天井ヘラ削り、他模 ナゲ	灰褐色		00505
444	H			H H	(11.9)	—	4.3	外天井ヘラ削り、他模 ナゲ	淡灰褐色		00506
445	H			H 高杯	—	(8.9)		外底部上位カキ口、他 模ナゲ	灰褐色	4ヶ所達かし	00507
446	H	34	H	H 瓢	(19.2)	—		模ナゲ	灰褐色		00504
447	H	S K12	H 瓢	(11.6)	—	4.4		外天井ヘラ削り、他模 ナゲ	淡灰褐色	古武3次鑄造	00522
448	H	S K35	土器・甕					内口縁模ナゲ、内脚部へ 削り?、他模ナゲ	淡青褐色		00523
449	S9	S D01	弥生・甕	(23.6)	—			口縁模ナゲ、他脚毛 口	暗褐色		00469
450	H			H H	(24.1)	—		口縁模ナゲ、他脚毛 口	褐色	口縁模付書	00472

第10表 掘載遺物一覧 9

遺物番号	開拓区	出土地	遺物種類	口径(脚)径	器高	調査	色調	その他の特徴	登録番号
451	59	S 区 P01	弥生・樂	—	(8.0)	ナデ	褐色		00479
452	#	#	#	—	(6.8)	内ナデ、外副毛目、横ナデ	淡褐色		00478
453	#	#	#	—	6.8	内外副毛目	褐色	底部付着	00480
454	#	#	# 盆	(20.3)	—	内副毛目、横ナデ	淡褐色		00471
455	#	#	# 高杯	(33.6)	—	口縁横ナデ、外副毛目	褐色		00493
456	#	34	# 牽台	6.6	9.6	9.7 押え	褐色		00470
457	#	34	# 盆	16.0	4.0	8.0 口縁横ナデ、内副毛目、ナデ突起、外副毛目	#		00467
458	#	#	# #	(17.7)	—	外副毛目付ナデナ、地 副毛目	淡褐色		00473
459	#	34	# 盆	(9.1)	—	口縁横ナデ、内ヘラナ デ、外副毛目、ヘラ突起	灰褐色		00477
460	#	34	# 杯	8.0	2.9	3.5 ナデ	#	手形ね上部	00468
461	#	#	土師・蓋	(17.4)	—	内内ヘラ突起、地横ナ デ	淡褐色		00474
462	#	#	# #	(14.7)	—	脚片ヘラ突起、地横ナ デ	褐色		00475
463	#	#	# 盆	(11.0)	—	脚片ヘラ突起、外副毛 目、毛根ナデ	淡褐色		00476
464	#	34	# 防護罩	最大径5.1cm、最大厚1.8cm、穿孔径0.8cm、重量78.8g					00482
465	60	D 区 P36	弥生・樂	—	(7.2)	内ヘラナデ、外ナデ	淡褐色	外側付着	00496
466	#	C 区 P11	土師・蓋	(8.4)	—	口縁横ナデ、内副毛 目	淡褐色		00494
467	#	D 区 P 5	# 高杯	—	—	内ヘラ突起、外横ナデ	淡褐色		00495
468	#	D 区 P43	# 盆			ナデ、内ヘラ突起	淡褐色	把手のみ	00497
469	#	J・I 区 P 3	# #			ナデ、内不規	赤茶褐色	把手のみ	00503
470	#	34 G・II 区 汎土	# #			ナデ、ヘラナデ	淡褐色	把手のみ	00491
471	#	H 区 P 7	# 蓋?	—	—	内ヘラナデ、外タスキ	灰色	外沈線、保付管	00502
472	#	34 G 区 P21	須恵・蓋	—		内天井ナデ、外天井ナ キ目、地横ナデ	#	外級状況、達かし	00490
473	#	G 区 汎土	# 蓋?	—	—	横ナデ	灰褐色	内島足状タスキ	00492
474	#	E 区 P44	青磁・鏡	—	—	無地	褐色		00498

第11表 掘藏遺物一覧10

#### 表凡例

口径・底(脚)径・器高……数値の単位はすべてcm(センチメートル)。この規格に合わないものは別表記をして  
いる。( )内は復元数値。

色調……主だった色調を記載。内外面別色の場合は外面色を表記。

登録番号……表記の数値の頭に8415(遺跡調査番号)を付けたものが正式な遺物登録番号となる。例えば00001  
は841500001が正式番号である。

# 図 版



1

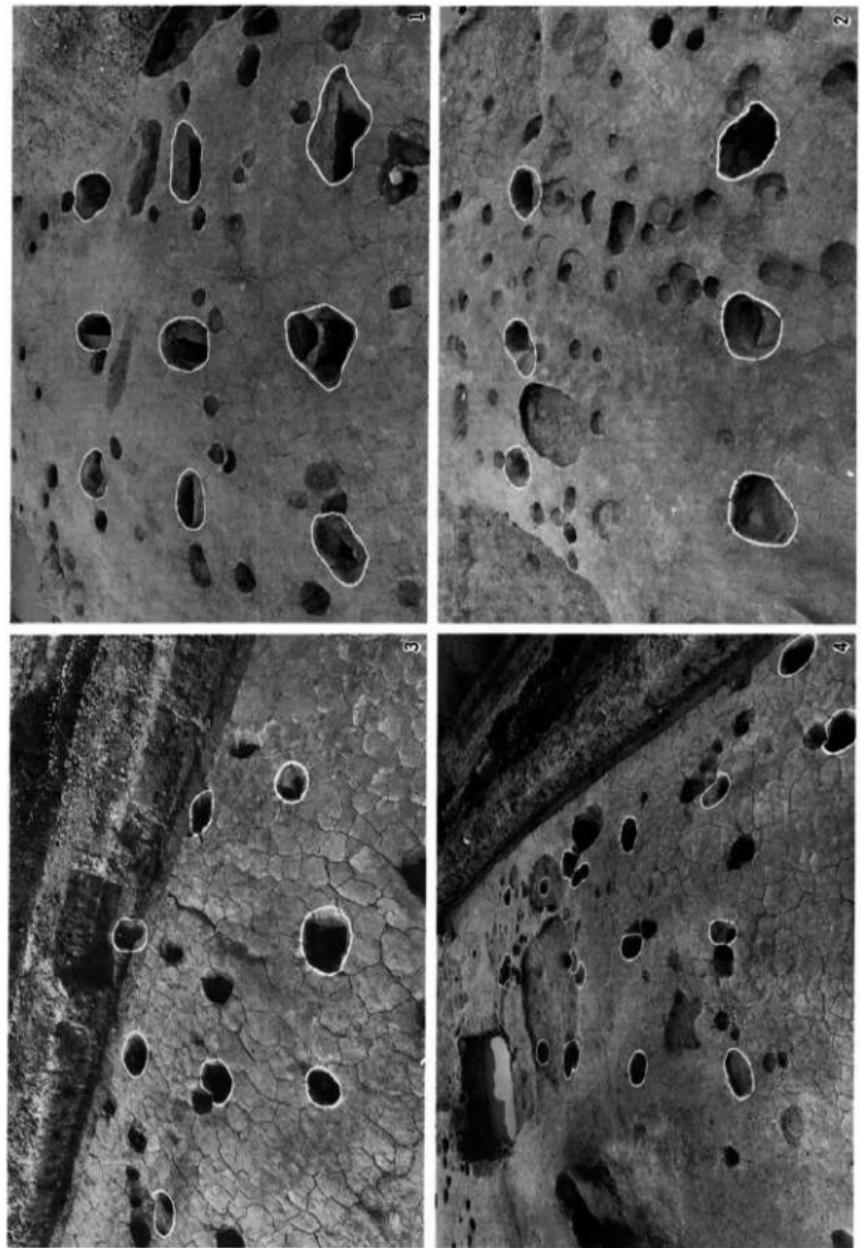


2

1) 調査区全景（東上空から） 2) 調査区全景（南上空から）

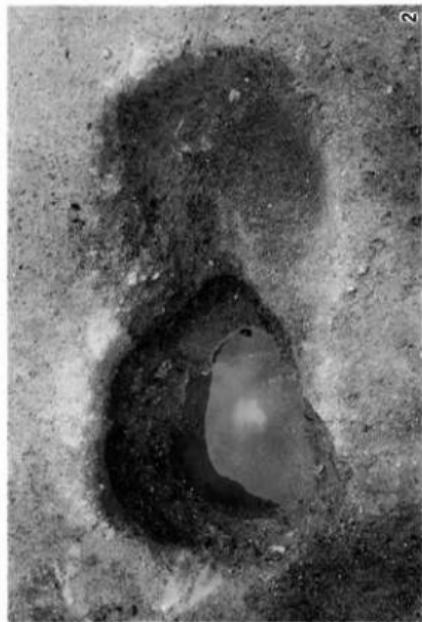


1) 調査区全景（西から） 2) S B03・S D01（北東から）

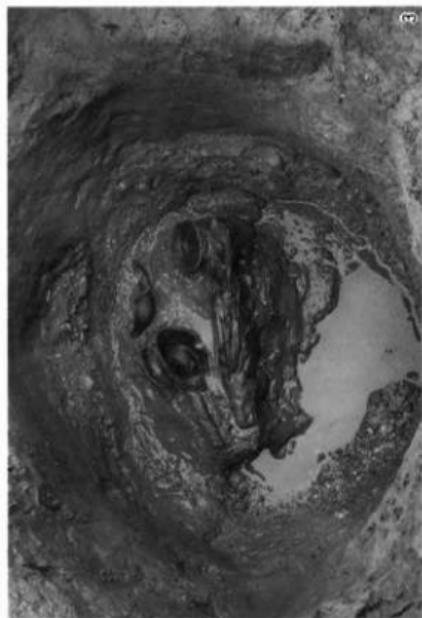




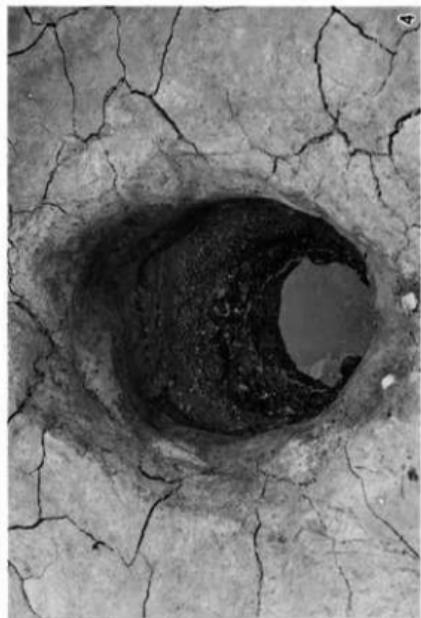
1



2

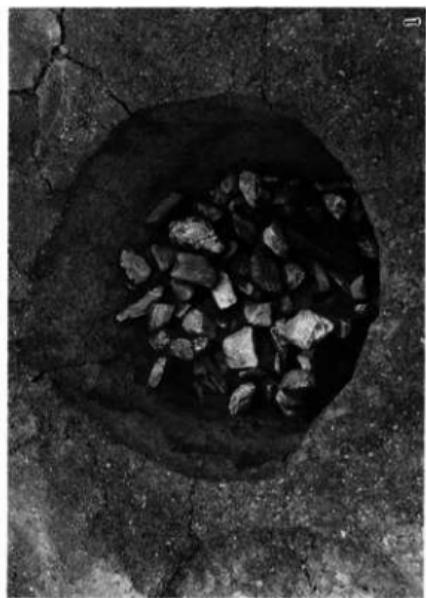


3



4

- 1) SE 19遺物出土状況
- 2) SE 19完掘後
- 3) SE 20遺物出土状況
- 4) SE 20完掘後



1



2



3

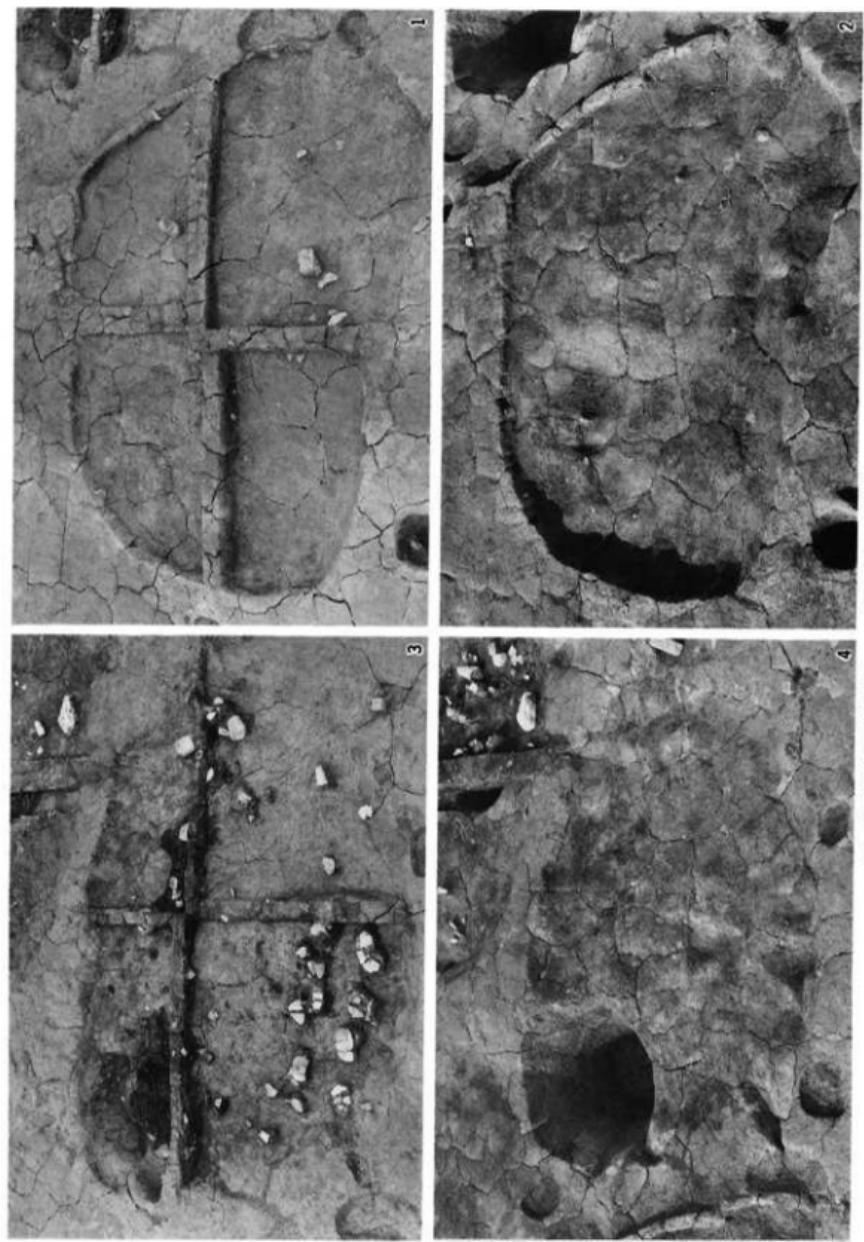


4

- 1) SE23遺物出土状況  
2) SE23完掘後  
3) SE27土層  
4) SE27完掘後



S K01 1) 北から 2) 東から





1



2

1) SK 05・06・07、S E 30完掘後（南から）

2) SK 05下層遺物出土状況（北西から）



1



2

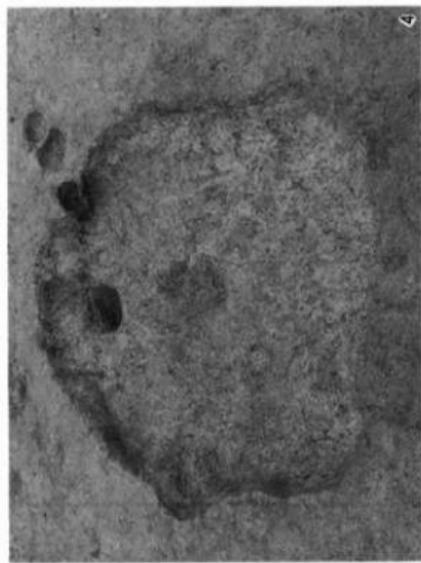
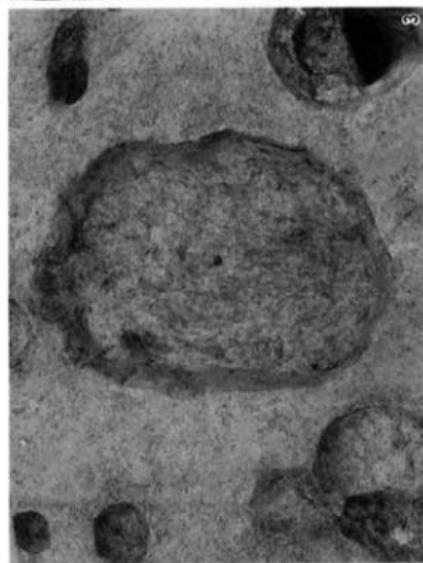


3

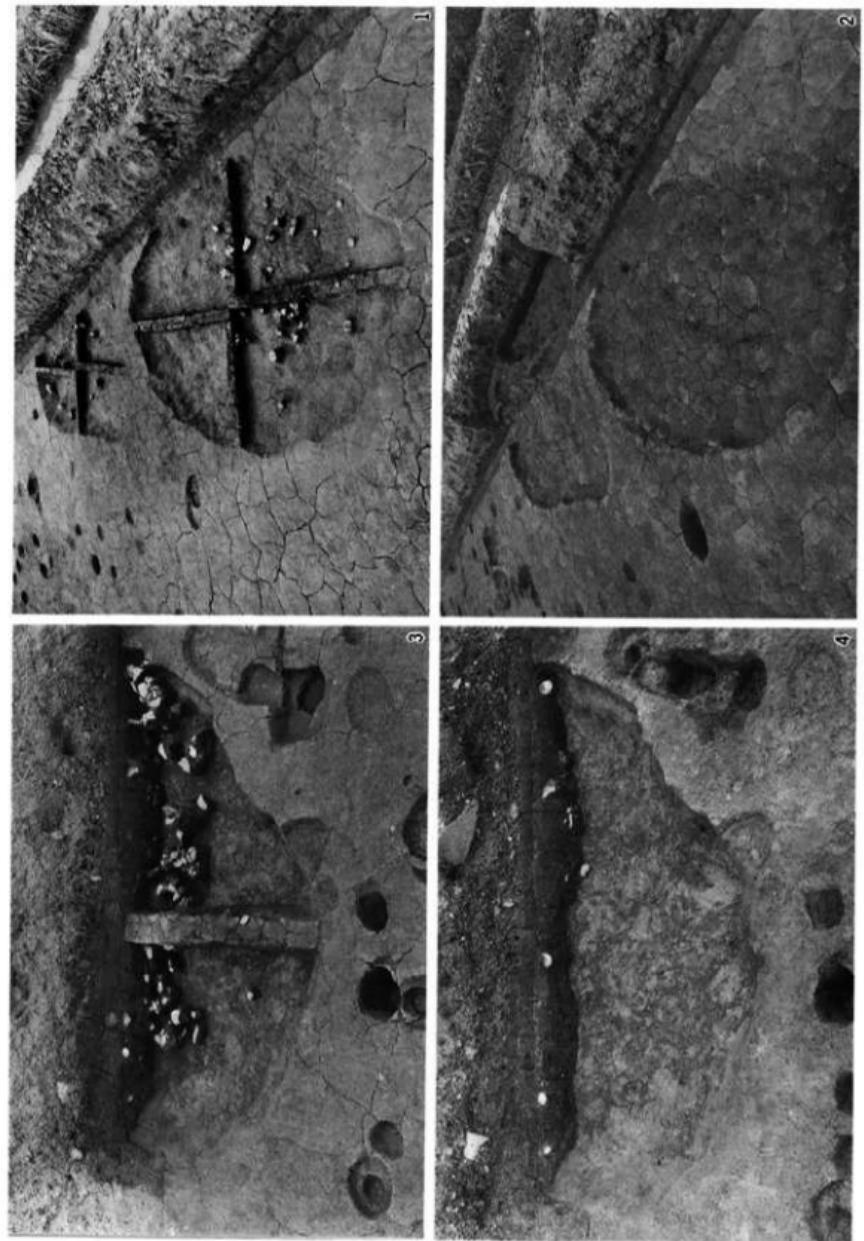


4

SK05 1) 上層遺物出土狀況  
2) 南側落込み遺物出土狀況  
3) 平鉗 (281) 出土狀況  
4) 子持勾玉 (278) 出土狀況

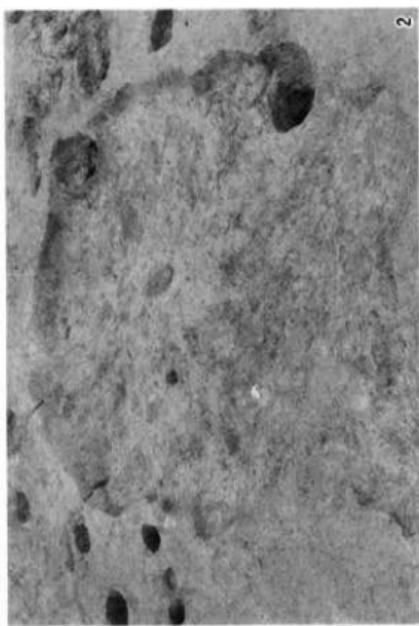


1) SK06・07遺物出土状況  
2) SK08遺物出土状況  
3) SK09完掘後  
4) SK10完掘後





1)



2)



3)



4)

- 1) SK14遺物出土状況
- 2) SK14完掘後
- 3) SK17・18遺物出土状況
- 4) SK17・18完掘後



1



2

S K15・16 1) 北から 2) 東から



1)



2)



3)



4)

- 1) SK21遺物出土状況
- 2) SK22遺物出土状況
- 3) SK28遺物出土状況
- 4) SK29完掘後





020



026



021



028



024



029



025



031



032



036



033



034



038



035



039



040



043



041



044



042



045



047



050



048



051



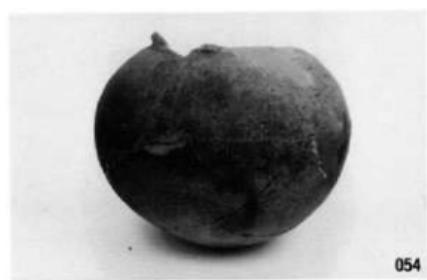
049

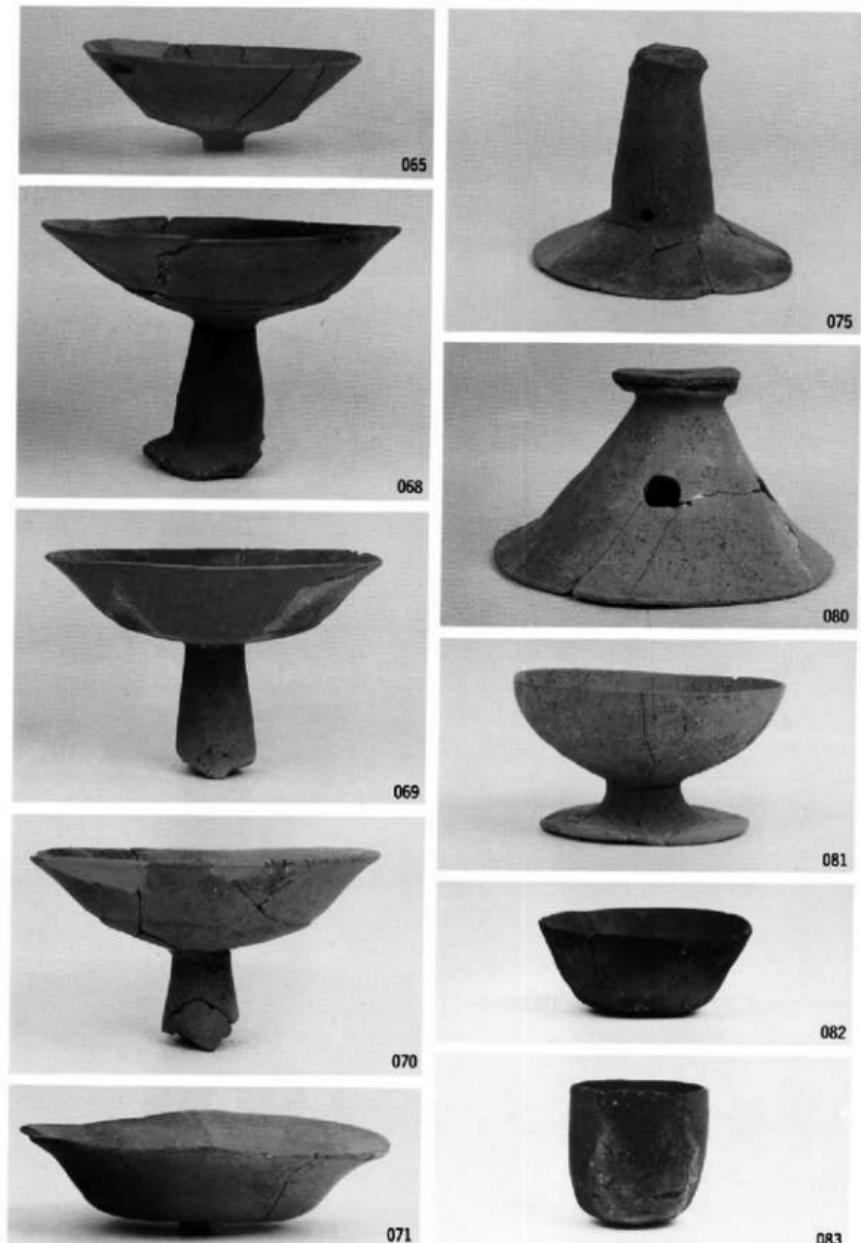


052



053





出土遺物 7



085



091



086



093



088



094



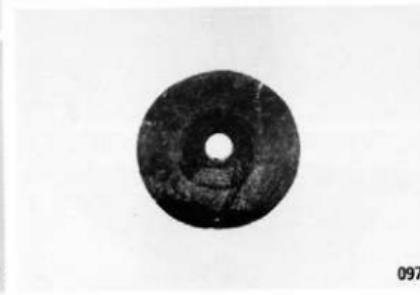
089



095



090



097



106



126



107



129



111



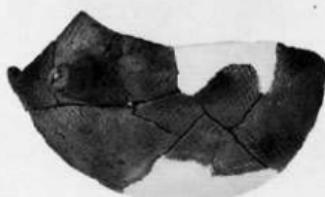
112



130



125



132





167



174



168



176



169



177



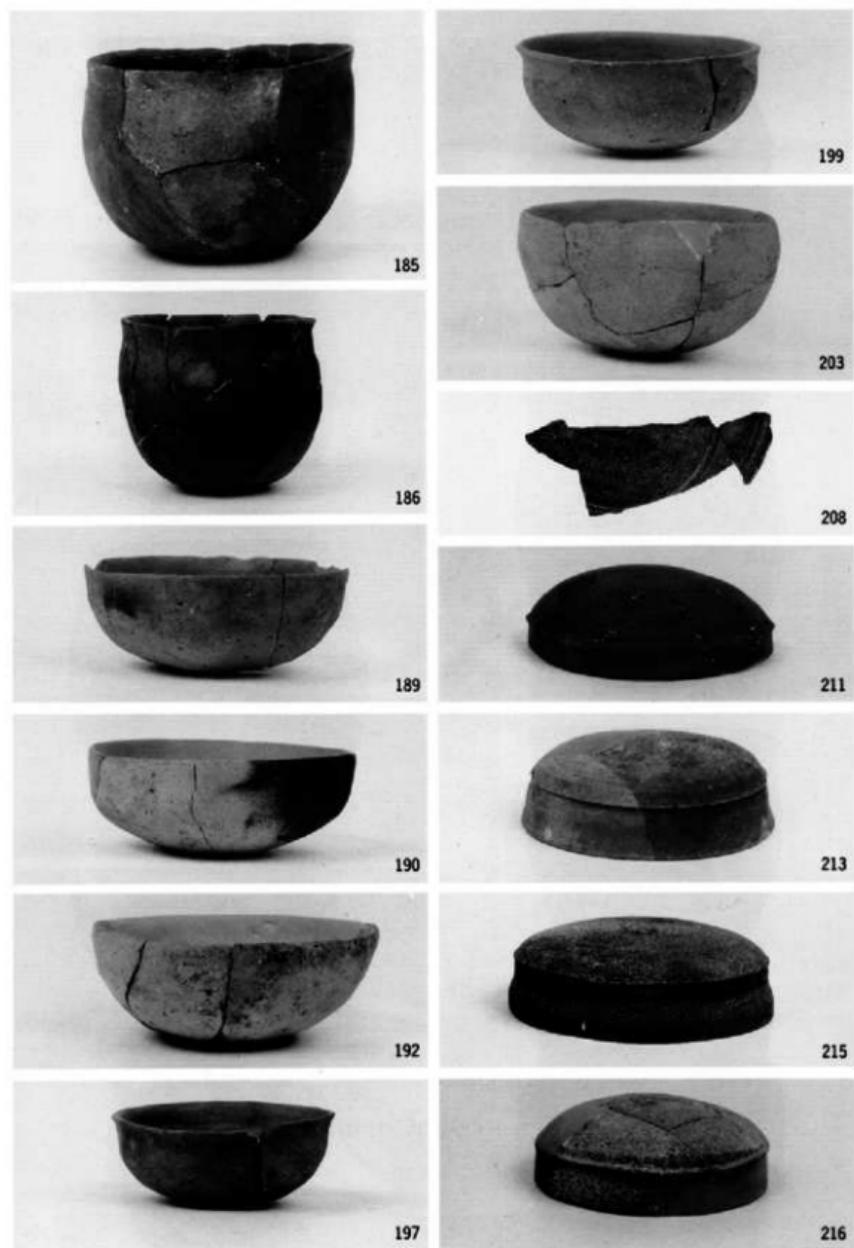
170



178



184

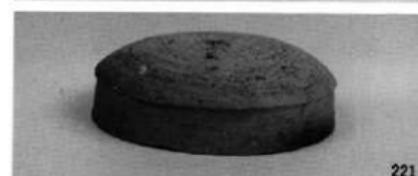




220



231



221



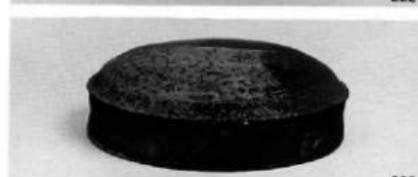
232



222



233



223



235



224



237



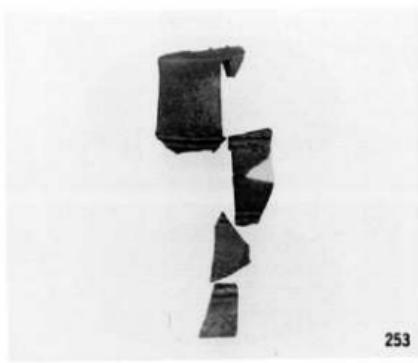
227



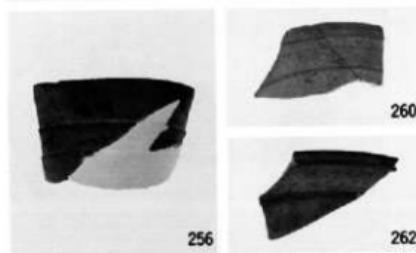
238



243



253



256

262

260



273



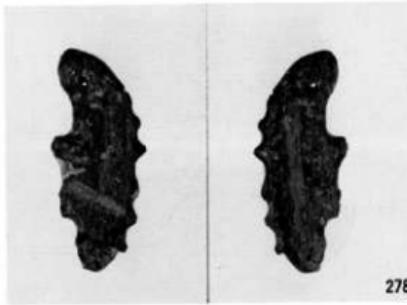
264



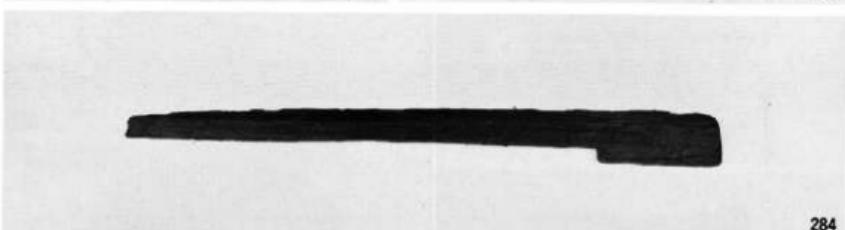
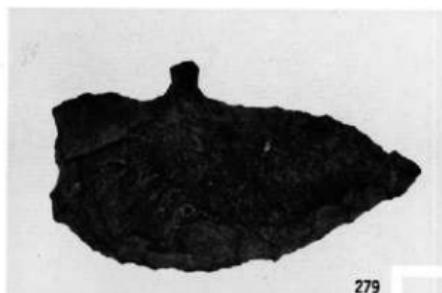
277

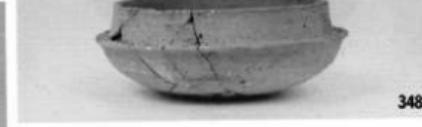


265



278







355



356



370



371



375



374



377



378



379



381



390



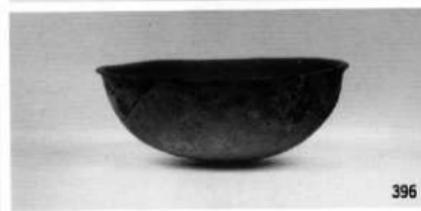
382



395



383



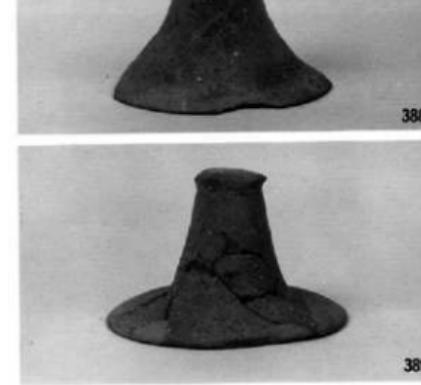
396



388



397



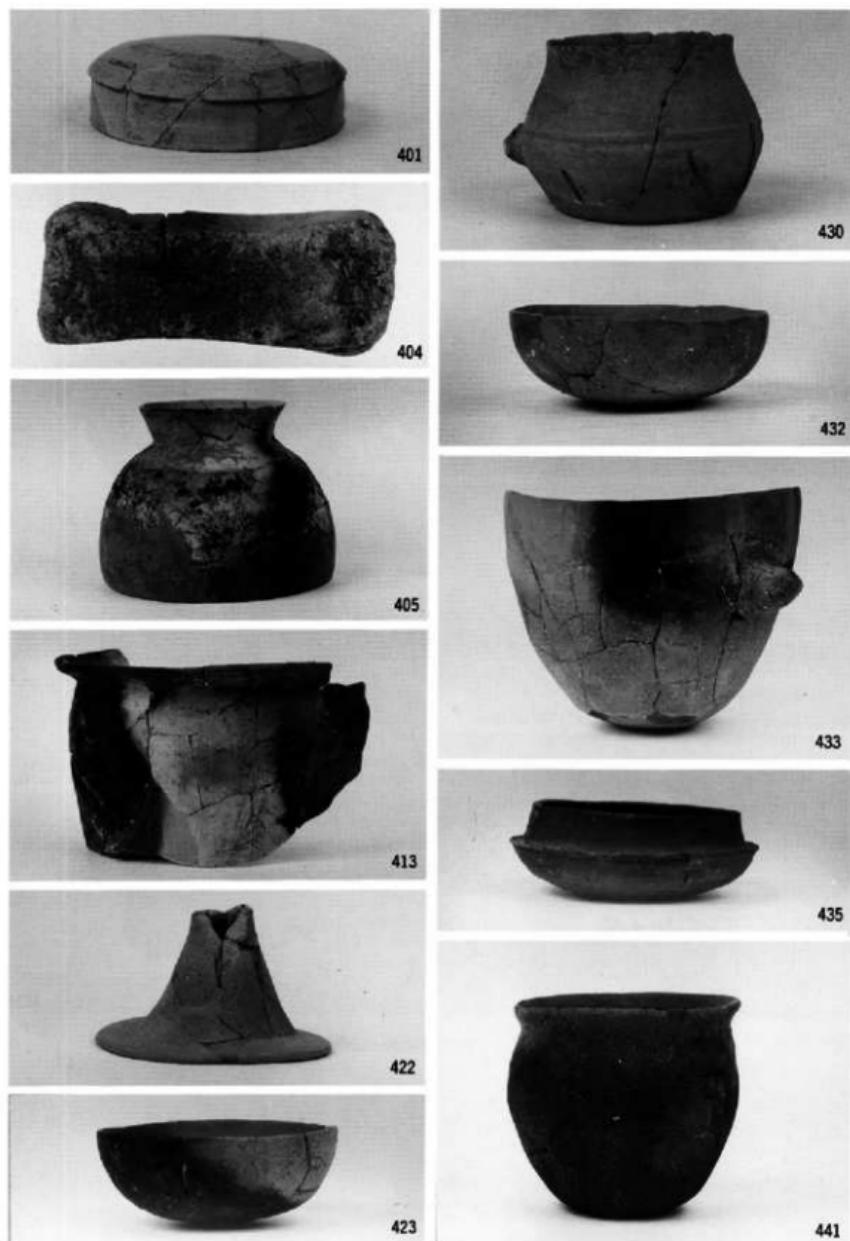
389



398



399





446



450



456



464



457



470



459



472

出土遺物20

## 吉武遺跡群IV

市道田・飯盛線関係埋蔵文化財調査報告II

福岡市埋蔵文化財調査報告書第194集

1989年3月31日発行

発行 福岡市教育委員会

福岡市中央区天神1丁目7-23

印刷 栄光印刷株式会社

福岡市東区松田1丁目9-30

